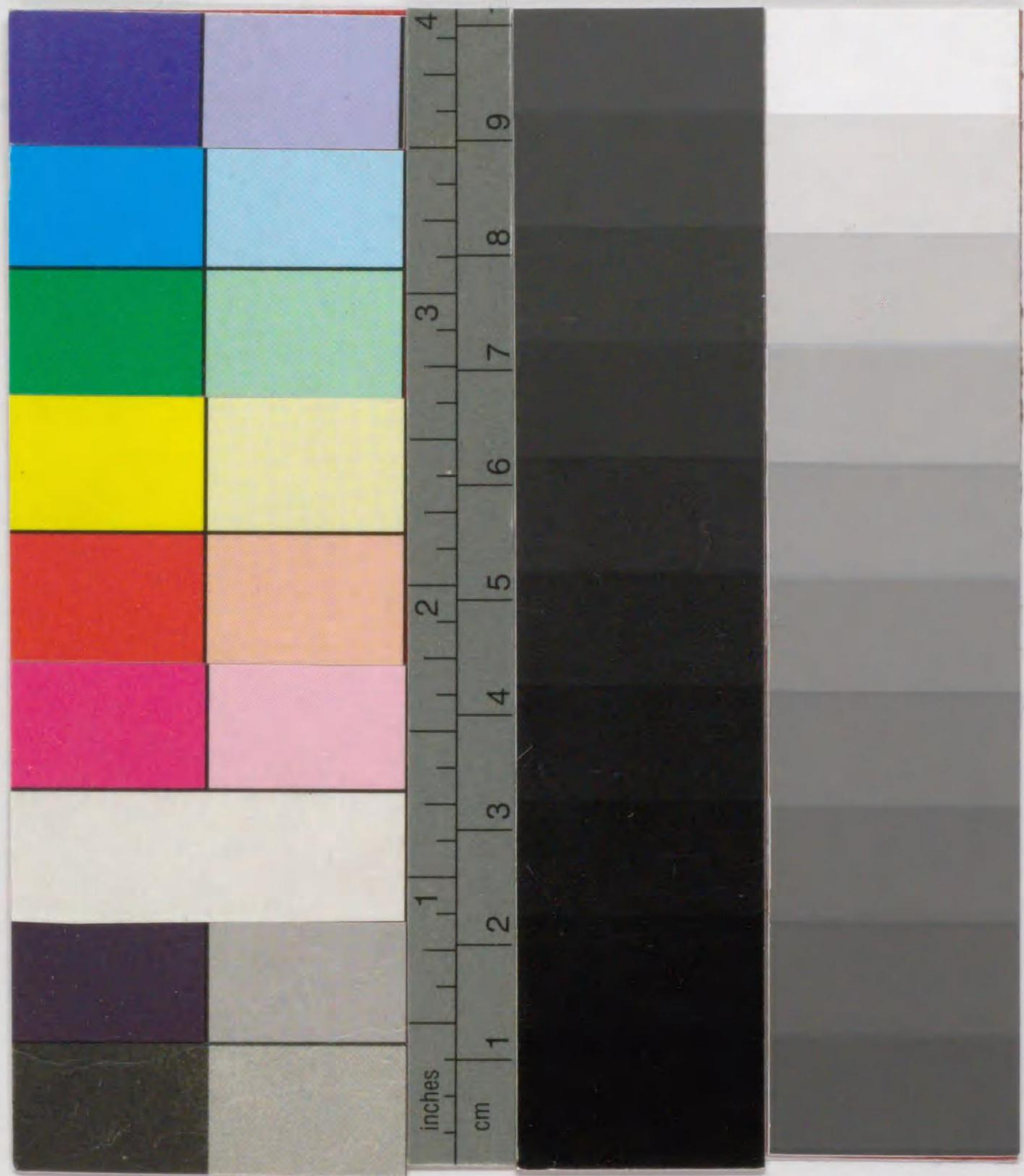


582
6

582-66



1200501522554



6. 2. 12

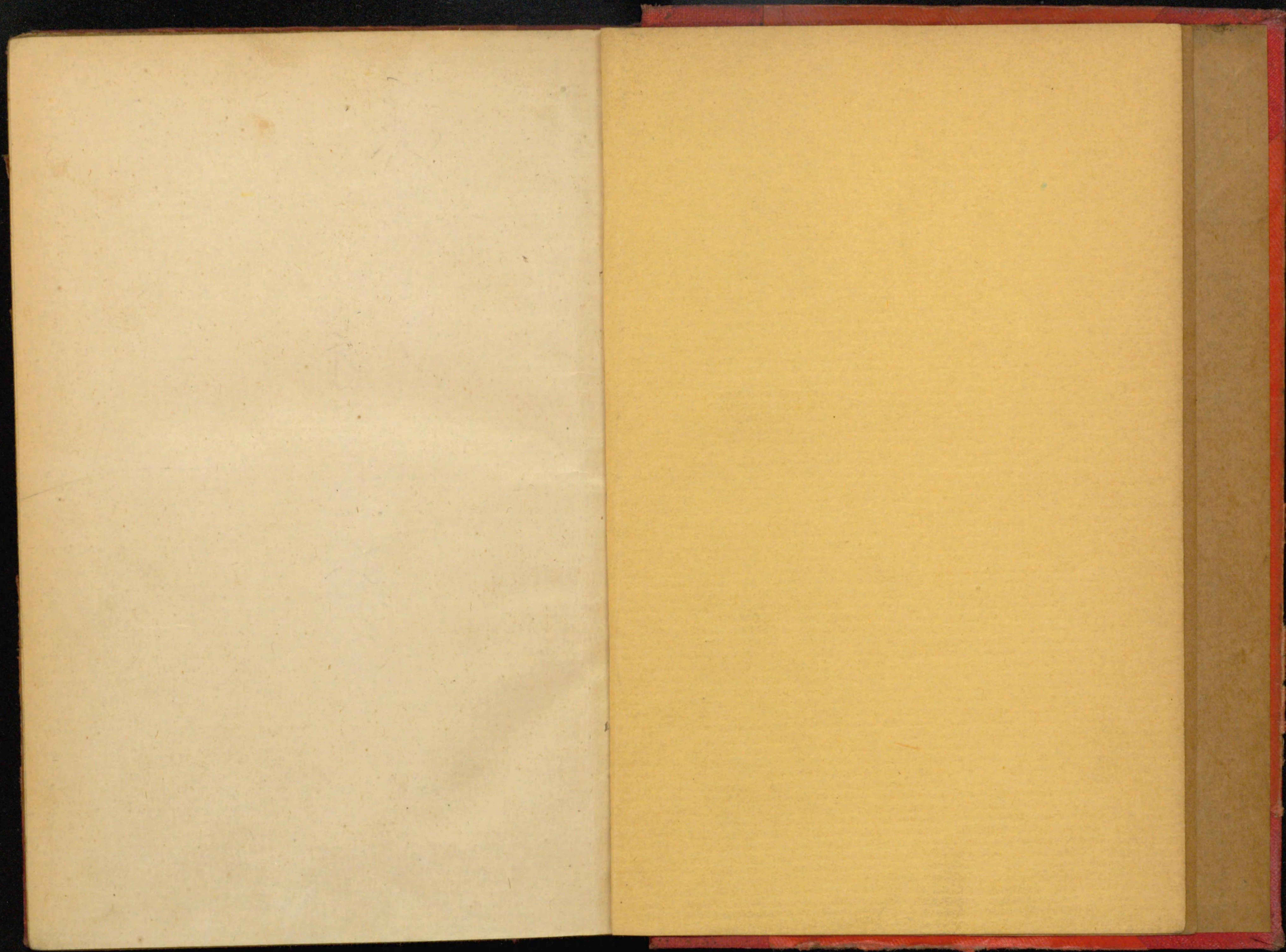
福田正夫作

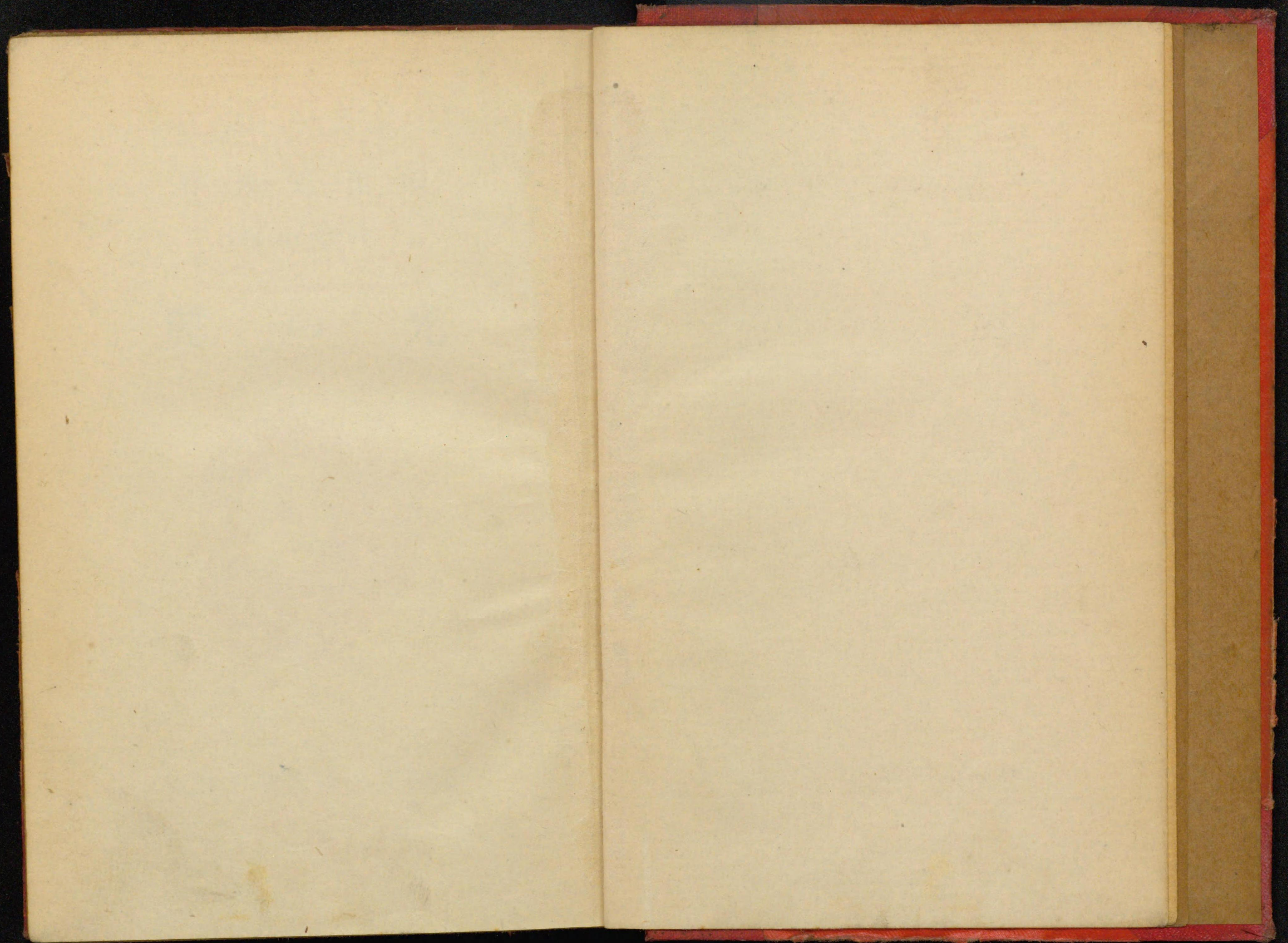
長篇小説

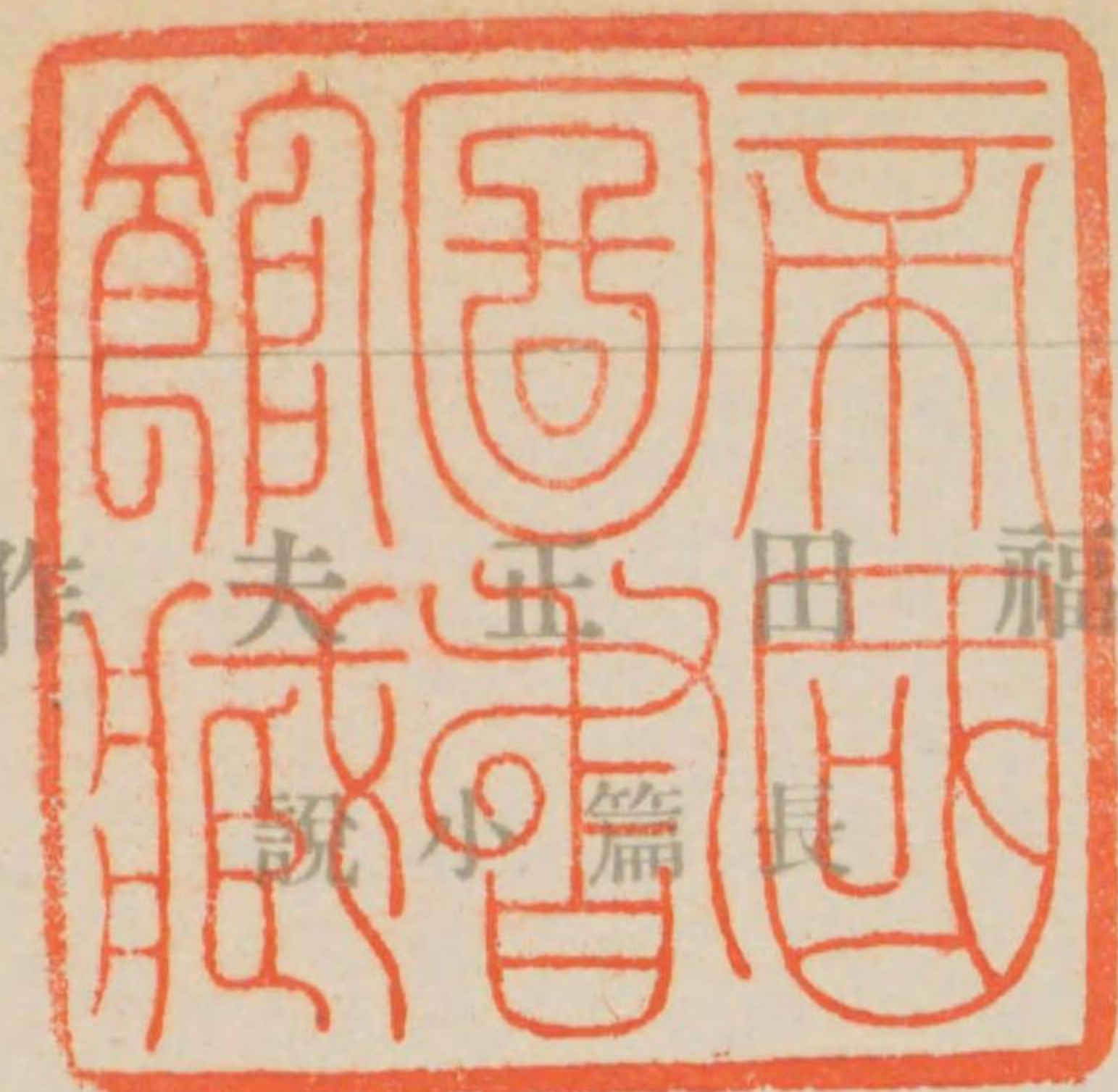
光の翼

1928版

福田正夫詩集刊行會版







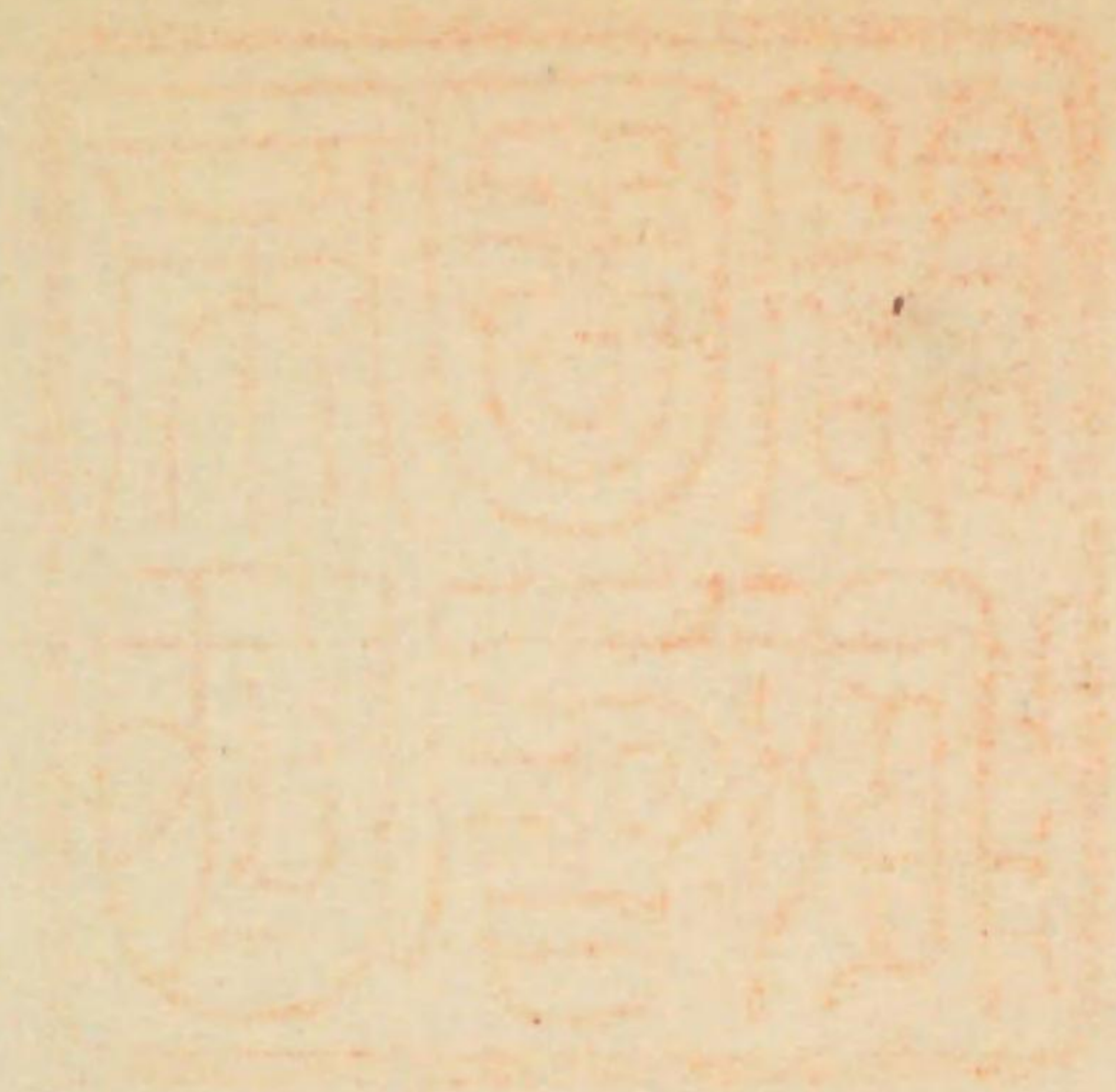
福田正夫作

小説館

光の翼



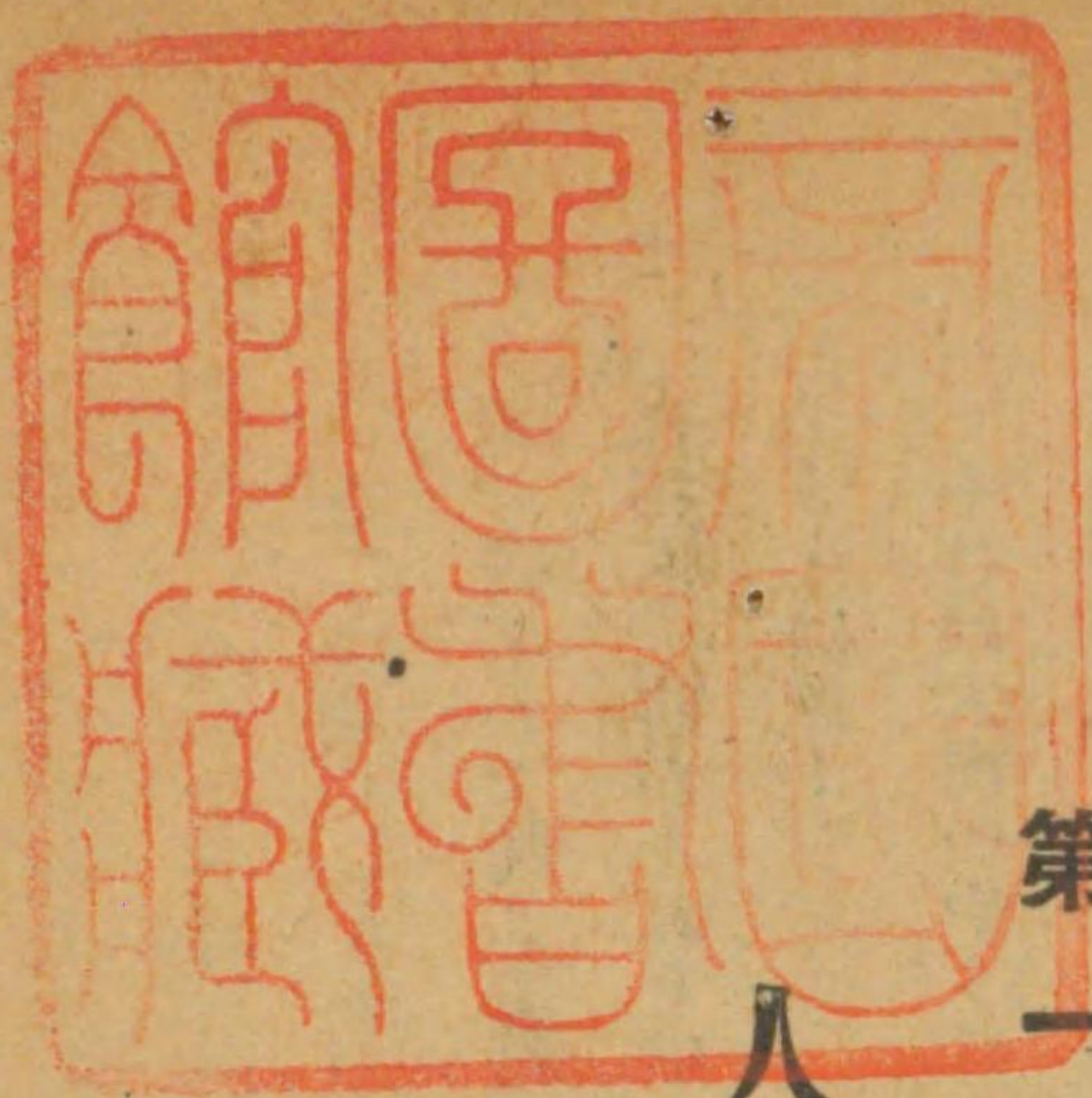
福田正夫詩集刊行會版



光の翼・全八篇・目次

第一篇	冬	人生は暗いか	四
第二篇	早春	戀のピエロ	六七
第三篇	春の恐れ	受難の人々	一〇七
第四篇	晩春の惱み	失はれた童貞	一五七
第五篇	夏の高原	ニヒリストの没落	一八七
第六篇	夏の都會	虚無の風貌	二五三
第七篇	秋	滅び行く者	二九三
第八篇	秋より冬へ	暗黒に生きる	三五五





第一篇・冬

人生は暗いか

高貴な終りを見つけた人間のめぐりには
天使がなくとも神がある。

(ヘマーソン「人生」断章)

全 序

そこは果てしもなく広い、暗黒の曠野であつた。——人生！そこに無数の魂が、さまよひ、求め、苦しんで消えて行つた。よるところのない砂漠の中に、名もなくそれらは埋れて、骨は碎け魂は朽ち、時がそれを虚しくした。

……虚無！

それは大海のやうに人生をつゝんでゐる。

果てしもない暗黒の底で、人間はあるがまゝにかうして死ぬ、ほろびる、それつきり。——あゝ、人生はそれでいゝのであらうか、果たしてそのまゝでいゝのであらうか。

『いゝぢやないか、人生なんてからつぽなものさ。さうしてそれ以上になんにもありはしない——どうせ、なにをしたつて同じことなんだ。』

『さう、なるほどさうだ。』

『だから、求めたり、苦しんだりするのは馬鹿らしいことだよ。あるがまゝにあれ！ どこまでも人生はこのまゝさ。』

『うむ、それもわかるよ！』

『それも？……ぢやあ、外にも道があるといふのか。』

『さうだ、あるがまゝにあれ、といふことは、うごいてゐない人生を言ふのではない。動搖し、求め、苦しんでゐる人生、そのあるがまゝにあれといふのだ！ どんなに虚無に一致しようとしても人生はそれ自ら虚無でありながらうごいてゐる。生んでゐる、限りなくつゞいてゐる。……そこに少なくとも、生きの道の姿がありはしないか。』

『それは知らない。』

『知らない！ 誰がなにを知つてゐようか。……信ずることだ、光を信ずると共に暗黒をも信ずることだ。——なにをしたつて同じだから、求める、苦しむ、それでいゝぢやないか。』

『でも、人間は死ぬんだぜ、死ぬんだから……そんな無駄なことをしないで。』
『樂しめ、と言ふんだらう。が、樂しむとはなんだ？ それは求めることで棄てることではない。望むことで絶望することではない。……さうして人生は虚しいから、絶望だから、それを極めるところに、正しい苦しみがあるのだ！ 絶對にして唯一なる虚無！ それを求めることによるこびが

あり、さうしてそこに到つた時、虚無こそは大きな實在で暗黒こそは大きな光だ、と信じられるとしたら、どうだ？ それを信じて求めることが、正しい樂天ではないのか。それが果たして無駄だと言へるであらうか。……われらはさうして消える、名もなくほろびてしまふ、しかもそれこそ、どんなに小さいとしても虚無といふ大きな光の中につままれる存在なのだ。——そこに小さな人間の、大きく生きる姿を見ようではないか。』

かくして物語は……暗い夜、少なくとも人生をつんでゐる暗黒からはじまらねばならぬ。——そこにこそ、苦惱を求めるとに生きる一つの魂があるのであつた。

—

その夜は深い霧が街々をとざしてゐた。明るい灯の下を白い煙のやうにそれが這ふかと思ふと、高い灯の蔭では空が呼吸をついてるやうにそれが流れるのであつた。それは曉にならない中に地上に凍つてしまふ霜の母であるにしろ、都會に擴がつて家々を幻の海の中にうづめてしまつた。さうして人々は影のやうに、その海に浮びまた消えて行くのであつた。

彦一はその海を泳ぐやうに、小石川の植物園の前通りをとほとほと歩いてゐた。彼はどこか人好きのする瘦せ顔の青年で、大學の制服の上に古ぼけたオーバーを着込んでゐた。なにかの屈托が彼を陰気にさせ、手をかくしにつゝ込んだまゝうなだれてゐるのであるが、明るい灯を見つけると霧をすかして看板や門札の所書を見ようとして立ち止まつた。

まだ宵の口で、しかも正月だといふのに、その通りは人の往來が絶えてゐた。彼は二度三度立ち止まつたが、それが無駄なことがわかつてはつきりこいた。

『困つたなあ。』

だが彼はまた隋力でおされる車のやうに四五間歩いてから角の煙草屋を見つけた。そして裏口を取り出して小錢を數へると、すぐにその硝子戸をあけた。

『バットを二つ下さい。』

隙間から這入つて来る濕氣に、寒さを感じて火鉢の火をかき立てゝゐた肥つたかみさんは聲に應じて立ち上つた。さし出された煙草をうけとつて金をわたすと、彼は冷くなつた頬に手をあてながらたづねた。

『この邊に外山つて家はありませんか。』

『外山？ 何番ですえ。』

『四十七番地なんです、御殿町の。わかりませんかしら。』

彼が途方にくれたやうにつゝ立つてゐるのを見ながら、かみさんは小首をかしけた。しかし思ひ出せないらしかつた。

奥から主人の聲が起つた。

「横町の上田屋ぢやあないかい。あそこが外山庄トヤマなんとか言つたぜ。」

「あ、それなら銘酒屋ですよ、向ふの横町の。」

「え。」

彦一はあはてた。

「銘酒屋ですつて？」

「御存知ぢやあないんですか。」

主人が瘦せぎすなほの白い顔を奥の方からちらりとぞかせた。暗い電燈の下でそれは獨酌にいつてゐるらしかつた。そして人慣れた調子でたづねた。

「どんな御用でいらつしやるんです。」

彦一はまたあはてた。

「なに、その、ちよつとたのまれて、かけあひごとなんです。」

「あそここの主人にですか。」

「え。」

主人は妻にでも話かけるやうに奥から顔をのぼした。

「あそここの主人はなかなかもんですぜ、なあ。(かみさんがうなづいたので主人はつとけた。) わるの方ぢやあ評判ものですよ、今日も三四日前に雇つた十四ばかりの女の子をひどい目に逢はせて、ひいひい泣かせたのを、それがきいて來たんです。」

「さうですよ。」

かみさんもうなづいて主人に言葉を合せた。

「小さな女をどこからか買つて來たんですわね。わるい奴ですよ。」

「はあ。」

彦一はその話には無關心だつた。彼はすぐにかみさんからその家の所在をきいて、せかせかと歩き出した。さうして二三分の後にはおしへられた二階家の前に立つてゐた。「上田屋」と浮き出たやうに明るく曇硝子にうつゝてゐる扉の前に、彼はその夜の自分の立場を考へてためらつてゐた。霧は流れるやうに彼にまつはつた。そして間口のせまい安い西洋建てのその家が。なにかの冒險を暗示するやうに彼の胸をときめかせてゐた。

彼は思ひ切つて扉をおしあけて中へつかつかと這入つた。せまい土間の片隅に小さな卓が三つほ

どおかれて、汚い椅子がそれに寄せられてゐた。さうしてうす暗い階段が左手から折れ曲つて二階へとみちびかれてゐた。

『いらつしやい。』

奥の上り段のところにかぢかんでゐた青白い女が物ぐささうに立ち上つた。

彼は立つたまゝで帽子をぬいだ。

『外山庄三、さんて、こちらの御主人はゐますか。』

客でないとわかると女は坐つて奥の方へ聲をかけた。

『旦那、お客ですよ。』

『う……………。』

なにかの返事が奥から洩れて來た。彼は立つたまゝで待つたが、主人はなか／＼出て來なかつた。彼は胸がわき立つやうな氣がした。さうして女が自分を見てゐるのを知るとついと眼をそらしてしまつた。その家中がむせつほく汚れてゐるやうで、逃げ出したいやうな氣もしたがぢつと耐えてゐた。明日にも入用な五十圓がこゝで出來るかどうかと思ひ煩ひながら、彼は胸のかくしをさぐつて見た。證書はそこに厚くかさばつてゐた。

二

彦一の父の退職陸軍中佐大谷武彦は在隊中「白銅少佐」といふ綽名を持つてゐた。大尉時代までは火のやうに明るい性質で、ちつともしまりなく酒を呑んで遊蕩をつゞけてゐたのだつた。しかし覇氣があつたので上官に可愛がられて、甲府から赤坂の聯隊に廻はつて來たのもその引き立てであつた。が、東京ではその彼もひどい借金をしてしまつて、あけくに妻君を持つてがらりこ性格を變へてひどいしまりやになつてしまつた。

その妻は金貸の一人娘だつた。小柄な可愛い顔をした二十七といふ婚期をすぎたこは思へないほど色が白かつた。傷といふのはひどい跛であつたことで、その病的に大きくひらいてゐる眼が彼女の不幸をはつきりと語つてゐた。そして彼女の父親はいざ言へば身分の關係で弱くならねばならぬ軍人相手に取引をしてゐた。東京に來て酒呑みの大尉が引つかゝるやうになつたのもその父で、ある時借金で首がとぶかも知れない彼が自暴になつて談判に出かけた。そして酔つて見さかひのなくなつた彼は主人のゐない家に上り込んだのだつた。

借金の方の話を友達が仲に立つて三月四月とのぼしてゐる間に妙なことが持ち上つた。娘が懷妊

してしまつたのであつた。

父親に責められて娘は白状した。

父親はひどく怒つて彼ばかりではない、友達にまでその問題を持ち込んだ。酒の過失だと言つてわびても済まされることではなかつた。

『妻に貰ふことにしよう。』

『一人娘だからそれは困る、婿に這入つてくれ。』

そんな話が友達を間にしてはじまつた。うけ引かねば頑固な父は訴へると言つて肯かなかつた。さうして遂に武彦は下宿を引き拂つて大谷を名のることになつた。彼が官職もすてる言つて肯かなかつたのを友達がなだめたのであつた。

彼はその妻に言つた。

『俺は金と酒を憎むんだぞ。そしてお前も憎んでやる。』

男の子が生まれたが彼は見向きもしなかつた。(それが彦一であつた。)快活な彼が沈鬱になつて、少しのことでもがみがみ従卒などを叱りつけるやうになつた。そして少佐になつたばかりの時、釣銭が足りないと言つて従卒から五錢白銅を取り上げた。彼は白銅少佐と呼ばれるやうになつた。その白銅少佐ば七年ばかりして退職する時中佐を貰つた。それから妻の父が死んでそのあとをついて

金貸になつたのだが、自分だけは放埒をしても他人に對してはひどくきびしかつた。金のことなる妻にさへ一錢も自由にさせないほどであつた。冬に逢つて水が凍るやうに、彼の血が人生の冷たさに逢つて凍つてしまつたのだつた。

けれどこゝに呪はれた者よ！ と聲をあけて泣かないではゐられない者が、その間にあつた。それは彦一であつた。

冬の氷河を越えて、

私は夏の成長を、

そして荒れはて積まれたる雪堆をこほしてその下に暖い薔薇の芽を見る。

エマーソンはさううたつたが、彦一は可愛い、あどけない性質であつただけに、父の冷酷さがはげしく身に泌みた。さうしてそれは彼が小さい時、ひよわく育つただけになほ更ひどかつた。彼は少年の日の樂しみをなんにも知らなかつた。たゞ見たのは父の憎みにみちた怖い目といぢけてる母のおびえてゐる様子であつた。彼はいつも父の目から逃げ出して、泣いてゐる母に取りすがつた。母もまたこの少年の不幸を自分のことのやうに痛ましく嘆いてゐた。

けれど彼の不幸は家ばかりに止まらなかつた。「高利貸の子」であるが故に、友達もあまり相手にしてくれなかつたからであつた。憎まれるといふことはないまでも彼はいつも孤獨であつた。さう

して暗い沈み勝ちな性質を植えつけられながら彼は育つて来た。少年の日の父への恐れが、少しづつ憎みに變つて行つた。

『彦一あれの眼を見てみると、俺おれを憎んでゐるやうな氣がするぞ。』

その父がふゝ獨酌をしながら母にさう呟いてゐるのをきいた時、彼はなにも知れない憂鬱にうたれた。しかしそれが事實に相違ないことはわかつてゐたから、中學を出て一高に這入ると同時に彼は寄宿舎に移つてしまつた。少しの金でもきちんと言へることが、彼にはじめて自由を感じさせた。

大學に行くやうになつてからも彼は家に歸らなかつた。毎月の足りない分は、家庭教師をして埋合せをしながら、小さな二階の一室を借りて自炊をつゞけた。

『歸つて来ておくれよ。』

父にかくれるやうに、不自由な足を曳いてその部屋を月に一回位訪れる母が、おづおづと涙ぐましく言ふのにも彼はうなづきはしなかつた。

『いつそ母さんがこつちに来てしまふといふのに。』

彼には氣の弱い母にそんなことの出来ないことがわかつてゐながらこたへることがあつた。そのうちに作品がうれるやうになつたら引き取るんだ……劇作家志願で英文科に籍をおいた彼はそんな考へに耽けることもあつた。そしてそのうちに彼の卒業も近く迫つて来た。

しかもその時、彼は青春に一度通過しなければならぬ愛の問題に悩みはじめた。それは彼に輝かしい希望と、うちのめされるやうな苦しみをあたへた。そして新しい年を境として、その彼女に信ぜられつゞけるためには、彼がどうしても金をつくらねばならぬことが起つた。彼はこの日、父と争つてもその金を貰ふつもりで家に行つたが、父は夜になつても歸らなかつた。そして彼が手紙でもものこすつもりであけた父の宝箱に、彼は期限の切れた證書を見つけて、思はずそれをふとこゝろに入れてしまつた。彼は母になにか譯のわからぬことを言ひ残して家を出た。そして盗んだ通帳をふとこゝろにして銀行に急ぐものゝやうに、それを一時も早く金に代へようと焦せつて、胸をさがせてゐたのだつた。

三

『なにか用かね。』

眼のするどい、八字鬚の四十男が出て来て彦一を見つめた。ぞ、ぞ、ぞ、と肩を震わせた。襦袢の上に巻帯をして金鎖を見せてゐる様子は、品がわるくはなかつたが、しやがれた太い聲が主人の人柄を思はせた。

彦一は漸く聲をしほり出した。

『麻布の大谷から来たんです。』

『あ、大谷さんの、そしてあんたは？』

『大谷の息子です。』

『どんな御用ですかね。』

『金を返して貰ひに来たんです。證書を持って来てみます。』

『まあおかけなさい。』

主人は彦一に椅子をすゝめながら女にお茶の指圖をした。そして黙つて眉をひそめてゐたが、女が盆を持つて出るとすぐ奥に追ひやつてしまつた。主人はゆづくりと熱い茶をすゝつた。

『お上がんなさい、冷えますねえ。』

『ええ。』

彦一は壓迫されたやうに茶碗を取り上げた。彼はだめだと言はれゝばすぐにも逃げ出したい氣がしながら主人の視線をのがれた。壁にはつてあるポスターの美人畫が彼の焼點になつてゐた。

主人は茶碗をおくと急にたづねた。

『大谷さんは御承知の筈なんですが、どうしてそんなことになつたんですかね。』

『え、……急に、急に入らんです。』

『急にね。』

主人はにやりと笑つた。

『急にと言つたつて、そんなにこゝに金がころがつてると思ひますかね。』

主人は巻煙草に火をつけると一口吸つてつゞけた。

『そんなに金が眼の前にあるなら借金なんてしませんよ。ねえ、期限が切れてゐるんだから、あなたの父さんのやり口ぢやあ、返さないと言へばすぐにさしおさへと来るでせうさ。だけどちやんと抵當も這入つてゐるんだし、もすこし待つてくれたつていゝと思ひますよ。いゝ鴨さへあれば、すぐに返せますからね。あなたの父さんだつて、それを承知して資本主になつてゐるなさるんだ。』

彦一は主人の饒舌に頭が熱くなつて來た。父がかうしたところの内幕に通じてまで金を貸してゐることがわかると、自分の頬に血が上るのを感じた。そして主人の心持が金を返すつもりのないやうに思はれた。

『では……。』

彼は立ち上らうとした。

『まあ、待つて下さい。』

『え。』

『話は話ですよ。』

主人はあはて、彼を引き止めた。

『怒つちや困りますよ。あんたの父さんに怒られちやあこつちが困りますよ。あとの取引にも出して貰ふことになつてゐるんですからね。それを駄目にしたら大事なんですよ。』

彦一は棒立ちになつてゐるが、父とこの家とが泥沼のやうなものでつながつてゐる気がした。彼は口をゆがめてなにかを言はうとして黙つた。自分も父のものをどろぼうして来たんだ、と思つたからだつた。彼は父の手箱から「五百圓、右……大正十五年十二月十日までに返濟」そんな文字のつながつた證文を取り上げた様子を思ひうかべて、わなわなと手をふるはせてゐた。

主人はしやべりつゞけてゐた。

『……丁度、いま這入つたばかりなんでして、わるいやうにはしません。きつとあなたを恩に着ますよ。うまくやつて下さい。これだけ持つて歸つて、父さんをなだめといて下さい。あなたの父さんたら頑固ですからなあ。』

彦一は夢からさめたやうに、卓の上のつてゐる十圓札の一重ねを見た。彼はなんの氣なしにその上に手を載せた。

『それがまんしてくれませんか。』

『いくら、いくらあるんです。』

『え、さつき言つた通りです、二百圓です。』

彦一は悪寒におそはれたやうに身をすくめて眼を光らせた。それからそれを取り上げるに、慄える指でかぞへた。

『あるでせう、それだけでも苦しいんですけど。』

『あ、ありますよ。』

彦一は冷い父の眼がその後（おしろ）に光つてゐるやうに思はれた。彼に取つてそんな大金は暗い夢のやうに恐しかつた。それが彼のふところ（ふところ）に這入るのが、そのやうな氣もした。彼は恐ろしさうにそれを卓に戻した。

『みんな、貰はなくていゝんです。』

『え。』

彼のしやがれた聲がうす氣味わるくひゞいたので、主人はちつと彼を見つめた。彦一の眼は吸ひつけられたやうに紙幣を見つめて息をはづませてゐた。そしてなにか馮りうつゝたやうに頭をめぐらせると出て行かうとしてよろめくやうに歩いた。

主人はおどろいて彼の袖をおさへた。

『どうしたんです、え。』

『いらぬんです。』

彦一は眼に涙をためてゐた。その空気に耐えられなくて呼吸がつまりさうであつた。汚はしいものがむせつほく匂つて来る上に、その家のうす暗いものが胸をいたましくさせてゐた。

主人にとつてこの青年の後に光つてゐる偶像が恐しかつたから、彼は言はなければならなかつた。

『あなたがいゝと言つたつて、父さんが許しませんぜ。私しや大谷さんに借りてるんで、あの人は私に取つて苦手だから……。』

『……………』

黙つてゐる彦一の眼が異様に輝いた。主人は困つたやうに吐息をした。

『弱つた人だねえ。』

『弱りやあしなないぢやありませんか。』

『しつ、静かに。』

主人はなぜか彼が突然叫んだのでその聲をおさへるやうに手をふつた。彦一ははつとして耳を傾けた。けれど夜はしづかにしつとりと風の音さへなかつた。

四

彦一はすぐに二階の方でチャリンと器物のふれ合ふ音をきいた。それから急に焦立たしさが込み上げて来た。

『言はせて下さい。僕は恥づかしいのです。僕は父があなたに、こんな、こんなこみをさせて、金を出してゐるんだと思ふと、は、腹が立つんです。(彼は唇をふるはせた)僕は、僕は、父がどの位恥づべきことをしてゐるかわかつたのです。だから、だからその金は入りません。』

彼は黙つてしまつた。それから心の中で、この金をこゝにおけばこれが更に汚はしいこみの資本になるのだ、と考へた。彼は大股にすゝんで紙幣を取り上げた。彼は奥の方に二つ三つ女の顔を見た。

『わかりました。(彼はそれを自分に言つた)わかつたのです。僕はこの金を貰つて行きます。』
『それで、どうするんです。』

主人は彼の手をおさへようとしてふり拂はれてしまつたので低く叫んだ。彦一は冷笑しようとし

て泣き笑ひをしながらオーバーの内がくしにその紙幣をおさめた。主人の庄三はしてやられたと思つたやうに彦一につめよつた。

『それで、若旦那受取はどうして下さるんです。』

『受取！』

『えい、それを置いてつて下さい。』

『……………』

二人が顔を見合はせた時であつた。急に二階に女の泣き聲がおこると忙しい足音がきこえた。

『あら。』

奥に聲をひそめて事の成行を見つめてゐた女達の一人が叫んだ。主人の庄三はおし黙つて不安さうに女達をふり返へつた。足音が烈しくなると廿七八の女が階段をかけ下りて來た。

『どうした。』

主人が叫んだ。

『大變だよ。あの子が、あの子が、しまひになつて言ふことをきかないで、フォークで旦那の手を……………』

『むろ。』

庄三がうめいて行かうとするのを彦一が引き止めた。彼にそのわけがわかつた、あの女の子だ、

煙草屋の夫婦が話をした、彼の手がわなわなと慄えた。

『ま、待つてくれ給へ。』

『……………』

黙つて主人が彼の手をはらつて拳をにぎつて行かうとした時、また足音がひびいた。そして階段を一人の少女が一瞬間にかけ下りるとばつたりのめつて聲を上げた。

『い、こわいよ。』

彼女は立ち上ると、すぐにとびかゝつて行つた主人の手をのがれてフォークをふり上げた。

『こ、殺してやるから。』

『ち、畜生。』

その主人は獸のやうにうめいた。

青ざめて蠟のやうになつてゐる少女の顔には、狂暴な中になにとも知れない深い悲しみがあるのが、その一瞬間に彦一にわかつた。血にまみれたフォークがその細い手に光つて、彼女は嵐にうたれてゐる木のやうに身をふるはせながら、恐れと憎みにとび出た眼で主人を見つめてゐた。

彦一は主人をなだめようとした。

『君。』

『なんだ。』

主人は豹のやうに身をしづめてちつと少女をねらつた。

『許してやり給へ、え。』

『だめだ。』

その言葉をきくと少女は絶望したやうにちらつと彦一を見た。それからまた悲しさうに唇をひきつらせた。彦一は身に泌みるやうな哀訴をその少女の眼から感じた。彼はさはがしいこの場所からのがれて行きたかつたが、それも許されなことがはつきりとわかつた。

彼の心に閃く影があつた。彼はポケットに手を入れると厚くかさばつてゐる證書をがさがさ引き出した。そして主人の腕をつかむとそれをさしつけた。

『なにをするんです。』

『これです、證書ですよ。』

『え。』

『これを君に上げる。だから、だからあの子を、あの子を僕に貰はせて下さい。』

主人は黙つてそれを受け取つた。それからなにか言はうとした時、二階口から吼えるやうな男の

聲がきこえた。

『い、醫者を呼んでくれ。』

『旦那だ。』

その主人は少女のことを忘れたやうに叫んだ。

彦一は身をめぐらして少女を見ようとした。それからおどろいて突き進んだ。少女はそこになくて、扉がぱたりとしまつて揺れてゐた。彼は帽子を取り上げると、扉を蹴るやうにひらいて、夜霧の海の中にとび出した。

五

夜霧をとほして一つの影が走つてゐた。彦一は扉の中でなにか叫ぶのをきくながしながらその影を見とめた。彼がかげ出すと霧は冷たく頬をなで、すぐに耳が痛くなつて來た。

『お待ち、待ち給へ。』

彼があとから呼んだけれど、少女はなほ早くかけて行つた。町角に來た時彼の手がその肩にとゞいた。

『いや、いやだ。』

少女はくりりとふり向いた。息をせはしく切ると彼の手をふりもぎつてしまった。そしてほとぼしるやうに彼を罵りながらあとずさりをはじめた。

『いやだよ。馬鹿、みんな、いやだ。わてえを買つたつて、畜生、言ふことなんてきくもんか。』

彦一はくつと胸をつかれたやうな気がした。彼はちつとその少女を見つめた。

『まらがつてるよ、お前は。』

『いや、いやだつてば。』

『僕は、そんなことを、そんなことをしやあしないよ。』

『うそだ。』

少女は毅然として叫んだ。

『いまお金をうちの旦那にやつたぢやあないか。そんなうそついて、人をつかまへて、馬鹿。』

彼にはその少女の聲が泣いてゐるやうにきこえた。そんな小さくて（彼にはその少女が十三位に思はれた）そんなに疑ひ深くなつてゐるのがほんとにいちらかかつた。霧の中に浮いてゐるその少女の顔が、くぐくと齒の根も合さず慄えてゐるのを見ると重い石に打たれるやうな氣もした。彼が一步進んだので少女は塀の蔭におし込められたやうになつてしまった。

『ほんとに、ほんとに、そんなことはしないよ。』

『うそだ。』

少女はまた叫ぶと急に彼の方に突き進んで來た。

『あ。』

彦一は顔に爪を立てられて聲を上げたが、少女の手をつかんで離さなかつた。そしてやはらかに少女を抱きかゝへた。

『打つとくれ、打つとくれ、いくらでも。死んだつていゝ。』

少女は彼の腕の中でもがいた。彼はその耳に口をよせて囁いた。

『いゝえ、僕はなんにもしやあしないよ。』

少女はそれをきくともがくのを止めて不思議さうに彼をふり仰いだ。彼は少女を抱いてゐる手をはなしたが、かほそい片方の手だけは離さずにした。少女はしばらくの間彼を見つめてゐるが、低い聲で呟いた。

『變な人、ほんとに打たないの。』

『あゝ。』

彦一はハンケチを取り出すと顔の傷をおさへた。少女は昂然として叫んだ。

『わてえ、あんたに傷をさせたんだよ。それでもかい。』

『あゝ、さうだよ。』

『どうして。』

『お前が思ひ違へしてしたこゝがわかつてゐるからだよ。』

少女は黙つてしまつた。そして霧の中にういてゐるおほろげな一點の灯を見つめてながら、自分の一生を考へるやうに思ひつめてゐた。或はなんにも考へないで、火の消えた蠟燭のやうに寂しくなつてゐたのかも知れなかつた。

彼女は急に泣き出した。彦一は黙つてそれを見つめてゐた。彼はこの少女を慰めてやりたかつたが、言葉が見つからなかつた。彼はその手をふつた。

『行かうよ。』

瞬間に少女は瞳を上げて彼を見た。

『血が……。』

少女の聲に、彼がそこにハンケチをあてた時、少女は彼にとびかゝつた。そして彼にすがつたまゝ火のやうな聲を上げた。

『許してね、許してね、許してね。』

彼女はそれからわつと聲を上げて泣き出すと彼にしがみついた。彦一はされるまゝにしてゐたが、少女は彼に許されるためよりか、彼女自身のために泣いてゐるやうに思はれた。彼が少女を軽くかゝへた時ふと少女が黙つてしまつた。

『あ。』

彼は重い荷物を持つたやうに少女をかゝへたまゝよろめいた。彼女はぐつたりと彼に凭りかゝつてゐた。

『どうしたの、おい、おい。』

彼女は答へなかつた。彼は冷い汗を背に流しながらあはてゝ抱き變へると少女の顔をのぞいた。少女は眼をつぶつてゐた。死んでゐる、と思ふまゝ青く錆びた銅のやうな重みが彼の腕に加はつた。氣絶したのだ、と思ひながらこのまゝ死んでしまふか知れないと考へると彼は急に恐しくなつた。逃げ出したいやうな冷たさがそこにあつた。が、彼は自分の力とは思はれない力で少女を抱き上げると夢中で歩きはじめた。

『青木さんところへ行かう。』

彼はしばらくして自動車屋を見つけると、ほつと吐息をしてさう呟いた。すぐに自動車走りはじめた。

『駕籠町の青木病院。』

彼は自分が運轉手に行先を示した聲が、まだ耳に残つてゐるやうな氣がした。彼はそこにカルタ會があることを思ひ付いた。彼女も來てゐるな、きつと、彼はさう呟いたが、青白い少女の顔をのぞき込むと凡てを忘れたやうにうづかりとしてしまつた。たゞポケットに紙幣のあることを確かめるだけは忘れなかつた。自動車はうすらいで行く夜の霧に向つて、^{フルスピード}全速力でつきかゝつて行つた。

六

青木病院の院長の青木ドクトルは二十餘年前にドイツから歸つて來た醫學の方の先輩で、そこに病院を開いて多くの産をなしたのもそれからであつたが、上流社會に多くの信用を得てゐた。彼の妻は美貌の噂さの高い古い歌人で、彼とは親子ほど年が遠つてゐるやうに見られてゐた。しかしほんとは彼が素朴であり、妻のよしえが派手であるからなのやうに思はれた。

二人の間には光子といふ女學校を出たばかりの一人娘があつた。どうした氣まぐれか、光子は一年遊んだのに女子大學に這入るつもりになつて、隣の高松家に家庭教師に行つてゐた彦一を英語の復習對手にたのむやうになつた。それで彦一は青木ドクトルを知るやうになつたのであつた。彼は

どちらかと言へば美しい夫人や令嬢より、黙々として自分の仕事につとめて他をかへり見ないやうに見えるドクトルの人格を尊敬してゐた。

少女が發作性痴呆であること、それは異常な興奮のあとで起るので、その度に蝕まれるやうに狂氣に近よつて行くが、時としては急に死ぬことがあること、それらを青木ドクトルからきかされた彦一は、二階の病室にねかされてゐる彼女の傍で考へたいことが澤山ある氣がした。

看護婦がそこへ這入つて來た。

『奥様が御用がお済みになりましたら、お邸の方へ來て下さるやうとお申し越しました。こちらは私が居りますから……。』

彼はそこを立ちたくなかつた。しかし少女は三四時間経たなければ昏睡からさめない、ときかされてゐた。そしてカルタ會には友人の勝山と共に招かれてゐたのだつた。彼はしかたなく立ち上つて病院を出て行つた。青木の住居はその隣りの樹立をめぐらした中の西洋館で、それにつゞいた離れの日本座敷でその夜の集りが催されてゐることも彼は知つてゐた。

彼がその玄關を訪れると待つてゐたかのやうに美しい夫人が顔を出した。

『よく來ましたのね。きゝましてよ、どこかの娘さんを連れてゐらつしやつたの。』

夫人は嬌態コケツツシユに笑つた。白い齒ならびの上に赤い齒ぐきが美しくあらはれた。それは夫人が持つて

るる魅惑の專賣であつた。

『赤くなつてよ、大谷さん。』

夫人はいそいそと彼を案内しながらつゞけた。彦一はほんとに恥ぢないではゐられなかつた。夫人の様子の中には浮き立つたやうな若々しさがあつて、彼の青春の血をかき立てたのだつた。暗い沈み切つたその夜の彼に取つて、それは光の眩惑であつた。

夫人は暗い廊下で立ち止まつた。

『大谷さん。』

『え。』

『あなたどこからそんな娘さんつかまへてゐらつしやつたの。』

夫人の手がついこのびて彼の肩の上に止まつた。彼は夫人の熱い息とむせるやうな香水の匂ひを嗅いだ。胸は凍つたやうにかたく引きしめられて、甘いときめかしさの中に溶け込まうとする彼の感能を警戒した。

彼はかたくなつたまゝむつづりと答へた。

『偶然に助けて來たのです。』

『どうして。』

『白山の御殿町です。』

『行き倒れですの。』

『いゝえ。』

彼はそこを逃れて行きたかつたけど、夫人は彼を解放しなかつた。そしていつかびつたりと彼によりそつて、赤い唇が美しく彼の眼の前に輝いてゐた。そして夫人の大きな魅するやうな瞳が、花のやうに彼を見つめてゐた。白い手は今にも伸びて來て、彼の頸を巻きさうに思はれた。

『お話しなさいよ、面白さうだわ。』

夫人はまた美しく笑つて彼の肩をたゝいたが、彼にはその笑ひがヒステリカルにきこえた。

『あとにしませう、奥さん。』

『……………』

『行きませう。』

夫人はほつと熱い吐息を彼の頬に吹きかけてその手をすべらすと、ちらつと彼を軽く非難するやうに眺めて、急に笑ひ出してしまつた。

『イヌマニエル、その子の全快をお祈りしてよ。』

それは夫人や光子などが軽いアイロニーを感じた時にするひやかしで、一時その家に出這入りし

たフランシスカンの皮肉な眞似なのであつた。彦一は笑ひながら小刻みに走つて行く夫人に苦笑で答へながら、そのあとを追つて行つた。彼の心の中に羞恥に似た淡い寂しさが残つてゐた。彼は物足りないやうな感情に眉を曇らせながら、日本座敷の縁を踏んで行つた。

『あら、大谷さん。』

光子が母によく似た微笑を見せながら彼を迎へてくれた。

『大谷さん、今日は大變なのよ。』

夫人は上氣した頬を赧らめながら光子に笑ひかけた。

『え、なんなの母さん。』

『小さい奥さんを病院に連れて來たのよ。』

『まあ。』

彦一はうなだれて障子際に坐つてしまつたが、顔を赧らめないではゐられなかつた。そして遠く離れた部屋の隅に、彼を見ると共にはつとしたやうにうなだれてしまつた高松の姉嬢の芙美子の、それに就いての思惑が氣にかゝつて、夫人に對しては淡い憤りさへ感じられた。

そこではカルタも取り疲れたらしく、二間をうち通した隣の部屋で、一組の男達だけが終りに近い勝負を争つてゐた。笑ひの渦を残して夫人が去つてしまふと、彼と約束したやうに勝山も來て

ゐなかつたので、彼は知らない顔の前に坐つてゐる、物ういやうな、いま迄とは違つた明るい空氣に苦しめられはじめた。それは反感とまでは行かないまでも、彼自身のいやな屈託になつて來た。

そこに芙美子がゐることも、彼にとつて眩しいやうに氣うとく感ぜられた。

芙美子は内氣で黙り勝ちな娘だつた。けれどおとなしやかなその姿の裏には、冷い理智があつて彼女を清らかにしてゐた。細面の神経質さうな顔に、目立つてゐるのは大きく澄んでゐる瞳で、彦一の惹きつけられたのもそれだつた。小さい時から身體が弱くて、女學校も半途で退學したが、半年程前からその妹の登志子と一緒に彦一に英語をならひはじめた。彼女の叔父に大學の講師がゐるのでそれから彦一がたのまれたのであつた。

『私は作家になりたいんですの。』

彼女は彦一にさう言つたが、小さい時から本に讀み耽けつて、多讀の方では彦一などもかなはな位であつた。彼女の父の山田は歐洲航路の古い船長として知られた人で、いまは仕事を止めて落着いた上品な生活をしてゐた。子供達も自由な立場において少しも干渉しなかつたので、芙美子も自分の伸びようとする方に向かれたのだつた。さうして同じ方向に伸びようとする彼女と彦一とは、その點でも段々に親しくなつて、若い心は互に結びつかうとして焦りながら、「戀」といふ字をそこに書けないばかりだつた。さうしてそれはたゞ二つの胸に秘められてゐる、美しい青春の謎であつ

七

カルタの勝負が終ると、負けた大學生は残り札を手に持つて立ち上つた。
『ち、えつ、残念やなア。』

その台詞もどきの見得が女達を笑はせた。その中でも光子とその傍にゐる洋装の人のが一番高く
ひびいた。その人は濃い化粧をした美しい圓顔のモダン・ガールで、斷髪がよく似合つてゐた。

彦一はすぐに紹介されて、男達が光子の従弟とその友人の醫大生であることを知つた。外の一人
は病院の方の會計の息子でまだ少年であつた。さうして青年達は少なくとも美貌で快活な光子に惹
きつけられてゐることもすぐ解つた。それとすれば外に譯があるにしろ、勝山の來ない方がよかつ
たと思つた。

『僕は光子さんが無くては生きてゐられない氣がするんだ。けれど彼女が僕には恐しいんだ。』

青木病院からの貸費でやつゝ醫科に通ひながら、父が死んだために、父の代からの銚職を内職に
して一家の生活をつゞけてゐる勝山の、その告白の苦しみが彼に思ひやられた。「こゝはこんな

るいのに、」と彼は自分の過失のためにその友達をこの席に見出せないことが寂しく思はれた。そ
の過失！彼は芙美子の横顔をちらつと眺めて悲しくうなだれた。光子は女王のやうに、男達に對し
て快活に振舞つてゐた。

暮近くなつてからであつた。彼は芙美子から腕輪のこはれてゐるのを見せられた。それは彼女の
父が外國から持ち歸つたもので、細い白金にルビーが三つもはまつてゐる美事なものであつたが、
そのまん中の珠がはづれてゐた。彼は勝山のためにその修繕を受け合つてそれを持ち歸つた。

『大切にして下さいね。私の寶よ。』

彼は芙美子のその言葉がうれしかつた。それによつて勝山ばかりでなく、彼女もよろこばすこと
が出来るからだつた。

『お正月までに間に合はして下さいさるわね。』

『え、大丈夫ですとも。』

彼はその箱をかゝへて宿に歸るとまたあけて眺めた。熱い唇がそれにあたへられた。彼は幸福を
感じて満足してゐた。そしてその翌日朝早く、彼はその箱を大切さうにかゝへて勝山の指ヶ谷町横
のうす暗い店を訪れた。

けれど神の悪戯でももあるやうな、それほどの皮肉なことがそこに起つてゐた。

『ルビーつて、取れた珠がないぜ。』

勝山は彼の前で箱をあけるささう言つた。

『え。』

彼等は蒼くなつてそれをかき探がした。それから彦一の宿に戻つてそれをたづねた。しかし失はれた珠は出て来なかつた。さうしてそれが無ければ、彦一は芙美子に疑はれるばかりか、その心をも失はねばならないやうに思はれた。彼が父の證書を持ち出して、までも金を欲しく思つたのは、そのルビーの珠に似た品を買ふためであつた。さうしてその夜青木の家に来ないことを勝山と約束したのも、必ず来る筈の芙美子に逢ふことを恥ぢたからだつた。

思ひ沈んでゐる彦一を青木夫人がいたづらさうに眺めた。

『大谷さん、なにを心配してらつしやるの、あちらの小さい奥さんの御心配なの。』

彦一は氣が付いて耳許まで赧くした。夫人の豊かな顔になにかの邪氣があらはれてすぐ消えた。

光子は面白さうに聲を立て、笑ひながら、傍の斷髪の人をかへり見た。

『あちら大谷さんよ。今夜は面白い物語を持つてらつしやつたの。きまませうよ、ねえ。』

『まあ、やつぱり大谷さんでしたのねえ。』

その人はほゝゑんだ。それは輝かしいといふよりか、妖艶な魅惑をふくんでゐた。

『私。さつきから大谷さんておつしやるし、さうだと思つてゐましたけど、遠慮してゐましたの。

ね。私、赤坂の方のお宅の御近所ですわ。お忘れになつて……』

『さあ。』

彦一はその人にまじまじと見つめられて伏目になつて考へた。その人は、すぐ銀製の名刺入れを取り出すと、バチリと開いて小型の名刺を取つて彼の方にさし出した。

『すみません。私はいまあつちにはないんですけど。』

彼は仕方なくそれを受取らうとして手を伸ばした。その人の白い指が彼の手にふれた。彼にはそれがわざとであるやうに思はれた。が名刺を眺めると、身をすくめたいやうな衝動をそれから受けた。松野幸江、それは彼の家の近くの煙草屋の娘であつたが、天分を恵まれた彼女が歌劇劇團のダンサーとして名をなしたのを彼はよく知つてゐた。

小さい時分に知つてゐたその顔を見なほさうとして彼は、つと眼をそらした。幸江の瞳が焦きつくやうに彼を射つたからであつた。そして芙美子がうるんだ瞳でその様子を眺めてゐるのを見ると彼は、おびえたやうに芙美子にちらつと眼を走らせて眼をふせてしまった。

幸江がなつかしさうに膝をすゝめた。

『ねえ、大谷さん。私をおほえてゐらつしやる。』

『え、おほえてるますけど。』
彦一の聲は小さかった。

夫人は黙つてそれをきいてゐるたが、彼が眼をあげると、ながし目にそれを見つめてゐた。そして幸江に笑ひかけた。

『まあ、松野さん、思出の押賣なのね。』

外の者は一しよに笑つたが、彦一は笑ふことが出来なかつた。そして幸江も變に苦笑して美しい眼をふせてしまつたが、すぐそれを取りかへすやうに夫人に向つてほゝゑんだ。

『ねえ、奥様。大谷さんの物語とやらをおきまませう。面白さうですもの。』

『え、それがいゝわ。話さなかつたら小さい奥さんのところへ歸さないことにするのよ。』

光子がはしやいでそれに同意した。彦一は少女の話をしない譯に行かなくなつて、父の使ひでそこに行つたやうに話をした。彼等はその話から十分の興味を感じてゐた。

話し終ると、いつか美しい瞳をうるませてるた光子がさゝやいた。

『可哀想な子だわねえ。』

幸江は感動して泣きさうになつてゐた。そして芙美子はちつと彦一を見まもつて、うれしげに唇をむすんでゐるたが、その眼の中に烈しい感情のうごいてゐるのが彦一に取つて美しく感ぜられた。

夫人は急に笑ひ出した。

『ぢやあ、その絆創膏はその時の傷なのね。私、小さい奥さんと夫婦喧嘩でもして、ひつ搔かれたのかと思つてゐるたわ。』

『まあ。』

芙美子がはじめて聲を出して夫人を非難するやうに眺めた。彦一はそれがうれしかつた。男達だけは彼の話よりか、その一言に興味を感じて笑ひ出してしまつた。そしていつか光子も、幸江も、その笑ひの中に巻き込まれてほゝゑんでゐた。彦一はみんなが自分の顔を眺めるので眼をふせて苦笑してゐた。

八

しばらくして彦一は自分が、なぶられてゐるやうな憂鬱を感じて來た。愛する人が眼の前になるのを見ながら、その人がつゝましくしてゐるので話が出来ないでゐることもどかしかつた。そしてなによりもルビーのことを考へると心が深い淵に沈み込んで行くのであつた。明るいその情調の中で、彼の胸は嵐のやうにさわぎはじめて來た。

彼は席にゐたまれないやうな気がして、別れを告げてそこを立つた。夫人がそれを送つて来た。廊下のところまで来て彼が夫人をふり返ると、多勢の席で若々しく快活に笑つてゐた人とは思はれない程、夫人は美しい眉を曇らせてゐた。

夫人は玄關口で彼を引き止めてさゝやいた。

『すぐ歸るの。』

『えゝ。』

夫人はすぐに母のやうにやさしく彼にほゝゑみかけた。胸を熱くしてゐるやうな夫人の瞳の底に、うるんだものがうごいてゐた。

『あなたはやさしいわ。今夜は病院に泊るのね。』

『えゝ。』

『私、わるかつたわ。あなたをカリケチアにしてしまつて……けれどあれは私の本心ではないの。わかつてゐますわね。』

『えゝ、わかつてゐます。』

『なにゝでも深入りしない方がいゝわ。そして……』

夫人は言葉を切つて彼を見つめた。それは廊下を踏んで美美子がそこに來たからだつた。彼女は

つゝましく挨拶してすぐそこを出て行つたが、その時彦一にうるんだやうな悲しい瞳の色を見せたのを夫人は氣づかなかつた。扉がしまるのを見て夫人はすぐに言ひつゞけた。

『そしてね。私いやだけれど言つておくわ。松野さんは、モダンなの。あんまり交際しない方がいゝわよ。』

『えゝ、わかりました。』

彦一は夫人の言ひたいことがそれであつたやうな気がした。彼はその親切が身に沁みるやうにうれしく感ぜられた。母でない人が、どうしてこんなによさしくしてくれよう、この人はほんとに自分を思つてゐてくれる。彼の若い感情が、その手にすがりたいほどに慄へた。

『大谷さん。』

『え。』

彼は夫人の異様な聲におどろかされた。

『私、ほんとにあなたのことを心配してゐるのよ。よくつて……』

『えゝ。』

美したい夫人はしづかにほゝゑんだ。

『では、さよなら。あしたまたお眼にかゝれますわね。今夜あなたはどうかしてゐらつしやるのよ。』

早くおやすみなすつた方がいゝわね。』

『え。』

彦一は感傷的な心持になつてそこを出た。そして立ち止ると揺れてゐる扉をふり返つて、夫人の言つたモダンといふ言葉について考へた。彼はすぐにそれから戀愛三昧とか、ナオミズムとか言つたやうな、擬似戀愛を楽しむ、戀の遊戯に耽ける作品中の人物を思ひついた。

『幸江さんてそんな人かな。』

彼は軽いうたがひを感じたが、親切で美しい夫人に對してそれが胃潰であるやうな氣がすると、すぐに病院に昏睡をつゞけてゐる少女のことを忘れてゐたことに氣がついた。それから芙美子が歸つて行く時の、悲しさうな物足りなさうな様子を思ひつくと、心の中で寂しく眩いた。

『ルビー！ さうだ、それさへ買へば、あの人にまた逢ふこゝが出来るんだ。』

彼はすぐに、ほとほとそこを離れて行つた。そして十足ばかり歩いて、病院の方に行く小道に曲らうとすると、その樹の蔭からよろよろとさまよひ出た一つの影が彼をおどろかせた。

『あ。』

彼はその人を見つめた。

『大谷さん。』

『あなたでしたか。』

彼はそこにうなだれてゐる芙美子の白い顔が、彼を見るに同時に泣き出しさうに曇つたのを、遠くさしてゐる暗い光で見わけた。待つてゐてくれた、と思ふと、うれしさと共になにも知れぬ苦しみが彼の胸に擴がつた、そこに重い豫感が彼の心をうめくやうに壓しつけた。

『待つてゐましたのよ、私。』

彼女の聲は悲しさうに慄へた。

『すみません。』

彼はそこに深い淵が、口をあけて彼を待つてゐるやうな惱みを感じた。彼女の白い顔は悲しさうであるが、その美しく大きい瞳は、なにかをなじるやうに軽い憤りに輝いてゐるのが感ぜられた。それは果てしない遠くから彼の心を見すかしてゐる、熱いけれども正しい夜の女神のさばきの下に立つたやうな心持であつた。

九

夜霧は晴れてゐるが、空氣は水のやうに冷たかつた。彦一はオーバーを病院の方において來てし

まつたので、また立ち止まると、その寒さをひしひしと感じた。見上げると、凍った雪の晴間に星がちらちらと光つてゐるが、夜空は雨をふくんで暗く垂れてゐた。

芙美子が彼にすりよつた。

『大谷さん。』

その聲は悲しくすゝり泣いてゐるやうであつた。彼女は彼になにかを訴へようとして、そこに待つてゐるのに違ひなかつた。その訴へは？ 腕輪のことであることだけが彦一にわかつてゐた。彼は冷い汗がしつとりと脊筋を流れてゐるやうな寒さをおほえた。

『あの、今夜は勝山さんいらつしやいませんでしたのね。』

彼女の透きとほつた聲が、さみしく夜の空氣に散つた。

『ええ。』

彦一は身の慄へるのをおさへた。

『どうしていらつしやいませんでせう。お願ひしました腕輪は、まだなほらないんでせうか。』

『さあ。』

嘘をつくことに心を責められる青春が、彼の中にうづ巻いてゐた。彼は答へることが出来なくてうなだれた。通行人が一人、怪しむやうに彼等を見て行つたので芙美子は顔をそむけた。それがと

ほくなつたのを彼女は見送つた。

『早く返して下さらないと困るんです。母が變なことを言ひますの。あなたに、私が上げでもしたやうに。』

彦一は彼女に對してはすまないと感じながら、むつと自分の胸がふくれるのをおほえて息を喘ませた。

『え、あなたの母さん、僕をそんな風に思つてゐるんですつて。』

『いゝえ。』

芙美子は悲しさうに打ち消した。

『さうぢやないの。さうぢやないけれど、母はやつぱりあれを大切がつてゐましたのよ。それで、きつと心配してゐるの。』

けれど彦一には、それで芙美子が、その母から責められてゐるのがわかつた。彼に取つて、それは自分が打たれるより辛かつた。そしてその母に對して憤りすら感じた。

『あゝ。』

彼は、なにとも知れず、たゞうめいた。

『ひどい、ひどい人だ。あゝ、僕は貧乏してゐる、それであなたの母さんが………そんなに。』

『いゝの、いゝのよ。』

芙美子が悲しさうに叫んだ。彼女は、おろおろと手を慄はせて涙ぐんでゐる彦一を泣き出しさうに見つめた。

『私、かまはないの。私、あんなもの無くなつたつてかまやあしないわ。けれどあれをあなたが持つて来ないと、家であなたを断るかも知れませんの。さうしたら、さうしたら、私、私、どうしませう。』

『ありがたう、芙美子さん。』

彦一は胸の中をうづまく感情の花にかきまはされながら、彼女の手を取らうとして一步すゝんでためらつた。あゝ、この人も僕がそれを取つてしまつたやうに思つてゐる。彼の心が熱風と寒風との境にゐるやうに、彼の頬が赤くなりまた蒼ざめた。愛してくれてゐることがはつきりわかりながら、その手を取り得ないもどかさにも彼はうち慄へて胸をさわがせてゐた。相愛する距離は近いけど、またごくとほいものであるやうな惱ましさが彼の心を捉へてゐた。

『ねえ。』

芙美子が顔を上げた。夜風がとほりすぎて彼女の後毛をなぶつた。彼女はためらつたが、すぐ決心して兩の手を握り合せた。

『大谷さん、私……今夜お金を持つて来ましたのよ。ねえ、それを、それを、あなたに上げようと思つて……』

彼女は息を切つて喘いだ。

『そ、それであの腕輪を……』

彦一の胸の中をかあつとした熱いものがとほり過ぎた。それは彼女をやはらかに抱きしめようとするものとは反對の、自分の貧しく、さもしく見られてゐる憤激であつた。

『い、要りません。か、金なら、た、たとあるんです。』

彼は芙美子が帯の間から取り出して彼に渡さうとした紙包みを拂ひのけた。それはひらりとその手から地に落ちてしまつた。彼はそれでもはつとしてそれを拾ひ上げた。

『要りません。お持ちなさい。』

『いゝえ。持つて下さい。』

『あるんです。僕はあるんです。』

『でも……』

芙美子はそれを受け取らうとしないで泣き出した。

彦一は悔恨に似たさみしさを感じたが、なほくり返した。

『さあ、人が來ますよ。』

彼の手が彼女の肩をなぐさめるやうに抱かうとした時、事實青木の家の扉がきしむのと、あとになつた人達の別れの挨拶がきこえて來た。彼はすぐ紙包みを芙美子のふところにおし込んでしまつた。

『人が來ますよ、ね。』

彼は逃げるやうに芙美子を離れて病院の方に走つた。見かへると反對の方に、芙美子もうなだれながら行くのが見えた。さうしてそのあとをすぐに松野幸江を中にかこんだ男達が、しやべりながら來るのであつた。彼は病院の門内にかけて込んで、その暗いところにゐる。彼等が過ぎ去つてしまふと、強い芙美子に對する愛着が焔のやうに起つて彼の胸を焼いた。彼は狂人のやうに、また芙美子の家の方に向け出した。

10

彦一はきつと其邊に芙美子がまだかくれてゐるやうに思つてゐた。彼女がうなだれて、恐らくは泣いて歸つて行つたであらうことを思ふと、自分も泣きたいほどに寂しかつた。さうして彼は匂ひのあとをつける獸のやうに、うろ、うろと四邊をさがし廻つた。けれど彼女の影はもう無かつた。

『もつと話があるんだが……』

彼は自分の心に悲しく呟いた。

彼が彼女の家の前に立つた時、どこかで犬が長く啼いた。そしてその家は、いんとしづまりかへつたまゝ、黒い影を空の下に浮き出してゐた。

彼はぐつたりと疲れたやうに、その門に凭りかゝつた。凡てが無意味にすぎ去つて、彼女の心持を酌まなかつたことが悔いられて來るのだつた。そして彼女がどんなに決心してゐるか、彼女がどんなに悲しんで望みなく歸つたかを思ふと、絶望が彼を取り卷いた。

『駄目だ。』

彼は青白い顔を門柱の灯にさらした。

自分を腹立たしく思ふと、彼の眼から熱い涙が流れて來た。胸はしめつけられるやうに痛くて、その底に彼女の顔が暗くうつゝてゐるやうに思はれた。

『あゝ。』

彼は泣きながら頭をかきむしつた。死ね、彼は生きて甲斐のない自分が、荒野をさすらつてゐるやうに呟いた。それから、よろ、よろとそこを離れて行つた。彼の心に病院に昏睡をつゞけてゐる少女

のことが歸つて来た。

いつか氷雨がしつとりと降つてゐた。電車の音が彼の耳にひびいたが、彼はそれにも氣が附かなかつた。三四間病院の前をまほりすぎてから彼はとほとほと引つ返した。一夜の中に來たいろいろなことが、彼の心の中で混ざり合つて、病院の階段をのほつて行く時分には、彼は自分の顔がほつとはれほつたくなつてゐるやうに感じた。

病室の扉の前で彼はためらつてゐんだ。それから思ひ切つて這入らうとした時、扉がかへつて中からあけられた。

『あ。』

彼はあわてゝ顔をそむけようとしたが、そこにはおどろいたやうに、青木夫人の瞳が彼をのぞいてゐた。

『まあ、大谷さん。』

夫人は美しいその眉をひそめた。

『あなたでしたのねえ。私、誰かと思ひましたわ。下から上つて來て、どうしてそこに立つてゐたんですの。』

夫人にみちびかれるやうに、彼は病室に這入つてほとと吐息をした。少女はまだ昏睡をつよけてゐるやうに見えた。そしてその部屋には外に誰もゐなかつた。

明るい光の下で彼を見ると夫人はおどろいて、その大きい瞳を見はつたが、ひそかにさゝやくやうにたづねた。

『どうなすつたの。まつ青よ。この少女よりあなたの方が病人みたいだわ。』

『なんでもないんです。』

彼はさうこたへたが夫人は許さなかつた。そしてその白い手を彼の額にあてると、すぐに彼の手を取つた。

『まあ冷たい。まるで氷みたいだわ。あら、濡れてるのね。外をそれで歩いてゐらつしやつたの。』
彼は是非なくうなづいて、その手を離さうとしたが、夫人はほゝゑんでゐて、離させなかつた。

そしてすぐに少女が昏睡からさめたので彼を迎へに看護婦が來たことや、彼が出たあとなので彼女が自分で來たことを告げた。そして青木ドクトルも歸る前に診て行つたが、少女が泣いてそれを拒んだことや、ドクトルの話では落着いてねむらせておけば、三四日で恢復するだらうとの事であることを語りながら、夫人は彼の手を愛撫することを忘れなかつた。

『此の娘はあなたを呼ぶの。私を助けてくれた人を呼んでくれつて。随分ひどい營養不良よ。でも可愛いゝ子だわね。そして私がいろいろきいても返辭もしないんですの。そして疲れてゐるミ見えて

眠つてしまひましたわ。」

『さうでしたか。』

彦一は夫人が手を離してくれたので、ほつと吐息をして疲れた身體を壁によせた。少女が甦つてくれたことはうれしかつたが、心はぐたぐたに挫けて、身はよぢられたやうに疲れ切つてゐることを知つた。

『ありがたうございました。私が歸りましたから、奥様はどうぞ。』

『まあ、ひどい人。』

夫人はその豊かな白い手をあげて、彼の膝を軽くたたくと、美しい齒を見せて笑つた。

『もう、私を追ひ出さうみなさるのね。でもあなたも病人だわよ。まるで小鳥が風にでもうたれて來たやうよ。私、邸の方にさう言つてやつて、今夜二人の病人を看護するわ。いゝでせう。』

若い母のやうなその夫人を彼は嫌つてはゐなかつたが、「燕」のやうに、彼を愛する心持が彼にはわからなかつた。それが息子を愛するこゝろよりか、情人にでも對してゐるやうなのが、彼の魅されやうとする感情を呼びさましてゐたのであつた。母とすれば彼の飢ゑてる魂は、それにすがつて泣いたかも知れなかつた。しかしそれが戀とすれば、彼を身をかくして恐れるより外なかつた。だから彦一はかたく坐つたまゝ火を恐れるやうに夫人からゐざつた。

『うそよ、うそよ。』

夫人はまた美しく笑つた。

『イヌマニエル、お休みなさい。』

夫人はざれたやうに言つて立ち上つた。さうして華やかなほゝろみをこぼしながら出て行かうとしてふりかへつた。

『あなたも氣分がわるさうだわ。ぐつすりとよく眠りなさいよ。』

『はい。』

彼は甘えようとした母に逃げられたやうな空虚を感じながら、夫人のスリッパの音が階段を下りて行くのをきいてゐた。やがて彼はほつと吐息をすると夢のやうにうつとりと少女を眺めた。

『人生は美しいけど寂しいのだ。』

彼はさう呟いて立ち上ると、そこにおかれた蒲團を取つてくるりとくるまつた。湯燗爐のとほつてゐる病室は寒くはなかつたから、彼はすぐに青年の深い眠りに落ち込んで行つた。

孤獨は人生を寂しく味はせる。しかしそれ故に孤獨の人は愛を求めてゐる。求めるものに逢はなければ人は狂するだらう。それが運命のあたへた青春の試煉であつた。若くして人は孤獨を嘆くが、それは愛を求めてゐるからに相違なかつた。そして人生はそれを幾萬度くり返して來た。

朝、彦一はうつらうつらと、そのやうに自分を考へてゐたが、ふと物音におどろいてはつきりと眼をさました。

『おや、お前どうしたんだ。』

彼はふり向いてはね起きると少女が立つてゐるのを見た。それはいま瘦せた肩をあらはして病衣を脱がうとしてゐた。

『なにをするのだ、お前は病人だよ。』

彼は少女にとびついてそれを止めると急いで病床におしこめた。少女は黙つて彼のするまゝになつてゐたが、白い眼で彼をにらめてゐた。

彦一はたづねた。

『どうしたんだい、起きたりして。』

『いや。』

少女はうるささうに眉をしかめた。

『なにを怒つてゐるんだ。』

少女はそつと臉をとぢて答へなかつたが、すぐその病的に大きい瞳をぱつちりと見開いて彼を眺めた。

『歸りたいの、私、歸りたいの。』

『え、どこへ。』

『上田屋へ。』

『なんだつて。』

彦一は自分の耳を疑つた。それから少女が狂してしまつたのではないかと思つた。

『どうして、どうしてなのだ。』

『あんたは私をだましてゐるんでせう。』

『なに。』

『きつとさうよ、さうよ。親切なふりしてだましてゐるのよ。なぜつて……私知つてゐるわ。あんたもあそこへ買ひに來たんだわ。私でなくつても、外の人を……それにきまつてゐるわ。』

『そ、そんなことはないよ。』

彦一は顔を赧らめて恥ぢてしまつた。そして苦笑しながら、頬をひきつゝて瞳を輝かしてゐる少

女を、小さい野獣であるかのやうに思つた。少女の様子の中には、なにともしれぬ狂暴なものがあるのだつた。

『いゝわ、いゝわ。』

少女は急に叫んだ。

『あんたがそんなことをすれば、私噛みついてやるから、そしてあんたを殺して死んちまうんだ。私、死んだつて、死んだつてかまやあしない。』

彦一があきれてゐる耳に急に少女の狂ふやうな聲がひびいた。

『行つちまへ。』

少女はぐるりと腹這ひになつた。

『馬鹿、馬鹿、馬鹿、どこかへ行つちまへ。私は、私は、あんたなんか大嫌ひだ。みんな、みんな、誰だつて嫌ひだ。』

彦一は胸をふさがれるやうに、少女のその様子の中に悲しさがあるのを見とめた。さうして立ち上ると、すぐに出て行かうとして少女をふり返つた。

『行くよ、行くよ、怒るではないよ。』

少女は黙つてしまつた。息を喘ませて彦一と見つめ合つた。それから急に枕許の薬瓶を取り上げ

るゝ、壁に向つて力いづばい投げつけた。れそは音を立て、破れると破片がばらばらととび散つた。

『ほうら破れちやつた。』

て女は狡るさうに彼の方を盗み見て外を向いてしまつた。そして強い叱責かなにかと來るのを待ち受けてゐるやうに、ぢつと身をちぢめてゐた。

『いゝよ、いゝよ。』

彦一は悲しさうにほゝゑんだ。

『なんでも思ふとほりにおし、ね、それがお前の病氣だからね。そしてそのあとではしづかにねるんだよ。僕がいやならあつちに行つてゐるからね。』

彦一は自分の中に清々しい寂しさを感じると、うたれたやうに小女を眺めてゐるが、やがて出て行かうとして扉に手をかけた。

少女が身を起して叫んだ。

『待つて、待つてよ。』

彼女はかけ出そうとするかのやうに、彼に向つて手を上げたが、泣くやうに哀れな聲を上げた。

『こゝに來て、こゝに。』

『え。』

彦一はしづかに少女に近づいて坐つた。

『行かないで、私が、私がわるいの。私はわるい子よ。許してね。許してね。』

少女は彼に取りすがつたが、急に泣き出したので、その涙がほろほろ彼の手におちて来た。彼はすぐ少女をさへて言った。

『泣かなくてもいよよ。わかつてるる。』

少女が身をふるはせてゐるのを見ると、彼は自分も感情が昂ぶつて涙ぐましくなつて来るのだづた。彼はそれをちつと耐へて少女を見まもりながら、しづかにさよやいた。

『おね、おね、起きてるとわるいよ。』

『えよ、えよ。』

少女は泣きぢやくりながら床に這入つてつゞけた。

『あんたは、あんたはいよよ人なの、ほんとにいよよ人なの。わかつたわ、そして私が、私がわるもの。』

『いよよ、いよよ。』

彦二は自分も鼻をつまらせながら、薄團を着せてそれをたよいてやつた。少女はすなほに仰のけ

になつて腫をつぶつたが、涙は絶え間なく流れてゐた。彦一はそれをハンケチで拭いてやりながら自分もすすり泣きたいやうに悲しい氣がした。彼は兄が妹に對して持つやうな愛情で、この少女のために盡さうとする心になつてゐた。

一一一

薬を飲む時刻になつてから彦一は看護婦にたのんでそれを新しく取つて貰つた。そして看護婦は親切にそれをすゝめた。少女はすなほにそれを口に入れたが、すぐにほき出してしまった。

『まづい。』

彦一はそれをやさしく眺めた。

『いけないね、飲まなくては。』

小女は、やつとうなづいて、また口に入れて貰ふに、眉をしかめて、それを飲み込んだ。それから彼女は急に笑ひ出した。

『私、私、いよよ子になるわ。』

少女はすぐ黙るとちつと彦一を見つめて頬を赧らめた。それからすほりと薄團をかぶつてしまつ

た。

『どうしたの。』

彦一がそれを取らせようとして手をかけたけど、少女はしつかりとおさへてゐた。

『およし、ちゃんとおね。』

『いや。』

『どうして。』

『なんでも、いや。』

『困るよ、ね。』

『でも、私、泣いたから恥かしいの。』

彦一は彼女の心の中にめぐんで來てゐるものに氣が附いて黙つてしまつた。それからその日の中にいろいろとしなければならぬことを考へてゐた。芙美子のためにはルビーを買ふために勝山に逢はねばならなかつた。それから少女のためには、その家をたづねてやりたかつた。夫人に逢ふことは、うしろめたい氣がしたが、それにもこの少女のことをたのんでおかねばならなかつた。けれどもどうしてこの少女をこのまゝにして行かれやうか。……それに彼はこの少女からききたいことが澤山あるのだつた。それをきいた上で引き取つてやつてもいい、彼はそんなことも考へてゐた。

少女の食事がすんでから、彼女は少しづつ彼に身の上をうちあけた。歸らうとする家は澁谷の道

玄坂上を右に這入つて路次裏で、そこに祖母が一人で暮らしてゐることもわかつた。

『おばあさんはそりやあ貧乏してゐるの。前にはお裁縫ができてよかつたけど、此頃は眼が悪くなつてしまつたの。』

少女は話の緒口がひらけると、その大きい瞳を見開きながら、訴へるやうに語つた。それはやるせない不幸の捌口を彼に見出したからのやうに思はれた。そして彼女は話が非常に上手であつた。『おばあさんは、いまではまるでよく見えないの。だつて夜になると針のめどに糸がとほらなくて私がしてやる位なの。だから私、ねる時どつさりとほしてやつておくんだわ。さうするとおばあさんてば、おそくまで裁縫をしてゐるわ。夜中なんか私が眼をさますと、まだやつてゐるの。』

——おばあさんおねよ、つて言ふと、

——あゝ、つて言ふけど止めないの。そしておばあさんは私に言つたわ。

——いくら澤山してもお金が足りない、つて。そしてそれはほんとなの。私達はなんにも喰べられなくて、裁縫が上るまで待つて、それからどつさり喰べるの。』

『父さんは死んだのかい。』

さうたづねられた時、少女の瞳には憎みと敵意が燃え上つたやうに思はれた。

『いゝえ、知らないわ。……けれどおばあさんは、その人を憎んでゐるわ。そして私だつてその人が憎らしいのよ。だつてその人はお母さんをすてたんですつて。それから私達がすつかり不幸になつたの。母さんもそれから気が違つたんだわ。そして大きな病院で、牢みたいなところに連れてかれちやつたの。』

おばあさんはそれで言ふの。

——世の中つてひどいところだ。お前の母さんをすてた人はいまでも立派に暮らしてゐるのに、私達はこんなにみじめである。せめて母さんが病氣にならなければ、父さんをひどいめに逢はせてやりたいけどそれも出来ない、つて涙をこぼしてゐるの。

——私、きつと仇を取つてやる、つて言ふと、だからおばあさんが喜ぶの。

——さうだよ、世の中つてひどいところだ。憎らしい人達ばかりだ。父さんばかりではないよ。世の中の人達はみんなわるいものばかりだ、つて泣くの。そんな時、私も泣いちまつて、誰にでも喰ひついてやりたくなるんだわ。』

『その父さんの名はなんて言ふの。』

少女は急に泣き出しさうになつた。

『いや、知らないわ、そんな人……私、きゝたくもないのよ。』

彼女はそれを知つてゐるに違ひなかつた。しかしどうしても言はないで、強ひてたづねると泣き出しさうに黙つてしまふのだつた。

暮になつて彼女の祖母は乞食でもしなくては生きて行かれないやうになつた。さうして僅かの金を借りて彼女は奉公に出た。その祖母も彼女もだまされたのだつた。

少女がまだ十四であること、十月に生れたからまだ満十三にもなつてゐないことが、彦一の心をのゝかせた。社會の悪、どうにもならないその運命、さうしてその父のしてゐること、それらを考へると彼は火やうに胸が燃えて來るのであつた。そして彼女の話が誇らしげなのも彼の心を痛くさせてゐた。

『私の名は小杉百合子つて言ふの。そしておばあさんの子になつてゐるの。』

彼女は大人おとなのやうにませてゐるが、紙のやうにうすい陶器、そのやうに破れ易い性情を持つてゐることがははつきり彼にわかつた。それは鋭いけど、あぶなげな存在であつた。そしていつも張りさけさうに憎んだり悲しんだりしてゐるのも彦一にわかつて來た。

その日の午後、彦一は勝山のところに出かけた。さうして、いろいろと話をつゞけた末、夕方までかゝつたので大急ぎで歸つて來たが、少女はもう病院を逃げ出してゐた。彼は自分の徒勞になつた親切が腹立しかつた。そして青木夫人の言葉も彼を苦しめた。

『まあ、小さい奥さんがなくなつたんで大騒ぎをなさるのね。少女おのこはなんにもあなたに感謝して
るやしないのに、あなただけがさはいでるなんて、おめでたいわけよ。またもとの古巣に歸つた
かも知れないから、探してゐらつしやい。』

彼はなぜ少女が彼からかくれたかも知らないので、非常に不愉快にされた。しかも二三日の後
道女坂上をたづねた時、お針の老婆もどこへか越してしまつてゐた。彼はその日から、悪夢のやう
に心を往來する少女の姿を追ふこゝが出来なかつた。たゞその少女が一旦その家に歸つて、それか
ら急に移つたことがわかつたので、それが幾らか心を慰めてゐた。

『老婆と少女は自分でなく、外山とやまを恐れたのだ。』

彼はそれを信じてゐた。——人生に於ける美しい機縁がそこにある、信ずるといふことで、そこ
には青春の魂の生きる達が擴がつて來たのだ。彼が信じたのは少女の心だけであつたらうかを疑は
ねばならぬ。

戀！ 彼は彼女をも心に信じたのだ。

それは彼がつかまへてゐなくてはゐられない、それなくして生き得ない人生に於ける出發の信條
であるのであつた。

第二篇・早春

戀のピエロ

人生を純情に生きるには孤獨を必要としてゐる。……貧しさに耐え、人にかくれ、世を絶えてゐなくては、純情のまゝに過ごせる筈がない。——が、眞の純情は決して人生を忘れてゐるものであつてはならぬ。

そこに孤獨は人生への疑視となる！

さうしてそれが大きな野心アンビションとなるのはすぐだ。

純情が大きな野心から湧くことを信じないか？——否、大きな野心そのものが純情であることを……それを先人の大きな足跡に見るが、それらが純情なくして、永くこぼたれない魂の仕事をなし得たであらうか。

たしかに、ひたむきな大きな仕事は純情から湧くのだ！

野心を持って！——さうして更に深い孤獨にあるこここそ、彼をして人生に成果あらしめるのだ。魂に於て、多くの先人は正しくその道を示したが、冬の苦惱をとほして新しき芽生を、自然もそのまゝの姿で惜しみなくその心の教へてゐる……。

三月になると都會の街路に冬を慄へてゐた落葉樹も新芽をつけはじめた。凍つたやうな空が萌黄色にあたゝかくなると、煙のふかいのもそれとして空がやはらかいやうに思はれた。風が冷くさへなければ、そして太陽が輝いてゐる日ならば、地上は春のやわらぎを見せるのであつた。

けれど風が吹けば樹が揺れる。北風に吹きすさまれては、三月もまた烈しい冬であつた。さうして大谷彦一は、その北風の中に、冬の苦しみを味ひつゞけてゐた。

彼は自分をみじめだつらと考へることは出来なかつた。彼は卒業論文を怠けて、到頭大學へ一年残る心算こころざしになつた。しかし彼は考へてゐた。自分は怠けたのではない。参考書を思ふやうに讀むことが出来なかつたからだ。さうして自分はまだ生きる意思がある。未來にきはつと文學者として立つことが出来るのだ。なにを悲觀することがあらうか。けれど彼は自分を小さな鏡の中にうつして、髪はほほうほうと長くなり、ううす鬚が疎林のやうに生え、青ざめ瘦せてゐるのを見ると、その考へを悲しく笑ひたくなるのであつた。そして彼は思想的にも自ら變つて來たここを考へざるを得なくなつてゐた。

『かわいさうだなあ、彦一。』

彼は自分の姿に自分で話しかけた。『僕はこの頃まるつてゐるぞ。しかしこの體驗はいいことだ。これが役立つ日がきつと來る。僕は人間として、ほんとに主觀に徹底して生きてやる。——だが、

だが、もう米がなくなつた。この大文學者もひほしになつてしまふぞ。

髪は長いし、どうしたらいいかな。

よし、青木さんのところに借りに行つて來よう。少し恥しいが、仕方ない。そして髪を刈つて、米を買つて、少し春らしい氣持になつてやらう。』

彼は痩せた頬を撫でると悲しく微笑した。彼はいままで少しでも青木夫人に金を借りることを恥ぢてしなかつたが、それより外に彼の取るべき方法はないやうに思はれた。

一月のはじめに彼が手に入れた二百圓は、半分だけルビーを買ふために勝山にわたされたのだつた。けれど勝山は落膽したやうに彼を訪れて來た。

『駄目だ。逆もあの石のやうな素性のいいのはないよ。入れてごまかしたつてすぐわかつてしまふし、却つて君のうたがびを深くするだけだ。かうなると芙美子さんにあやまつてしまつた方がよかつたねえ、ほんとのごみをうち明けて。』

彦一はそれをきくと青ざめてしまつた。勝山がまたなぐさめた。

『ねえ、この六疊より外に石のなくなつたと思はれるところはないんだ。もつとよく探して見たらどうだらう。』

『駄目だ。探すだけは探して見たんだ。』

彦一は手を慄はせてゐた。そして眼だけは狭い部屋の中をさまよつた。けれどルビーの珠のかくれてゐるさうなところは無かつた。どんな隈々でも、彼が時々思ひ出したやうにほちつて見たのだからだつた。彼は絶望したやうに勝山がふところから取り出した紙幣の一重を見つめてゐた。

『百圓だ、君に返さう。』

『いゝ、持つて行き給へ。役に立たなければもう要らないんだ。僕はまだ百圓近く持つてゐるから、君が使ひ給へ。そして少しでも家の者をなぐさめてやり給へ。』

『え、これをみんなかい。』

『あゝ、みんな……せめてそれが君の役に立つだけでも、僕はそれでいいんだ。』

彦一は泣くやうにそれを言つてうなだれてゐた。彼が盗人のやうな思ひをしてまでこしらへた金が、なんにも役に立たないと思ふと悲しかつた。そして勝山が辭退しても、その金をおいて行くことを許さなかつた。勝山も泣き出しさうになりながらやつとそれをうけ納めて歸つた。

彦一はそれから十日ほどして、父から家にすぐ來るやうな手紙をうけ取つた。けれど彼は出て行かなかつた。そして下宿にとちこもつたまゝ、ほんやりと日を暮らした。足の不自由なその母が、あわてゝかけつけたのは、その二三日後だつた。

その母は彼が證書を持ち出したことがわかつたことや、父が烈しく怒つてゐることなどを告げ

の玄関の呼鈴を押した。さうして暫くするに顔を知らない女中が扉からのぞいた。

『大谷です。奥さんにどうぞ。』

『はい。』

女中は輕蔑したやうに彼を見つめた。

『どんな御用でせうか。』

『え。』

彼は胸をつかれたやうに立ちろがすにはるれなかつた。そして黙つて自分の足許に眼を落した
が、汚れた朴鹵の下駄の上に乗つてゐる自分の足は黒かつた。彼は四五日湯にも這入れないでゐた
からだつた。

『奥様はいまお出掛のお支度中ですから、お眼にかゝれないか知れませんか。』

『さうですか。』

彼はむつとしてくるり三歩を返した。そして門をでて二三歩行くと向うから小急ぎに歸つて來た
光子とばつたりと向き合つてしまつた。

『あら、大谷さん、いついらしつたの。』

『いんです。』

『え。』

『いま來て、いま歸るところです。』

『まあ、どうして。』

『女中さんに……ごちつきとでも見られたと見えまして。』

『それで怒つて歸つちやうなところだつたんですの。』

『え。』

『まあ、よかつた。』

光子は仰山にその大きく美しい瞳を見はつた。その顔は母に似て、より魅惑的なところを持つて
ゐた。さうしてその唇が、やはらかく赤いのが、鮮かに目立つてゐた。

『母さんがあなたのこゝをよく言つてるのよ。あとできいたら絲やが吐られるわ。さ、行きませ
うよ。』

その時取次に出た女中が門口にかけ出して來た。そして顔を赧らめながら近づいた。

『まあ、失禮いたしました。奥様がお待ですから、さうぞ。』

『いゝわよ。大切な大谷さんを追ひ返したりして。』

光子の言葉に女中に悄然さうなだれて二人のあとをつゞいた。

彼がとほされたのは夫人の私室で、彼女はいま化粧の最中と見えて、鏡に向つて兩肌をぬいでゐた。白いむつちりした腕が急がしさうに動く、彼女は鏡の中で微笑した。

『まあ、大谷さん、どうしてゐたの。ちつとも見えなかつたわね。』

『すみません。創作してゐたものですから。』

『さう、なにを。』

『戯曲です。』

『出来上つたのね。それでそれを持つて来たのね。』

『いゝえ。』

彦一は夫人との約束を思ひ出した。それは彼の處女作が出来上つたら、一番最初に彼女に見せることであつた。彼は忘れてゐたそのことで、夫人にすまないことをしたと思つた。

『ぢやあ、まだ完成しないの。』

『出来たんですけれど。』

『あら、そしてどうしたの。』

『いきなりいゝかわるいか知れないけれど、新興社に送つちまつたんです。』

『まあ。』

彦一は夫人が肩をすほめたのを見なかつた。それはあまり官能の高い匂ひで、夫人の肌が充ちてゐたからであつた。孤獨に過ぎて来た彼に、その魅惑はあまりに強かつた。

『いゝわ、おほえていらつしやい。しかへしして上げるから……あゝ丁度いゝわ。その罰に今日は私達のお伴をするのよ。』

『え、どこへですか。』

彼はまた夫人の好奇がはじまつたと思つた。夫人ははじめてくるりとふり向くと、その肌を入れようとして立ち上つた。

『行けばわかるわ。ほら、これも罰の一つよ。私に着物をとほさして頂戴。』

夫人が白い背を持つて来たので、彼は椅子から立ち上つて、夫人のむつちりした肩に、その着物をうちかけた。彼女はすぐに彦一を見つめて笑ひ出した。

『まあ、無精な人……まつ黒ぢやあないの。お湯に這入つてらつしやい。私が鬚を剃つて上げるわ。自動車が待つてるから早くするのよ。』

『でも、どこへ行くんです、誰と。』

『光子も一しよですわよ。ね、早く這入つてらつしやい。』

彼は急ぎ立てられたので、夫人に呼ばれた女中のあとをついて風呂にとび込んだ。そして手早く

久しぶりの垢をながしてゐると、夫人が剃刀を手にして這入つて来た。そして彼が否むのもかまはずに顔を剃つてくれた。彼はうれしいよりか涙ぐましい氣がした。久しく來ない彼をそんなにまでしてくれる夫人が、感謝を捧げていゝ人に思はれた。

彼がやがて湯から出ると、支度を濟ませて來た光子に、夫人が彼を見させた。

『大谷さんは、この方が藝術家らしくていゝわね。いつそオールバックにするといゝんだのに。』
『さうね、よく似合ふわ。』

彼は鏡の前に立たせられて、自分が生々としてゐるのを見つめた。彼は少くとも自分の中に青春といふものが過ぎ去つてゐないこと、そしてそれは人生をよろこぶべきであることを感じた。さうして美しい夫人達と一しよに出ることも幸福のやうに思はれた。出がけに彼はまたたづねた。

『どこへ行くのですか。』

夫人はそれに答へなかつた。

『まあ大谷さんは此頃どうかしてゐるわ。こんな下駄をはいてるのよ。』

彼女は彼のためにその夫の下駄を出してくれたが、彼の肩を軽くたたいて笑つた。

『大學生は、もう少し紳士らしくするものよ。』

『えゝ。』

彼はためらつてゐて、足が出せなかつたが、彼女達のあとを追つて、その下駄をはいて出た。夫人が彼を扉のところ待ち合はして、さゝやいた。

『今日はどんなことでも私の言ふことをきくのよ。ね、約束してよ。』

『えゝ。』

彼は魅はされるやうになつたが、自分が人形のやうに夫人の意のままになつてゐるのがほんとの氣がした。そして彼女達のあとから自動車に乗り込んで、夫人に指圖されるまゝに、その前の腰掛を引き出して、さし向ひになつたのだつた。

女中がそこに見送つて出たのに夫人がたづねた。

『まだなの。』

『いらつしやいました。』

『あ。』

彦一はばねのやうに跳ね上らうとして耐へながら、さつと赧くなり、すぐに胸をさわがせて自分が青ざめて行くのを感じた。それは盛裝した芙美子がそこに來たからで、夫人達の待つるたのは彼女なのであつた。

彦一は自動車の中の彼を認めて芙美子が、さつと顔色を變へたのを見た。彼女は一寸ためらつてから、會釋をしてクッションの端の席に身を沈めた。彼女の様子には花嫁にでもあるやうな、つましさがあつた。彦一は見のがさなかつたが、彼を見ると一しよに、悲しげなものが浮んで來たのもうつゝた。しかし二人は互に眼を逸らしたまゝ無言をつゞけてゐた。

夫人は中央のクッションに凭れてゐる光子を隔てゝ芙美子にほゝゑみかけた。

『よく、お髪が出来ましたこと。』

光子も吟味するやうに彼女に眼を走らせてゐた。彼女は初々しくうなだれて眉のあたりを曇らせた。

『大谷さんが來ましたの。それで、夫が出られませんか、その代りにお願いしましたわ。あなたの先生ですもの、丁度いゝでせう。』

『……………』

自動車がスピードを出してカーブしたので、彦一は芙美子の表情を読むことは出来なかつたが、

ちらつと走らせた眼に、彼女が青白くうつゝたやうな氣がした。なにか不安が彼をつゝむと、彼は縛られたものゝやうに顔を向けることが出来なかつた。そしてこはどつた頬が、ピクリと動くのを感じた。

夫人の膝は震動に揺れながら、彼の膝さやはらく觸れ合つてゐた。夫人は彼を魅はすやうに、その瞳で彼を見入つた。

『大谷さん、どこへ行くか、おわかりになつて。』

『え……………わかりません。』

彼の聲が、しはがれてゐるのを夫人は氣づかなかつた。彼はちらつと燒きつくやうに注ぎかけた芙美子の眼に不安な色を見た。

夫人が急に笑ひ出した。

『あてゝごらんさい。』

光子もそれをきくと美しい唇をほころばせた。彼は芙美子だけが、うなだれてしまつたのを見てまた妙に胸をさわがせた。

『さあ。』

『お目出度いことよ。その前提……………』

光子がはしやいで言ひかけたのを、夫人が腫で止めた。彦一は今日の夫人の外出が、芙美子のことに關することだけは想像されたから、自動車走りに連れて、その不安を増して行つた。夫人がそのまゝ黙つてしまつたから、彼は冗談にまぎらせて、たづねることも出来なかつた。運轉手は心得たものゝやうに、神田へと自動車を走らせてゐた。

彦一は急に自分がなんのために、こんなことをしてゐるのか、わからなくなつた。魅はすやうに彼を惹きつけようとしてゐる夫人と、清らかな愛を捧げてゐる芙美子とが、一つ車内にかうしてゐることがたまらなく不愉快になつて來た。

魅はされるなら、その中に溺れてしまひたかつた。愛し合ふふのなら、それを徹底して互を心をたしかめて手を握りたかつた。その二つの間に彷徨させられてゐる自分が、みじめな存在のやうに感じられた。さうして遣瀨のない感情の底へ彼を沈めさせてゐた。

窓の外を眺めて、娘の光子と話合つてゐた夫人が、急に彼の顔を見て笑ひ出した。

『まあ、どうしたの、そんな泣き出しさうな顔をして。』

『え。』

彼は自分の頬を撫でた。それは夫人の言葉を確かめでもするやうであつた。彼は芙美子までがちらつとほゝゑんだのに氣がついて、赧くなつてしまつたが、自動車が神田橋をぬけて、丸の内に這入つたのを見て、その行くさまがわかつたやうな氣がした。

『邦樂座に行くんでせう。』

そこで三月に這入るとすぐに、舞踊歌劇座のものがかけられて、新しい興味をこの都會の人々にあたへてゐた。あの恐ろしい大震災を境にして滅びて行つた歌劇が、その新しい一團によつて再び世の注目を集めた。さうしてその人々によつて、映畫と對抗しての新しい民衆の藝術が、そこに起るかのやうにさへ多くの人々を思はせてゐた。さうして一座の花形の一人に、松野幸江がゐるのであつた。彦一は孤獨の彼によせられた幸江の手紙のことを思ひ出した。それは正月のはじめに青木の家で彼女に逢つてからのことであつた。

『私は新しい人々の仲間に這入つてゐます。けれど心持はごく古い、まじめな人間となりたく思つてゐます。』

彼はその冒頭を誦誦するやうに胸に描いた。生活たのめにオペラ界に這入つてゐるけれど、浮薄なその人々の中へ溺れ込んでゐないとも書いてあつた。さうしてどこまでも自分を藝術家として伸ばしたいから、そのつもりで理解して欲しいともあつた。彼はそれに返辭をしなかつたが、彼女の純な氣持だけは、つきり感ぜられて、わるい氣持はしなかつたのであつた。それがほんとでないしろ、彼の若い氣持は、彼女の心をうけ入れてゐた。

夫人がほゝゑんで答へた。

『あたりましたわ、松野さんから招待されましたの。あの方、あんなに綺麗ですし、評判がいゝのよ。あなたも誘つてくれるやうにつて手紙でしたわ。あの方、きつとあなたをなつかしがつてゐるのね。この前もあなたのことをいろいろきいてゐましたもの。』

夫人の瞳はそれを話しながら、彼の眼をまっすぐに見つめた。彼にはその瞳の中に、母が愛する兒のためにするやうな嫉妬を讀んだやうに思つたが、それよりか、それが芙美子にどうひびくかを思つてちらりとその眼をうつした。しかし芙美子は冷たく窓の外を眺めてゐた。彦一はそれが物足りないやうなわびしい氣がしながら、ほてつて來た自分の頬を撫でゝゐた。彼には自分を愛してくる者は多い、と言つたやうな芙美子に對する反感が胸の底に湧いてゐた。

四

邦樂座は劇場としては小さかつたが、近代的の様式を備へて明るい座席を持つてゐた。さうしてこゝにかけられるものは、その有樂座時代の傳統は失つたとしても、新興の意氣を見せる劇運動のあらはれが多かつた。さうしてそれも、より藝術へと標準を高めて行く築地の劇場などとは違つて

より民衆へ、と言つたやうな、多くの人々をよるこぼせる運動の旗上げの所であるやうに感ぜられた。さうして、このより高くと、より廣くとは、現代の文藝の二つの方向として、批評家などにも深く考へられてゐるものであつた。

彦一はどちらかと言へば、自分の心により廣く民衆を求める劇を求めてゐた。それは恐らく多くの人々とは反對な思想であるに相違なかつたが、それでも彼は確信を以てそれを感じてゐた。

『藝術は時代の心だ。そして時代の心は民衆が持つてゐる。それに向つて突進するのが、新しい文學の要素でなくてはならない。』

彼の常に懐いてゐる意見はそれであつた。それがいゝにしろ、わるいにしろ、彼はそれに進んで行かないではゐられなかつた。最もいゝ表現をもつとも多く見せる。これが彼の考への最後の希望であつた。彼のその考へは、時代にその鋭鋒をあらはして來た階級的プロレタリア文藝や、農民劇に向つて彼の心を驅り立てゝゐた。彼はまだ舞踊歌劇座を一回も見てゐなかつたので、さうした意味で、それを「どんなに民衆的であるか」觀察することに興味を惹かれはじめた。

自動車が入口に止まると、夫人は物慣れた調子で、女王のやうに彼等を従へて、フェルト草履に軽く階段を踏んだ。

華やかな洋装をした幸江が走り寄つた。

「奥様、まあようこそ。お電話でしたのでお待ちしてましたわ。」

「まあ、今日は有難うございますの。あなたはまだなのですよ。」

「え、晝は終りの幕さ、その前の舞踊だけですの。夜は大分忙しいのですけど。」

「さう、大谷さんも一しよですわ。来ないと言ふのをだまくらかして、あなたのために連れて来ましたのよ。ほ。」

夫人は艶めかしく笑つた。

「まあ。」

幸江は顔を染めると彦一を見て會釋した。彼はたま魅せられたやうにあわてゝ禮を返しながらちらりと芙美子を見かへつた。そして彼女の顔に、かすかに不愉快の影がうごいたのを見つけた。

「しばらくでしたのね。」

「今日はよくいらして下さいましたわ。」

「いえ、招待して下さつてすみませんわ。それなくても私、来たいと思つてましたのよ。」

光子と幸江がそんな會話をしながら行くあとを夫人と彦一がつゞいた。さうして芙美子はつましくそれを追つて來たが、彦一は彼女の中に、なにかいつもとは違つた素振のあることが感ぜられた。

幕がしまつたばかりなので、廊下に群れてゐるオペラファンが、この一行を見送つた。

「松野が案内してゐるぜ。」

「美人ばかりだな。」

そんな聲が彦一の耳にひびいた。後れてゐた芙美子は、すぐ伏目になつてしまつた。彼女は四邊わたりに憚つておどおどしてゐるやうに見えた。彼女はかうした場所にも慣れてゐなかつたのだつた。

座席に着くこ夫人は芙美子を呼んで一番奥に着かせた。そして光子をその次ぎに、それから自分、そして自分の隣に彦一を坐らせた。夫人はそれから伸び上がつて、芙美子の座席の奥がまだ空いてゐるのを見ると呟いた。

「まだいらつしやつてないのね。」

「誰が來るんですか。」

夫人は意味ありげに微笑した。

「え、あなたしかりしなくちやあ駄目よ。今日は夫の代りに介添人ぢやあないの。」

「あ。」

彼は打たれたやうに黙つた。介添人！彼の若さは今迄氣づかなかつたが、その言葉は凡てが理解された。芙美子の盛装してゐることも、彼女がいつものつましさと違つた、初々しさにおどお

どしてゐるのも、みんなそのためだつた。

『人形。』

彼は自分を罵つた。さうしてそれは、芙美子に對する輕蔑であつた。そのくせ彼は、よろよろと自分が軽い貧血に胃されたのがわかつた。芙美子はふと無意味にその白い顔を上げたが、彼の血走つた眼とぶつかるとうすぐうなだれてしまつた。彼はわなわなと自分が慄えて來るのを意識して心を押し靜めた。そして自分といふものが、力の無い悲しい存在として、多くの人々の中で孤獨なを感じた。自分が知らないとは言へ、愛する者に背かれて、このやうな場所に來るのも、凡て腕輪のためばかりだと思はれた。

『だが、彼女は承知したんぢやあない。夫人に申込まれて餘儀なく出て來たのだ。』

彼はさう胸の中で呟いた。それはあきらめに似たやうな、自らへの寂しいなぐさめであつた。彼は幸江がそこに立つたまゝ、なつかしげにほゝるんでゐるのも忘れてゐた。彼女の瞳は彼の横顔に注がれて、唇だけが夫人に答へてゐた。

『あとで、樂屋を見せて頂きますわ。』

『どうぞ。』

『お忙しいんでせう。かまひませんわ、私達は、ゆつくり見物させて頂きますから。』

『えゝ、まだいゝんですの。』

開幕のベルが鳴つて人々が席に歸つて來た。幸江は通路にゐたので、彦一の方にびつたり身を寄せた。強い彼女の香りが彼に匂つて來たので、彼は眼を上げた。

その眼を素早く幸江がとらへた。

『よく、いらして下さいましたわ。』

『えゝ。』

彼はむづつりとしてゐた。

『お手紙上げまして、すみませんでしたわ。お詫びしますわ、私。』

『いえ、いゝです。』

彼は夫人が光子と話し合ひながら、ちらつと瞳を向けたのを感じるとあわてゝその言葉をさへぎつた。幸江はそこをとほる人におされて彼の方に身を曲げた。その熱い息が彼の頬に感じて來た。彼は自分が深い悲しみと、憤りと、魅はしみの、どれともつかないものに酔つて、心が熱くなつて來るのを感じた。彼は自分が誰かにすがつて、泣きたいやうな寂しさに襲はれてゐることもわかつた。それは甘い感情と、みじめな悲しみとの混りあつた奇妙な焦ら立たしさであつた。

五

幕があいても彦一は舞臺の上の喜劇風な舞踊詩劇には少しも心を惹かれなかつた。幸江はすぐ歸つてしまつたが、あとから來るであらうある人のことを考へて、後にばかり神経を使つてゐた。夫人がさゝやくやうに話しかけても彼の心はそはそはと落着いてゐなかつた。そして舞臺の上の道化た男の戀が、まるで自分のことのやうに胸をふさがされた。自分が悲しいピエロの役廻りをしてゐるやうな寂しさであつた。

夫人が後を見返つてそつと立ち上つた。

『高見さんこつちよ。』

彼はそれを見返つて立ち上つた。その男は無造作に夫人に會釋したまゝ、あたへられた席へ割り込んで行つたが、彦一はそれが三十四五の、色の黒い、顔の四角な會社員風な男であるのを見て取つた。それは物質のことより外に念頭にないやうな、脊のずんぐりした堅い人柄を示してゐた。

夫人が小聲に紹介したのも彼の耳に強くひびいた。

『こちら高見さん、この方高松芙美子さんよ。』

『や。』

その男のバスも彼には卑しげに思はれたが、芙美子はその男の前をとほるのに、軽くつゝましくふれたのも、彼女の純情がその男に汚されたやうに腹立たしかつた。

夫人が、そゝるやうに彼の耳に口をつけた。

「わかつて、ね、今日は芙美子さんのお見合なのよ。お目出度い立會人よ。」

彼は唇を噛みしめた。耐へてゐる涙が、胸の底に流れ込むやうに彼の心を悲しくみじめに打ちつけた。彼はかたく胸を抱きしめたが、その両手の力さへ、いつか萎えて來るやうに思はれた。さうしていつか涙が双の眼ににじんで來たが、それを耐へてゐると、なほ胸が熱く燃えて來るのであつた。

絶望！

彼は寂しくそれを抱きしめて、觀衆を笑はせてゐる喜劇の最中に、心で泣きつゞけてゐるのだつた。それは愛する者に裏切られ、踏みにじられた者でなくてはわからない悲しみの感情であつた。舞臺では醜い鼻の高い道化詩人が、美しい戀人の歡心を得るために、自分の詩をうたつてゐた。それは前の年に上演されて問題になつたロスタンの「ペルジュラック」に暗示を得たものである。こゝろが、彼にはすぐわかつた。

「私は心が素直でござる、
それでも戀はしますまい、
鼻の高いがわしの傷。」

私は力がすぐれてござる、

されども戀はしますまい、

眼玉めだまぎろりがわしの傷。

私はうたへば詩人でござる、

されども戀はしますまい、

醜みにく男おとこは泣いてりやよい、」

その道化詩人の唄は、卑俗ではあるが、どこかに哀愁をふくんでゐた。ただその調子からくるものが、観衆を笑はせて、脚光の中に美しく輝いてゐる舞臺の姫も、一しよに心から笑つてゐるのであるまいかと思はれた。しかし彦一はその唄と共に、咽喉のど元に込み上げて来る自分の涙を感じて、思はずすゝり泣かうとしながらにはつと氣がついた。さうして熱くなつて来る眼をしばたゝいて、自分の不幸をそれに較べて考へながら、身に泌しみみるやうな哀れさを舞臺の上に投げかけた。舞臺の上で道化詩人が言つた。

「姫様、私はうたつてをりまする。この通り涙をながしてな、戀すまいと思へばこそ、この通りにうたつてをりまする。さうすると私はいつたい、生命いのちをかけた戀をでも、この通りに茶化さうとする男ぢやと思ひなさらうが、それは大違ひ。私は人生を茶化することが嫌ひで、生命を打ち込んだ戀をしてる故、こんなに浮かれたやうに泣いてゐますのぢや。」

舞臺の姫が笑つた。

『ほムムムム、可愛いをかしな人、お前は水が好きぢやと見える。』

『さやう、姫様、戀の清水がな。』

『いムえ、いムえ、お前に吞ませるのは苦い水ぢや。あきらめ、嘆息、それから失戀、まあその顔をさうした水にうつして見るがよい。自分で吞んだ水に合點が行かう。』

『や、これは、これは。』

『笑つたがよい。これ、道化もの、自分を笑つたがよい。そなたは一生を笑ふやうに出来てゐる。』
『恐れ入りました。姫様。さやう、その通り、私は笑ふやうに出来てゐる。鼻びくピクびく、眼をバチクリ、あざけられて、それに答へるのもこれでござる。』

彦一はそれを見てゐられないほどに氣がたかぶつて来て、思はず舞臺の人物に怒鳴りつけたくなつた。「笑ふな、泣け、泣いてやれ。」

が、考へると、それは彼自身が心に叫んでゐる聲なのであつた。彼は悄然として、自分の立場を思つた。愛する者が、見も知らない他人に賣られやうとしてゐる。それを黙つてゐる、しかも介添人のやうになつてゐる自分こそ、あの道化詩人と共に泣くべきではないか。

『駄目だ、自分は背かれてしまつた。』

彼は心に咬くと、湧き上つてくる涙をおさへて立ち上つた。夫人が彼を引き止めた。

『どこへ行くの。』

彼ははつみ思つて腰を下したが、その拍子に、芙美子が高見のさゝやきに、つゝましくうなづいてゐるのを見た。

『あゝ。』

彼は怒りに手が慄へるのを感じて、両手をぐつと互に組み合せて膝を立てると、その上に顔をふせてしまつた。

『ほゝ、ほゝ。』

夫人は舞臺に氣を取られて笑つた。彼は芙美子を賣らうとする人が彼女だと思ふに、急に嫌惡の情がこみ上げて來た。そうしてその席から駈出て行きたいやうに思つた。しかし彼はそれを制して舞臺に向つて顔を上げたが、そこでは戀に狂つた道化詩人が、笑ひの中に死んで行かうとして急に

うたひ出した。

「あつはつはつは、戀の毒、

呑んで死にましょ、笑ひ死に。

私しや笑つて死ぬのでござる、

ひとりでかうして死ぬのぢやねる。

道化人形の笑ひ死に、

うつけ男の笑ひ死に。

なんと面白い世の中ぢや、

道化人形は戀死にぢや。」

幕がそれから靜かに降りて來た。さうして滿場は笑聲に充たされた。しかし彦一は笑へなかつた。青ざめて、前の椅子の脊をしつかりと握つたまゝ眼を据ゑてゐた。それは泣くよりか苦しい、失戀のすさまじい嵐に打たれてゐたのだつた。さうして彼は、その道化詩人のためにいたましい涙の胸の中に感じて、破れやうとする心臓の痛さを僅かに耐へてゐた。

夜の場にうつる前、彼等は食堂にゐた。それは青木夫人に取つて豫定の行動で、彼女が幸江^{ゆきえ}を夕方の食事に招待したのも、見合といふ機會を兼ねて幸江にも好意を見せようとする心持があらはれてゐた。しかし幸江は樂屋が忙しいので來られないと斷つて來た。

彦一は晝の場が終るとすぐに歸りたかつた。しかし電車賃の持合せすらないので、躊躇してゐる間に、食堂に行くことになつてしまつた。彼はそこに芙美子と向き合してゐるのが、熱湯をでも吞ませられてゐるやうに辛いので、食事が濟むと一しよに立たうとしてゐたが、その機會を捉へられないで焦ら立つてゐた。

高見が話しかけた。彦一は紹介されたので、それが夫人の遠縁にあたる高工出の鐵道の技師であることを知つてゐた。

『大學の方はなにをやつてますな。』

『文科です。』

彼の答へに高見は輕蔑したやうな笑ひをうかべた。

『はゝあ、とすると教員の方でも御志望と見えますな。』

老成ぶつたその調子が、彦一の若い心をむかむかとさせてゐたので、彼はそれに答へるのに冷たい笑を示した。

『文科を出れば必ず教員になるとも限りませんね。僕は創作をやるつもりです。どうせ、學校なんて役に立ちはしないんです。』

『さうでせう。』

高見は意を得たといふやうにうなづいた。

『大學の文科なんて、どうせのらくらしてゐる連中ばかりらしいですからね。工科や理科の落武者がそつちに廻るので……。あなたはさうすると小説でもお書きになるつもり見えますね。まあ菊地寛なんて人も出たんですから、精々勉強するんですな。あの人の『第一の接吻』を私は活動で見ましたが、なかなかいゝものゝやうですな。』

光子はぶつと吹き出しさうになつて夫人に腫でたしなめられた。芙美子は自分が恥かしめられたやうに赧い顔をした。

彦一は的を射はづれたやうな、その高見の非常識さに憤ることも忘れた。「第一の接吻」なんてどこからかつぎ出して來たのか、これでこの男の教養^{カウチユア}がわかると思つた。さうしてそんな男を芙美子のために見つけ出した夫人の心持がひどく卑しまれた。彼は答へることも忘れて、自分はどうかあらうと、芙美子のためにも、この縁が結ばれないやうに心で願つてゐた。

そこへ樂屋から使が來た。それは手がすいたから來てくれと、幸江が言つてよこしたのだつた。

夫人と光子が立ち上つた。

『皆さん、いらしやらない。』

夫人のその言葉に高見も立ち上つた。

『僕も行つていゝんですか。是非見せて頂きます。後來の参考のために。』

『僕はよしませう。』

彦一は立たなかつた。そして芙美子が躊躇してゐるのを高見がすゝめた。

『どうです。行つて見ようぢやありませんか。』

『私、よしますわ。』

芙美子は夫人を見上げて答へた。それは、はしたなくさうしたまゝころに出這入りするのを控へたと言ふやうであつた。敏感な夫人も彦一と芙美子の間のことに就いては少しも疑つてゐなかつたので、彦一が幸江のところに行かないことを、かへつてよろこぶやうに見えた。高見も芙美子を連れて行きたいらしかつたが、夫人にうながされて出て行つた。

二人は黙つて向き合つてゐた。すぐに開幕のベルが鳴りひびく、人々はざわめいて、そここゝから立ち上つた。さうして片隈の植木の蔭に二人はほつりと取り残されてしまつた。

芙美子が身をうごかしたが、それか立ち上らうとするやうに見えたので、彦一は胸をとどろかした。言ひたいことは山ほどあるやうで、彼の唇は慄へてゐたが、舌がもつれたやうにうごかなかつた。

芙美子が悲しさうに彼をちらつと眺めた。そしてほつと吐息をしてうなだれた。彦一は泌み込んて来る悲しさに、わくわくと胸ををどらせて彼女を見つめた。

『芙美子さん。』

『はい。』

芙美子も顔を上げた。彼はその瞳がうるんでゐるのを見た。二人はびたりと見つめ合つたまゝ黙つてゐた。

『まゐりませうか。』

芙美子は身をもむやうにもだえながら唇を慄はせて言つた、立ち上らなかつた。彼にはそれが彼の言葉をうながすやうに思はれた。

『待つて下さい。僕は、僕はなんにも知りませんでした。』

彼は聲を慄はせると四邊を憚つてさゝやいた。

『けれど僕は意外でした。どうして、どうしてあなたは、高見なんかと結婚（彼は自分の髪をかきむしりたい氣がした。）結婚しようと、す、するんです。』

芙美子の腫は悲しさうだつたが、すぐに冷たいものが閃いた。

『言はないで下さい。私、私、ちつともそんなこと考へてゐないんですの。し、死んだつて、誰とも結婚などしませんわ。私、青木の伯母さまに、ぎ、義理で出て來たんですのよ。』

『むう。』

彦一は太い溜息を吐いてうめいた。芙美子は悲しさうに腫をしばたいた。

『私、私は、母に責められたり、あなたのところか、勝山さんのところに、手紙出さうと思つたり、ど、どんなにか苦しみましたわ。そ、そしてあなたは來て下さらないし……』

『許して下さい。』

彦一はしたより落ちる涙をぬぐつて、芙美子の前にうなだれた。自分がわるいんだ、みんな自分がわるいんだ。彼は彼女の前にある自分が、力の足りない、小さな人間であることを思つて、遣瀬なく胸を抱きしめると、きつと頭を上げた。

『僕がわるかつたのです。』

彦一ははつきりと咬いた。それは彼女にきかせるよりか、自分を責めるためであるやうに思はれた。

してそれを買ふために苦勞して、親父の證文まで盗み出したんです。』

『え。』

芙美子は、おびえて身をすくめた。

『まあ、そんなことまで……』

『え、さうです。そんなことまでしました。そしてあの晩、あの正月のあなたに逢つた晩、私はそれで金をこしらへたのです。けれど、けれど駄目でした。(彼は悲しい絶望に身を悶えた。)あ、あ、あのルビーのやうな品物は、勝山がいくら探しても、どうしても見あたらなかつたのです。』

芙美子は悲しさうに彼を見まもつたが、忙しくたづねた。

『でも、なくなしたつて、どこで、どうしてなくなしたんですの。』

『わかっています。』

彦一は、さつと赧くなり、また青くなつた。

『家へ歸つて、私はそれを見たんです。あ、あなたの腕につけたものが、なつかしかつたからです。そこでなくなすより外に、なくなしたとは考へられません。』

『まあ。』

芙美子も、ほつと頬を赧くしたが、低くうなだれて咬いた。

『大谷さん、家では母は、あなたが私をだまして取つたと思つてゐますのよ。で、ですから、それがなくては、どうしたつて、どうしたつて、どうにもなりませんの。あゝ、私は、私は、ほんごに、そんなことは思つてゐないんですけれども、ねえ。』

『ありがたう。』

悲しい芙美子の聲に、彦一は熱く燃えるやうに叫んだ。そしてその手をのばすと、芙美子の白い手をかたく握つた。

『すみません。僕がわるいんです。』

『いゝえ、いゝえ。』

芙美子の聲は消え入りさうであつたが、その手を離さうとはしなかつた。そして二人は身を慄はせて、その熱い感激に酔つてゐた。互の血のを、いきが、互の手からその胸にひびき合ふやうに思はれた。

芙美子がさゝやいた。

『大谷さん、そのルビーをもつとよく探して下さい。そして私のところへ来て下さい。それがありませんれば、母は私達を許してくれますわ。母だつて、こんどの縁談には乗氣してゐませんの。あゝ、私だつて、やつぱり、やつぱり、さうなんですの。』

『探します、きつと發見します。』

彦一は熱に浮かされたやうに叫んだ。その時給仕の少女がよつて來たので二人はしづかに手を離した。二人は黙つて、ちらりと見あつたけれど、またうなだれてしまつた。互に頬を熱くして、燃えるやうに胸を熱くしてゐるのが彦一にはわかつてゐた。

『大谷さん。』

給仕の少女が、卓の上のものを運び去つたのを見送つて、芙美子が呼んだ。

『え。』

『今日は歸つて下さらない。私、あなたにすまないけど、あなたがらつしやると辛いわ。ねえ、すぐお手紙上げますわ。私、うれしいけど、青木の伯母さんがこはくつて……』

『えゝ、歸ります。』

彦一は立ち上らうとしてはつとした。それはふところ、金のないことを氣がついたからだつた。彼は恥ぢて、赧くなつてしまつたが、すぐ歩いて歸らうと決心した。そして二人は立ち上つてそこを出て行つた。

入口で高見が向うから來て、二人を見つけて聲を上げた。

『どうしたんです。』

「お話してましたの。」

芙美子は、すりと高見をすりぬけた。高見は不快を感じたやうに、そのあとにつゞいたが、彦一にたづねた。

「なにを話してゐたんです。」

「文學のことです。僕はもう観る氣がしないんで先に歸りますから、青木の奥さんによろしく言つて下さい。」

「あ。」

高見は茫然と立ち止まつた。

彦一は急いで芙美子のあとを追ふと、さよやいた。

「さよなら。」

「え。」

芙美子は、ちらつとふり返るとドアを押して中に這入つた。彦一がそれをのぞくと、彼女は楚々として走るやうに座席のところまで行つたが、彦一のゐた席に坐つてしまつた。そしてしばらくしてよろめくやうな足どりで這入つて行つた高見が、自分の座席に落着かない様子で着くのが見えた。

彦一は痛快なことがそこに起つた氣がして、階段を下りて下駄に穿きかへると、走るやうにそこ

を出て行つた。外は灯がともつてゐたがまだ夜にはなつてゐなかつた。さうして彼の心は凱歌を上げてゐるやうに明るかつた。彼は宙に浮くやうな足を、東京驛の方へ急がせると、左に折れて濠傍はりまたに出た。

夕暮の、水にうつゝてゐる残照が、彼の心に美しく輝いた。春寒の風が彼に吹きつけてゐるが、めざめたやうに軽い心持はそれも感じなかつた。……ふと彼はうなだれた。それは彼が芙美子に答へた言葉を思ひ出したからだつた。「きつと發見みけます。」それが有頂天な彼を、づしんとうちつけた。無かつたらどうするんだ。彼は自分にとづねると絶望したやうに煙の空へ眼を上げたが、すぐにまたほゝえんだ。彼女から手紙が来る。さうだ、暗いことは考へまい。自分はどこまでもルビーの珠を見つけて、彼女を得なければならぬ。彼は自分を鞭うやつうに叫んだ。

「發見みけろ。」

彼は自分の中に、なにかの力が湧いて来るのを感じて、急ぎ足に都會の夕靄の中をすゝんで行つた。それは青春が持つてゐる、伸びて行く明るい心であつた。

かくして彼の生きる道は、冬をとほして早春に芽生えて來た。……しかもそれがどんなに美しくあらうと、戀は火だ、燃える火だ、人生に於ける青春の焰だ。

もし消える時ありもせば――。

人生にはたゞ一つの街道しかない。――生命の行くのは生から死へのこの一路である。さうしてそこに戀の火は魂を焼く――焔は消えても、魂の痛手は遂に永久に残らねば止むまい。あらゆる悲劇は、いつもそこからうまれて來たのであつた。

第三篇・春の恐れ

受難の人々

本郷の高臺に灯が、いづばいに黠くと、下町小石川の春日町通りは、うす寒い夜が来るのであつた。本郷の方が明るければ明るいだけ、谷底のやうな春日町は砲兵工廠の煉瓦塀の暗さに壓されて陰氣に感ぜられた。そしてその裏通り富坂の高臺の下、汚い溝川をはさんだ家々は、その谷底の下に喘いでゐる獸のやうにさへ思はれた。

人生の下積みになつてゐる重い下層！ それらは喘いでゐるばかりではない。……正しく言へば伸びようとして悶えてゐる、求めようとして苦しんでゐる、生きようとして戦つてゐる。——それはたしかに、谷底に呻いてゐる家々のやうに、重くおし黙つてゐるけれども、やがては正しい灯の光を浴びて、闇黒から輝き出さずにはゐないのだ。

彦一はそれを感じながら、その古びた通りぬけの小路を曲つて二軒目の二階家を見上げた。それは下が二間、上はたつた一間つきりの小さな家で、四方から押しつけられて伸び上つたやうに細々と倒れさうに見えてゐた。

彼が建てつけのわるい格子をあけると、眼のわるい老婆がうす暗い奥で顔を上げた。

『どなた。』

『私です、今歸りましたよ。』

彼は上り段から直ぐについてゐる暗い階段をぎしぎしとのほつて、破れた襖をがらりとあけた。

『あ。』

彼はとび上るやうにおどろいて、立ちはだかつたまゝ見下した。そこには見おほえのある少女の小杉百合子が、彼の乏しいお櫃の上につつぷしてふるへてゐるが、それはいまゝでがつかつと冷たい飯をかき込んでゐたことがすぐわかつた。そして彼女は、そのこゝろに夢中で上つて來た彼の足音にすら氣がつかなくて、襖をあける音にはつとつぷしてしまつたらしかつた。彼女はまた箸と茶碗を持つたまゝであつた。

『どうしたの、お前。』

彼は、やつと氣を落ち着けると、中に一足這入つて、襖をぱたりとしめた。

『おい、どうしたんだ。』

よれよれに汚れた袴を着て、寒さに慄へてゐた少女は、漸く恐ろしさうに顔を上げたが、その様子は彼に吐責されるとでも思つてゐるらしかつた。その顔は垢とも見えぬ黒さに光つて、乞食の子のやうに思はれた。

『え、いつ来たの。』

どざりと坐つた彼に少女は答へた。

『いま。』

『喰べておしまひ、僕はいゝのだから。』

『えゝ。』

少女は安心したやうに彼を見上げたが、ぐるりと横を向くと、餌にはなれてゐた魚のやうに急いで喰べはじめた。さうしてまたお櫃をあけると、残つてゐたのを山盛にして、それも喰べてしまつた。彼女は彦一の喰べ残した佃煮を見つけ出してゐた。彼はその様子を黙つて見つめてゐるが、明るい心持がずんずんとすぐに沈んで行つた。

少女はそれらを持ち出して元のやうに小さい縁におくとほつとして彼の前に坐つた。彼女は一層瘦せて、その大きな眼が青く輝いてゐるやうに思はれた。彼女は急に彼をその瞳で見入つた。

『私、三日も喰べなかつたの。そしてお婆さん病氣なの。もう死にさうなのよ。』

彦一は、おびえたやうに眼を見はつた。

『どうしたんだつて。』

『もう十日許りねてるの。そして自分でも死ぬつて言つてるわ。私それでどうしようかと思つたの。それから考へてこゝに來たの。あなたはゐなかつたけど、すぐ歸るつて、下のおばあさん言つたわ。それで待つてたけど、ゐるかたわ、私、お米もないのに、あなたの御飯喰べちやつて。』

『え。』

『私、あなたのお米を入れとく箱見たんてすもの。』

『うん、そしてまたよくこゝがわかつたね。』

『わかつてたわ。私、この間あなたを見たの。そしてあとをついて來たらこゝに這入つたし、その次に來たら、あなたが御飯を焚いてるのが見えたわ。けれど私、あなたに見つかり、また心配させてゐるから逃げてつたの。あなたは私達ほどぢやないけど、やつぱり貧乏なのね。私、知つてゐるわ。』

『あゝ、さうだよ。』

彼はこの少女が、彼を恐れてゐないことがわかつたので、うれしい氣がした。急に少女が叫んだ。

『あゝ、お婆さんが死んちまうわ、死んちまうわ。』

少女は泣き出した。それがいかにも不意であつたけど、おどおどと心配してゐるのが、彼にはつきりわかつた。

『行かう。』

『行つてくれるの。』

『あゝ、一軒寄つてね。お醫者さんを連れて行くんだ。』

『あ。』

少女が立ちよんだ。

『また、病院へ行くの。いやだわ、あそこの奥さんこはいわ。私、あの奥さん綺麗だけどいやだわ。』

『いゝえ、違ふよ。』

彼は忙しく言つた。

『友達だよ、すぐ近所の。ね、早く行かう。家はどこなんだね。』

彼等は階段をかけ下りた。さうしてすぐに外にとび出した。少女は彼を追ひながら息をはづませた。

『巢鴨よ、橋の向うだわ。』

彼はどうしてそんな方に、その老婆が移つて行つたのか、不思議に思はれた。彼は急いで歩きながら少女に向つてたづねた。

『どうしてそこへ行つたの。』

『お婆さんの死んだおぢいさん、そのおぢいさんの生れたところだからよ。おぢいさんの生れた家はないけど、遠い親類があつたの。そこの裏に越してつたの。けれど、その親類でも伯父さんがゐなくて、伯母さんはすぐに田舎に行つてしまつたわ。だから私達、すぐに喰べられなくなつちやつたの。それでお婆さんは病氣になつたのよ。なんにも喰べないからだわ。』

彼のめざしてゐるのは指ヶ谷町の勝山の家であつた。彼はそこに行つて、いくらかの金を借り、勝山にも、一しよに行つて貰はうと思つてゐた。

彼の眼の前には、飢ゑて死なうとしてゐる老婆の、瘦せほそつた手足が幻のやうに動いてゐた。それが都會の裏にかくれたみじめな存在であると思ふと、彼は臉が熱く濡れて來るのを感じた。彼のあとによりそつて、少女が腫を見はつてついて來るのも、彼には悲しい人生をまのあたりに見る氣がした。彼等は裏町の暗くたゞれた夜を、哀れな一つの生命のために急いでゐた。

東京の郊外と言つても、巢鴨町は鳥の巢のやうな古くさい文明の呼吸を感じさせた。雑然とした家並、濛々ともつてゐる人の群は、あわたましい生活に追はれて、家々から都會の塵にまみれるために出て行つた。さうして夜になると、また急がしくふしどを求めて歸るが、それも休息のためよりか喘ぐがためのやうであつた。そこに古く開けた土地としての一つがあるのであつた。

その裏町の細い路地の奥、どこか近くに煙を匂はせる小さな工場があつて、蒸せつほくそれが漂つて来るほとりに、低い堤の蔭になつた長屋が建てられてゐた。

彦一はそこにじめじめとした空氣と、凍るやうな冷たい人生を感じながら、少女の百合子を先に立てて這入つて行つた。

後から来る勝山が彼の肩をたゞいた。

『おい、ひどい夫婦喧嘩だね。』

『うん。』

彼はうなづいたけど笑へなかつた。雑然とした物音、その中にそのわめく聲がひゞいてゐるが、彼にまつて、それは深く考へねばならない問題を示してゐた。そしてそれを取りとめて考へないまでも、それは悲慘な、生活の實相を示してゐる叫びなのであつた。

『さうよ、あそこではいつでもよ。』

百合子がふり向いて、ませた口振でその家を見つめた。

『叔父さんがお酒を呑むんですつて。そして工場から出されちやつたのも、ストライキをしたからだつて言つてたわ。』

『早く行かう。』

彦一は彼女を促した。

そこは長屋の一番奥で、晝でもうす暗さうな大きな邸の裏手の樹の蔭になつてゐた。百合子はそこまで来ると立止つた。

『こゝよ、私んとこわ。』

雑然とした音の中をとほつて来て、そこだけがしづかな水のやうにし、いんとしてゐるのを彦一は感じた。家の中から暗い電燈の光が破れた障子をすかして洩れてゐた。百合子はすぐ中に這入つて行つた。

『寝てるのかい病人は？』

勝山がたづねたが、その聲の終らない中に、百合子がわつと聲を上げて泣き出す聲が聞えた。

『おばあさん、おばあさん。』

彼等はすぐかけ込むと、あつとおびえてしまつた。

老婆は死んでゐた。瘦せて紙のやうに薄くなつてゐるその冷たい身體に、百合子はひしとすがつて叫んでゐた。さうしてその度に老婆は悲しさうに慄へた。しかしその顔は安らかにほゝゑんで、小さく皺んだまゝ眠つてゐるやうに見えるた。家の中はがらんとして、かけてゐる蒲團などは古びて垢にまみれてゐるが、きちんと胸の上に両手を組み合せてゐるのが、貧しい老婆のあきらめと覺悟を示してゐるやうに思はれた。枕頭の剥けた盆の上には、黒く固まつた菓子ほづんと一つ載つてゐるばかりであつた。

彦一は悲しいといふよりか、恐しい氣がして、それをのぞき込んだ。生きてゐる者に接しなかつた彼には、それが破れた古い人形のやうにも思はれた。

勝山はすゝみ寄つてそれを調べた。

『もう三四時間経つてゐるね。自然老衰の結果らしいが、ほんこは餓死の一種だらう。可哀さうなことをしたよ。』

百合子が泣きながらたつねた。

『病氣はなんだつたの。どうしてこんなに早く死んでしまつたの。』

『おばあさんは、ひどくわるかつたんだけど、お前にはわからなかつたのだよ。』

『もう、どうしたつて駄目なのね。』

『あゝさうだよ。駄目なのだよ。』

『私、口惜しいわ。』

百合子はその腫を輝かした。

『私、おばあさんにきくのを忘れてゐたわ。憎らしい父さんの所をよ。おばあさんも彼あのひとが殺したとおんなじだわ。私、所を知つてれば怒つてやりに行けたのに。』

『さうだつたね。』

彦一はこの始末をどうしたものかと考へてゐるたが、氣が附いて百合子を見つめた。それはその父をたづね出さうと思つたからであつた。

『お前の父さんはなんと言ふ人なの。前にお金持だつて言つただけ。』

百合子は蒼ざめた腫を見つけた。

『いや、私、知らないわ、そんなこと。』

『なぜ、言はないんだい。』

『いや、いやだわ。そんな人のことなんだ。おばあさんも言つたわ。私が死んだつて、どんなことがあつたつて、その人の名を言つてはならないつて。そんなことをして、その人に世話になつたりすれば、仇の前に手をつくより恥かしいことだつて言ふの。だから、だから、私ひとりでおほえて』

るればいゝんだわ。』

彦一は勝山と顔を見合せて黙つてゐた。彼は呪はれてゐる百合子をいちらしいほどに哀れな存在として自分の手に引取ることを決心してゐたが、その深い愛憎に對しては、手を下しやうもないことを感じた。

だから彼は苦しげに微笑したばかりだつた。

『いゝよ、いゝよ、さうしておき。』

その翌日の夕方、その老婆は、名もない人として、染井の墓地の片隅に埋められた。勝山がかけ廻つて、知つてゐる葬儀社をたのんでくれたからだつた。棺は、見も知らない隣りの老人と若者がかたげてくれ、白い柱だけが、その印にそこに建てられた。

彦一はそこに、少女を愛するがためばかりに老年をおくつたその人の、悲惨な死に方を考へるに共に、祈りに似たやうな誓ひをその人にかけてすにはゐられなかつた。さうして兄のやうに百合子を守らうとする彼の心持を、その墓の前でさゝやいたのであつた。

その歸りに彼等は巢鴨の家によつて、そこを閉めて行つたが、持つて行かれるやうなものも一つも残つてゐなかつた。

『みんな賣つてしまつたの。』

百合子はさう言つて小さな箱をかゝへて來た。彦一がほゝゑんでたづねた。

『それはなんだい。』

『これ、おばあさんの針箱なの。これから私、あなたの着物縫つて上げるわ。』

百合子は青白い頬を赧くした。彼女は湯にも這入つたし、さつぱりこした勝山の妹の着物をつけてゐたので、見違へるやうに清らかになつてゐた。さうして生々としたやうに彼女は機嫌がよかつた。

三

その翌朝、彦一はこればかりはと思つて取つておいた辭書類の中から、一冊を選び出して賣りに行つた。そしてそれが思つたよりか餘計な金になつたことをよろこびながら彼は歸つて來た。彼とはほくから横路に這入つて行かうとするその母を見つけた。彼は聲をかけようとしたが、すぐためらつてしまつた。なにかの包を、振分にして肩に載せ、不自由な足を曳いて、杖をついて行く母の姿が、彼に恥かしさを感じさせた。

その母は五十を越したばかりであるのに、髪は白くなり、よほよほと老いてゐた。

貸間の主人の老婆に彼のゐないことをきくと、その母はがっかりして二階を見上げてゐた。そこに彼が追ひ着いた。

『いま歸つて来たよ。』

『おゝ、まあよかつたねえ。』

彦一は焦ら立たしいやうな恥かしさを感じると、母を急ぎ立てた。

『早くお上りよ。』

『あゝ、重くてね。』

母は彼にほゝゑみかけながら肩の荷を重さうにおろした。それを彼は黙つて見つめてゐた。母はそれを提げるとよろよろと上り口で倒れさうになつた。彼はそれをさゝへると、腹立たしさうに呟いた。

『なにさ、足のわるいくせにそんなものを持つて来て。』

『お米だよ。』

その母は奥を憚つてさゝやくと、またそれを持つて立たうとした。

『僕が持つてくよ。』

彦一は臉が熱くなつて、急に自分が耻かしくなつた。その母の心づくしを思ふと、自分の母に對する一時の感じが、許すことの出来ないことであるのに氣が附いたのだつた。彼は男の手にさへ重たいその包を提げて母のあこについた。

その母は部屋の中に坐ると左足を投げ出した。彼女は普通に坐ることが出来なかつたからだつた。

『重くつてね、弱つたよ。少しでも餘計持つて来ようと思つてね。電車でおされると、よろけさうでね。』

彦一にまた焦ら立たしさが歸つて来た。しかしそれと一しよに胸の底から熱い、かたまりが込み上げて来た。彼は急に笑ひ出して、それをまぎらせた。

『をかしの恰好をしてさ。僕はうしろから見てるんだよ。それでも大變だつたねえ、どのくらゐあるのさ。』

その母は嬉しさうにほゝゑんだ。久しぶりに逢つたわが子のために氣も軽くなつてゐた。そして涙ぐましく彼女は彼を見つめて呟いた。

『二升づゝだからそんなに重くはなかつたよ。もうお前の所がない時分だと思つてね。今朝父さんの出かけるのを待つて、すぐに出て来たんだよ。』

その母は氣が附いて帯の間から小さい巾着を取り出した。

『あゝ、さうさう、ね。』

彼女は丁寧にくつゝである五圓札を指先で引き出すと、それを擴げて彦一の前において笑ひ出した。

『おかしくてね。父さんが着物の代に十圓よこしたんだよ。それで安いのを買ったのさ。でもいゝ着物だつてほめてゐるんだよ。その残りがこれだけあるからね。』

彦一は唇をゆがめて泣き笑ひをした。みじめな滑稽！^{ユウモリア} 彼は胸をふさがれるやうなその母の心を感じると、自分の無力なことがしみじみと耻かしかつた。

『ありがたう！』

彼がその五圓札おをさめるのを母は嬉しげに眺めてゐた。それから彼女は、障子の向うで音がしたのでびつくりして眼を見はつた。

『誰か來てるのかい。』

百合子はそこでなにかしてゐたが、そのままそこにうづくまつてゐたのだつた。彼女は彦一に呼ばれたけど部屋に這入つて來なかつた。

『使ひに行つとくれよ。』

『えゝ。』

彼女はしかたなく顔を出したが、彦一はそれに蕎麥屋へ行つて貰ふやうにたのんだ。それは母のためばかりでなく、彼女がまだ朝飯を済ましてゐないからだつた。彼女はそつと、その母の傍をすりぬけると駆け出して行つてしまつた。

『どこの娘だい。可愛い子だね。』

彦一はその母の言葉に、彼女がひとりになつたことや、自分が一しよに彼女をこゝにおくつもの話をした。

『けれどお前、困りやあしないかい。』

『えゝ、そりやあさうですけど。』

『どこかへ預けたらいいよ。青木さんとかつて家なんか、いゝぢやないか。』

『だめですよ。』

彼は吐き出すやうに答へた。それほどの大きな家でも、彼女を容れるやうな寛大なところはないことを知つてゐたからだつた。この母なら、彼はさう思つて母を見つめたが、その父がそれを許さないことはわかつてゐたので彼は黙つてゐた。その家では女中もゐなくて、不自由な母がなんでもしてゐた。彼は荒れたその母の手を見つめて、その父のこゝを腹立たしく考へてゐたのだつた。彼等はいつ逢つても、父のことには、なるべく觸れないやうにしてゐた。

蕎麥が來たけれど百合子は戻つて來なかつた。その母が歸りを急ぐので、彼等はそれを小さい卓の上に載せてすゝつた。その母は二つ目をすゝめられると答へた。

『いゝよ、お前お喰べよ。』

さうして彼等は家を出て行つた。

その母は送らなくていゝと言つたが、彼はそれをしなければ濟まないやうに思つた。母はおどおどと彼を見つめてゐるが、戸外に出ると思ひ切つてたのむやうに言つた。

『ねえ、いつでもいゝからおいでよ。そして父さんにあやまつておくれよ。』

彦一は黙つて母を見つめたばかりだつた。それがだめなことがわかると、その母は切ない吐息をしてとほとほと行くのだつた。不自由なために肩を上げたり下げたりして行く母と、彼は並んで歩きながら呟いた。

『笑ふんなら笑へ、これは僕の母だ。』

彼は世の中をでも憤つてゐるやうに、その眼を光らせて、母を注視する往來の人達をにらみつけた。さみしく人を避けて行く母のために、彼は熱風のやうなものが、自分の胸を吹き通るのをおほえた。

四

それから十日ばかりの間、彦一は毎日のやうに部屋のあちこちを片附けてゐた。彼は遂に疊を一枚づゝめくつて丹念に塵をあつめて、その中をかき廻した。その狭い六疊と一疊ほどの縁側、半間の戸棚を、彼は獲物を求める獸のやうに嗅ぎ廻つた。雑然として書物や雑誌の屑が積まれてある床の間などは、一つ一つこまかく検査をしてきちんと積みかへされた。しかし獲物は見出されなかつた。

『ない、どうしてもない。』

彼が毎日のやうに呟くのはそれだつた。

『なにを探してゐるの。』

百合子が不思議さうにたづねた。

『赤い珠だよ。この部屋で見えなくなつちやつたんだ。』

『どうしてそれが要るの。』

『人の物だからね。』

『ちやあ、私も探して上げるわ。』

百合子も彼に手傳つた。しかし彦一に取つて、それは邪魔になるばかりだつた。彼女は物を散らかしても、それを片附けることをしなかつた。たゞ彼女のやり方には、かくれたものゝ匂ひでも嗅ぎあてるやうな變なところがあつた。黙つて長い間部屋の一部を見つめてゐるかと思ふと、ひよいと立つて行つて物をどけて見たりするのだつた。

その間に彦一の待つてゐる芙美子からの手紙が來ないで、松野幸江ゆきえからと、父から廻送された學校からの手紙が來た。

幸江のには、彼がその晩黙つて歸つてしまつた恨やら、近い中に興行が終つたら、一度遊びに來ること、それから、その晩おそくなつて青木夫人などゝ銀座を歩いたことが書いてあつた。高見が彼の悪口を言つたので夫人が怒つたこと、それがために高見は歸つてしまつたことなども記してあつた。

『高松さんはおとなしいゝ方です。それでも批評などなまつて、それがしつかりしてゐるなさるにはおどろきましてよ。高見さんもお見合でしたんですつて。けれど高松さんまるで嫌つてゐらつしやるやうで、私ほんみに滑稽に感じましたわ。青木さんの奥さんてば私にいや味をおつしやるの。大谷さん好きですか、なんて。私、ほんとにほんとに大好きですつて申し上げましたわ。』

奥さまもあなたを好きがつてゐらつしやるのよ。御用心あそばせ。あの方には私などでも魅惑めいわくされますわ。』

そんなことが、鉛筆で走り書きされてゐるのを彼は面白いと思つてゐた。さうして幸江に對して、少しづつ惹きつけられるのを感じた。自分に彼女がなかつたら、幸江がほんとに好きになれるかも知れない、こ彼は芙美子のこころを思ひ浮べた。それは寂しいにしろ、輝かしい心持であつた。

學校からののは、彼の成績がいゝので、論文だけを出せば卒業證書を用意してあるといふのであつた。

『なあんだ、そんなことになつてゐるのか。』

彼はそれが彼を可愛がつてくれる或る教授の心づくしであることに氣附いて、うれしかつた。卒業證書さへ握れば勤める口だつてあると思ふと彼は三月中に論文を出してそれを貰はうと決心した。ルビー探しの無駄な十日間が過ぎると、彼はすぐに圖書館通ひをはじめた。未完成の論文は、カーペンターと近代思想の關係を論じたもので、三分の一を書き上げて淨書すればいゝのだつた。彼はそれをやつてゐる間に、自分の思想に對する氣持が、段々と廣くしつかりしてくるのをおほへた。

『自分の行く道は劇の中でも喜劇だ。ほんたうの意味での喜劇を、自分はやり遂げて見せよう。』

彼はそれを考へはじめた。さうして一方には新興社へ送りつけた原稿の返事を心ひそかに待つてゐた。社長の國本氏には一二度逢つたことがあるので、悪いやうにはしてくれまいと思つてゐた。青木夫人からも葉書が來た。それは少し用があるからいつでも暇を見て來てくれといふのであつた。彼は、それには、この頃論文の方が忙しいので、それが終つたら行く旨を丁寧に手紙で答へた。百合子も家に馴れて來た。しかし彼が家に歸つた時、彼女のゐないことがあつて、さうして彼女は金を持つてゐない筈なのに、机の上に菓子の載つてゐるここミがあつた。一三度そんなことがあつた後、彼は彼女にそれをたづねた。

『どうしたの、このお菓子は。』

『買ったのよ。』

『だつて、お前お金を持つてゐるのかい。』

『え。』

『え、ぢやあ、それはどうしたんだね。』

『貰つたのよ。』

『誰に。』

『誰につて、よそでだわ。私、おばあさんこしよにゐた時でも貰つたんですもの。』

『え。』

彼にはそれがはつきりわからなかつた。それで重ねてたづねた。

『ぢやあ知らない家に貰ひに行くのかい。』

『え、さうよ。』

彦一はあきれてしまつた。彼の心は煮えかへるやうであつた。しかし百合子は、それをわるいとは思つてゐないらしかつた。彼女はいま迄生きて來た道をくりかへしたのに過ぎないのだつた。

彦一は漸く口をひらいた。

『恥かしいことだよ。それは人間としてするべきことではないよ。』

百合子はそれに言ひ返した。

『だつて、私達貧乏ぢやあないの。』

『いゝえ、いゝえ。いくら貧乏でも、それは乞食のすることなのだよ。私達は、そんな恥かしいことをしてはならないのだ。止めておくれ。そしてそれが止められなければ……乞食になつておしまひ。ね、だから、どうしても止めるんだよ。』

百合子はそれを承知するここミが出来ないらしかつた。さうして彼もまた泣きたいほどに寂しかつたが、理屈ではこの少女を責められない氣がした。彼も自分ではその乞食のやうに、恵まれたやう

な金で生きてゐる身ではなかつたか。

百合子は、しかし彼女の信じてゐる彼が、泣き出しさうにしてゐるのを見て悲しさうにうなだれた。

『わかつたわ。私、もうしないわ。』

彼女は恥ぢたやうに瞳をふせると、すぐに顔を上げて、彼をその大きな瞳で見つめて頬を赧らめた。

『私、あんたが嫌ひなことなら決してしないつもりなの。ね、だから許してね。私、あんたの言ふとほりにするから。』

彦一はその中から率直な涙ぐましいものを感じた。彼はそれにうなづいて、やさしく彼女を眺めた。彼女はまだ人生に於て、白い紙のやうな清さと、そのうすさのやうな脆さを持つてゐるのであつた。彼はそこに社會のどん底にうごいてゐるいたましい影を見た。それは彼の近代思想に對する考への正しいことを證據立てゝゐた。

五

四月になつてしまつた。花の噂が世間を賑かにしてゐた。彦一は、豫定より後れた卒業論文の淨書に、一週間ほどかゝつたが、それでも漸くそれを書き書き上げて持つて行くことが出来た。彼は他の者よりか三月も四月も後れてそれを差出す自分の立場を苦笑しながら、それを持つて出て行つた。さうして一面には學校からこれで解放されると思ふと、あたゝかい光の中で、足踏みするやうな愉快さを感じた。

彼がほつとした氣持になつて歸つて來ると、それを待つてゐたやうに百合子が心配さうな顔でさゝやいた。

『お米がもう少しつきりよ。』

『いゝよ、いゝよ。』

彼は解きはなれたやうなよろこびをまだ失はなかつたので、多少手許においてある参考書を賣ればいゝと思つた。

『大丈夫だよ。どうにかなるよ。心配することはないさ。』

彼は机の上を見て一通の厚い手紙を取り上げると、あつと眼も煌むやうなおどろきに慄へた。

『いつ來たんだい。』

『さよ。』

『どうして早く言はないのさ。』

『だつて、だつて……』

百合子は身をくねらせると、火の點いたやうに腫を輝かせて彼をぢつと見つめた。

『あんたの所には女の人からばかり手紙が来るんだわ。』

彦一には彼女の言葉が自分を批難してゐるやうに取れたので、顔を赧らめないではゐられなかつたが、その手紙はなほ彼をわくわくと胸をさわがせてゐた。それには所は書いてなかつたが、芙美子とばかり小さく記されてあるのが彼の目を焼くやうに刺し通した。彼は百合子に恥ぢるやうに氣を落ち着かせてゆつくりとその封を切ると、洋罫紙にこまかくペンで走り書きされたのを引き出した。彼の氣のせるもあつたか知れないけど、それから彼女の持つてゐる肌の匂ひが彼に感ぜられて來た。彼の眼はすぐにその上を走つた。いつか百合子のゐることも忘れて、彼は震へる手に、その頁をひるがへしながら、讀み耽つてゐた。

「先日は失禮いたしましたわ。あの時はあんな變なこゝであなたに逢ふことが出來てうれしうございました。お話を伺つて、いろいろ考へることが出來たのも、あんな變なことのおかげかと思ふと天に感謝したうございますの。でも、でも、今となつてはそれもみんな駄目になりましたわ。お笑ひ下さいませ。芙美子は泣きたいやうな氣持でこのペンを取つてゐますの。芙美子は

やはり女でございます。心の弱い、ほんとに駄目な女でございますわ。みちびかれて行く運命に勝てないで負けてしまつた寂しいものでも……。お許し下さいませ。あれほどあの時あなたと約束をしながら、私は運命にまきこまれてしまつたのでございますの。

あれから歸つてから二三日、私はほんやりしてをりましたの。いゝえ、いまでも、ずつとほんやりして、うすい濛の中に生きてるやうでございますわ。さうしてどうしてこんなこゝになつたか、自分でもまるではつきりしないで、やきもきと狂つたやうに泣いたり笑つたりしてゐますの。大谷さま、私はあなたを愛してをりますわ。だのにどうしてこんなことになつたのか、自分でもわかりませんの。なぜ、さうきかれたら、私はなんと答へませう。私の心が弱かつたのですわ。私はあれからこつち、自分の心が自分でないやうな、わからない氣がしてゐますの。

あれから三日目のことでした。私は母に呼ばれました。知りませんでしたら、いつの間にか、青木の伯母さんが來ていらつしやいました。さうして私は、母から、私の縁談が定つたことを、宣告されました。

——高見さんはすつかりお氣に入つてゐらつしやるんですよ。あんな堅い方をお持ちになれば、一生御心配入りませんわ。お國の方もお金持ですし、ほんまにあなたも幸福になれてよ、など伯母さまはおつしやつてゐて……した。

私は夢のやうな気がしてゐましたの。たゞ見合といふので行つたゞけですし、きつと母からでも私に、縁を定めるに就いては相談のあることゝばかり思つてゐましたわ。だのに突然さう言はれて私は、びつくりして口もきけませんでしたの。そればかりかわくわく、慄へちやつて、なにがなんだかわからなくなりました。そしてそんなことを勝手に定めたつて、結婚などするものかと思つてゐましたの。そしてそれをあゝで母に言へば通るつもりでゐましたわ。それで青木の伯母さんが歸ると私はそんなことはいやだと申しましたの。

母はおどろいてゐました。さうして怒りましたの。しまひに泣き出してしまつて、あなたのことなど言ひ出してそれはひどいことを言ひましたの。けれど私は黙つてゐました。そして母がなんと言つてもうんと言ひませんでしたの。

母も我を折つて、夜になると青木さんに行きましたけどあわてゝ戻つて來て私を呼びました。その時にはどこかへ行つてゐた父も戻つてゐましたわ。

——母は青木の伯母さんが怒つて泣き出したと言ふのですの。それは歸るとすぐに返事をしてしまつたので、もう取り返しがつかないと言ふんですの。そしてこの縁談が破れたら、青木の伯母さんも大變な恥をかくと言ふことでした。

私は恐しくて、震へてゐましたわ。父は黙つてゐましたけど、困つてゐました。家のことをかま

はない父は、母任せにしておいたので、今度のことには自分は知らないと言ひましたけど、それでも私にたのむのでした。——辛いだらうけど行つてくれ、父さんや母さんの立場も無くなつてしまふ。そしてお前もわるものになる……父はそんなことを言ひました。そして父と母とで言ひ争ひさへはじめましたのよ。それはやつぱりあなたのことでした。そして私は泣くことも出來ないで、母が狂人のやうに父をのゝしるのをきいてゐましたの。父は私がうんと言はないので斷らうと言ひ出したのでしたけど、それが争ひの元になつたのよ。

私はそれを見て、もうなんでもいゝと思ひました。そして父に言ひましたの。父さんが考へていゝやうにして下さい。私はほんまにばかでしたわ。それが今のやうな羽目にならうとはちつとも考へませんでしたの。父がきつとよくしてくれる、私はさう思つてゐましたのよ。

六

あゝ、私はなんだかわからなくなりました。でもでも書きますわ。どうぞ、怒らないで讀んで下さいませ。いゝえ、いゝえ、あなたはお怒りになるでせう。私はあなたにさげすまれて、たゞかれてもいゝの。でも、私を哀れと思つて下さいませ。私は泣いてゐますのよ。四日ばかり前でし

たわ。私は大抵そのことはおしまひになつたつもりでしたけど、随分心配してゐましたの。父も母も黙つてゐましたし、私はなにもたづねる氣にもなれませんでしたわ。そして母に外に出ることを止められてゐましたから、とちもつて本ばかり讀んでゐました。退屈すると庭を歩いて、去年の秋、あなたに樹の蔭でゲーテについてはじめて伺つたことなど想ひ出してゐましたの。ところがその日、急に青木の伯母さまがいらつしやつて、わざわざ私の部屋までおいでになりましたわ。そして私に同情して下さつて、ほんとにいろいろときいて下さつたの。

私はうれしくてみんな、みんな申上げましたわ。あなたのこと、腕輪のこと、邦樂座で約束した、とも。伯母さまはよろこんでそれをきいて下さつたんですわ。そして私のために泣いて下さつたけど、助けて下さい、とおつしやるの。よくお話をきくと、青木病院は高見さんのお父さんがお金を出して出来たので、いまでも澤山の借が残つてゐるので、こんどの私のことから、大變なことになるさうなんですつて。伯母さまはそれからおつしやつてよ。つまり剛情をはると腕輪のことで母さんがあなたを怒つてゐるから、それを訴へるかも知れないんですつて。さうすると私が、あなたを愛してゐるながら、あなたを陥れるやうになるとおつしやるの。ほんとに母さんはずつと前にそんなことも言ひましたのよ。あなたがお金持の息子なのに貧乏のふりをしてゐるつて。だから私はもうどうしようかと思ひましたわ。そして到頭、伯母さまに結婚のこゝを承

諾してしまつたんですの。

もういくら考へても、取り返しはつきません。父も母もよろこんでくれましたけど、私はうれしくはありません。けれど、これはどうともならないことですわ。私は、あの人のところに嫁入ることに決心してしまひましたの。けれど、けれど、私の決心はそれだとして、あなたを愛することには變りありません。さうしていまにきつと、その證據をお見せいたします。でもいまではどうなりませう。あなたは立派になる方です。どうぞ、ほんとに立派な方になつて下さいませ。私は悲しくて、夜もねられないほどですけれど、少しでもあなたの役に立つなら、それを幸福にして身に染まない結婚をいたしますわ。さうしていつかまた、あなたに逢つて、ほんとに私のことを申上げたいと思ひますの。

もう一度逢ひたいけれどいまはもう駄目ですわ。お返事いたゞいたとて、私の眼には這入らないにきまつてゐますの。これでお別れですわ。そしてもう芙美子は死んだつもりでゐますの。さうなら、神さまにあなたの幸福をお祈りいたします。

愛する彦一さま……………悲しき芙美子より」

『どうしたのだ、どうしたのだ。』

涙を流すばかりに興奮しながらそれを讀みつゞけた彦一は、捉へようとしても捉へられない影を

追ひかけてゐるやうな焦躁を感じながら、それを讀み終つた。彼は涙に濡れてはゐるが泣いてはゐなかつた。蒼白い空虚な眼から、それはひとりでに溢れてゐたのであつた。

百合子がすりよつた。

『どうしたの。』

『あゝ、お前そこにいるたのか。』

彼は唇を慄はせて涸れたやうな聲を出すと、すぐ顔をそむけた。わなわなと慄へる手と、齒が、カカクと鳴るのを、彼は止めることが出来なかつた。

『ねえ。』

彼は手紙をのぞき込んだ百合子を吐つた。

『いゝんだ、なんでもないんだ。』

百合子はおびえてすさつた。彼は氣がついて彼女の方に向き直ると、その痩せた手を取り上げた。

彼女はこの家に住むやうになつてから快活になつたが、顔色は少しもよくならなくて蒼ざめてゐた。そして痩せた身體も、ほんの少しよくなつたくらいにしか見えなかつた。

彦一は、やさしく彼女を見つめた。

『百合子、僕はいま大變な手紙をうけ取つたんだよ。ねえ、僕はこれから出て行かねばならない。』

さうして今夜はどうするか。』

彼は悲しく微笑した。恐らく星の下をふらふらとどこへ行くのか、彼は自分でもわからなくなつてゐた。

『ねえ、夜おそくなるかも知れないよ。』

『いゝわ。』

百合子も泣きさうになつて答へた。彦一はすぐに支度をすると思つて出て行つた。彼は自分でもどこへ行くのかわからなかつた。たゞ逃げて行くものを追ふやうな心持がした。そして通りに出てから美子の手紙を忘れたのに氣が附いたが戻らなかつた。まだ午後の太陽が花曇の中にうつすらと高く輝いて、あたゝかい光を、煙つてゐるやうな都會の道にあびせてゐた。

七

彦一はふらふらとたゞ歩いて行つた。彼はすがりついて泣き出したやうな愛慾の飢を感じた。彼の眼に青木夫人の魅惑するやうな笑ひの幻が浮んだ。彼は悲しさうに頭をふると、それを打ち棄てるやうに手をふつた。

彼は美美子の家をたづねて見ようかと思つた。

『馬鹿、自分を棄てた者をどうするのだ。』

そのくせ彼はそこに彼女がゐるなら、その膝を抱いて哀願したいやうな悲しみを感じた。そしていつか彼の頬に涙が流れてゐた。彼はそれを拭つて、道行く人々をふしぎさうに見つめた。それはこれからどこかに行かうとする花見の一團であるらしく、その中の一人などは、酔つて四合壘をふり廻しながら、通りがりの女に戯れた言葉を浴せてゐた。

『あゝ。』

彼は嘆息すると、破れるほどに胸をいためてゐるのが自分ではないやうな気がした。それからまたとほとほと歩いた。

彼は自分が水道橋のミころまで来てゐるのに気が附くと、橋の欄干によつて、あてどなく濁つた深い川の底をのぞいた。溜れたやうな水の上を、舟が一つ流れて、その上に夫婦者が棹をさしてゐるのが見えた。こんなところをでも舟が往來すると思ふと、彼は變な影繪を見てゐるやうな気がした。

彼はそこをはなれると、左に折れて、とほとほと歩いて行つた。どこに行くんだらう、僕は、彼は自分にたづねた。

『いゝんだ、歩いてゐればいゝんだ。』

彼はあてどなしに小路にまぎれ込んで、小い坂をのほつたり、家の前で子供が遊んでゐるのを眺めたり、店先にゐるかみさんをのぞいたりして行つた。

『あゝ、駿河臺に出たな。』

彼は自分に言ひきかせるやうに呟いた。それから、そこを下つて行くき、小川町の通りへ左へ折れて行くのだつた。

『はゝ。』

彼は破れた心臓が鳴るやうに笑つた。

『自分は気が違つたんじゃないかな。』

大丈夫だ、と彼は自分でたづねて自分の心の中で答へた。それからいつか彼は青年會館の前に立つてゐた。

「農民問題講演會」、彼はその立札を見ると、つかつか中に這入つて行つた。さうして手の描いてあるのが示すまゝに右手から會場の方へ急いだ。

入口で彼は捉へられた。

『あ、なんですか。』

それは黒い服を着た警官の群であつた。卓にひかへてゐる青年が、彼を助けようとして來たけど、おそかつた。

『もう解散ぢや、這入つちいかん。』

『でも……僕は。』

『わからんか。』

『えい、連れてけ。』

彼はなにがなにやらわからなかつた。彼は辯士の中に知つてゐる者がゐたので這入らうとしたに過ぎなかつた。が、彼が辯解しようとしてゐる間に、兩手はたくまし遅い二人の警官におさへられてしまつた。

『僕は……』

『行け、辯解があるなら署に行つてから言へ。』

彼は車でもあるやうにおされて、兩手をのばしたまゝ急がされた。そして見も知らない横通りに連れて行かれて、その警察に來ると、すぐ奥に引き込まれた。彼はそれから四人ばかりひそひそとさゝやいてゐるうす暗い部屋の中に、

『這入つてろ。』

こつき入れられてしまつた。そこは汚い板の間で、隅には色もわからない古毛布が十枚ほど積まれてあつた。そして晝の光の外から這入つて來た彼には、誰がゐるのか少しも解らなかつた。

『やられたね。』

その中の一人が言つた。すると外の一人か、立ち上つて彼の手を取つた。

『大谷君ぢやないか。どうしたんだ。』

彼はうす暗さになれた眼でその人を見た。それは彼のたづねた立石さいふ、彼より二年前に大學を出た先輩に相違なかつた。彼はおどろきに打たれて、茫然とそこに立つてゐた。

『なにか亂暴でもしたのかい。』

立石が、またたづねた。

『いゝえ。』

『そつと話したまへ。きこえるこ文句言ふからね。』

外の一人が言つた。彼がそこに坐つて譯を話すると、立石がほゝゑんだ。外の一人がさゝやいた。『それはとんだ傍杖そばづえだつたね。おどろいたらう。すぐ願下けにすれば出してくれるよ。僕等もみんな檢束されたんだ。』

『藤川さんだ。そして片本さんに北井さん。大谷つて今年の文科の卒業です。』

立石が彼に紹介した。藤川は帝大出の小説家として前の年あたりから劇作の方にも手を染めた有名な作家だつた。片本も北井も新人會の方の先輩として彼はその名を知つてゐた。北井は小説なども書くし、長く新聞の文藝欄の編輯をしてゐた経験を持つてゐた。彼はさうした有名な先輩に逢つたので耻かしくなつてゐたが、一方では、おどろいた心持がしづまるのを感じた。それはその人達と一しよになつたのをよろこぶやうな、その日の胸の痛手を忘れた心持でもあつた。彼はその人達のひそひそとさゝやいてゐることが、かうした檢束の經驗談であるのを知つて、警察といふものが、さう恥づべきものではないことを知つたやうに思つた。

『君は戯曲を書いたねえ。』

立石が急に彼にさゝやいた。

『え。』

彼は驚いて立石を見つた。それは誰も知つてゐる筈のないことだつたからであつた。

『どうしてわかつたね。』

『「新興」の方の記者が、そんな話をしてゐたよ、今日來てね。藤川さんがよくきいてゐたからさうといふ。』

『あ。』

その立石の無造作の言葉の中から、彼はしびれるやうな心持を胸の底につき込まれた。それがもし「新興」にでも出るやうになれば、彼は一躍してその人達の仲間の一人になれるのだつた。彼はぶるぶると身體が慄へ出すのをおさへて藤川を見つめてゐた。彼は自分の胸が嵐のやうに早くときめくのを、はつきりと意識して、呼吸が弾むのおしつけてゐた。

八

そこが留置場であることも忘れてしまつた彦一は、自分の運命が、それにかゝつてゐるのを感じながら藤川の言葉を待つてゐた。藤川は氣安く彼を見かへすとさゝやいた。

『君ですが、大谷彦一君で。』

『え。』

『えらいものを書いたさうですね。「新興」の記者の太田君が話してゐましたよ。農民劇で、しかも日本に珍らしい喜劇ださうぢやないですか。四月に間に合はなかつたので、七月の増刊に載せるやうな話でしたよ。』

『え、ほんまなんですか。』

彼の率直なき方がみんなを笑はせた。藤川は、その髪を撫で上げながら、その笑ひには關しないやうにまじめになつてつゞけた。

『ほんとですよ。あそこの社長は、しつかりしてゐますし、新しい人を發見みけようとしてゐますからね。大いにやるといふです。』

『會つておくといいね。』

北井はさう言ひながら、その人並外れに肥つた頸のカラーを、うるささうにゆるめると、細い眼で彦一を眺めて、つけ加へた。

『そのお祝ひとして名譽ある檢束の洗禮を得たのさ。稿料が這入つたら、君の耳にそれを入れた我々を大いにおごるんだね。』

『おごりますとも。』

彦一のその言葉に、またみんな笑つた。見張の警官が、その聲にやつて來た。

『しづかにしてください。みつかる私の落度になりますから。』

警官が立ち去るのを北井が呼び止めた。

『まだ願ひ下げには來んやうかね。』

『演説會は温順しく解散したさうですから、すぐ釋放されるでせう。』

警官はさう言つてそのことを離れると、みんな沈み込んで黙つてしまつた。彼等はその夜の司會者や

講演者であつたが、檢束といふことより解散の方を嫌つてゐた。それは彼等が自分の思想に忠實な氣持から、それが徹底することを望んでゐたからなのだつた。彦一はその講演會が、ある地方の小作爭議の應援のためであることがわかつた。そして解散といふことが止むを得ないこゝにしろ、檢束することと共に、あまり温順しい處置ではない氣がした。

立石は、その夜の司會者だつたので興奮した顔を上げた。

『皆さんに御迷惑かけて申譯ありません。その上、解散にまでなりました……あまりに亂暴なことです。』

『いゝよ、いゝよ。』

藤川がその言葉を制した。

『どうせ、それは覺悟したことなのだ。』

みんな黙つてゐた。そして彦一は胸の中が熱くなるやうな氣がした。彼等が皆相當の名士として世に許されてゐるのも、かうした思想への忠實な人格がなしたといふことがわかるやうな氣もした。新しい建設のために、彼等がよろこんで忍従をつゞけてゐることも、涙ぐましく感ぜられた。

ふと彼に芙美子のことが歸つて來た。

それは明るい窓から青い手の招くやうに寂しいものだつた。彼はうなだれると、心に低く呟いた。
『苦しいなあ、人生は。』

彼の胸の底が小さい鐘の鳴るやうに音を立てはじめた。それは身體を走る血の音のやうにも思はれたが、またなにも知れない引きしめられるやうな、心の絲が新しいものにふれてゐる音にも思はれた。

やがて夕方になつてから、彼等は一人づゝ呼び出されて行つた。彼等が段々に少くなつて、やがて一人になつた時、彦一はそこにそのまゝ彼だけ残されるやうな不安を感じた。しかしすぐに彼も呼び出されて、自ら高等係の主任だと名告る警官の前に立たされた。住所や姓名を記してから、その主任はたづねた。

『君は今日の會に關係があるのかね。』

『いゝえ、散歩の途中だつたんです。そこへ久しく逢はない友人の名が出てゐるので、大學の先輩ですし、一寸逢ふつもりで這入らうとしたんです。』

『その友人つて誰だね。』

『立石さんです。』

『うむ、今日の司會者だね。』

その主任は親切さうにはゝゐるんだ。

『それはどうも氣の毒だつたね。しかし君があそこに來たのがわるいんだからしかたがない。これからこんな會に立合はないやうにしたまへ。今日だけは釋放してあげる。』

『はい。』

彼はおとなしくそこを出た。表に來ると二人程の若い人達が彼を出迎へた。

『大谷君ですか。』

『えゝ。』

『今日は済みませんでした。』

『いゝえ。』

『皆さん、こちらにゐられます。』

彼はその人達に謝まやまれて、却て濟まない氣がしながらカフェーに行つた。そこには多勢そろつてゐるが、彼を見ると立ち上つた。

『それでおしまひだね。』

『さうだ、歸ることにしよう。』

『あゝ。』

『では失禮。』

『よなら。』

彦一はその淡泊な様子をあつげなく思ったが、五六人藤川と北井を中心にして歩いて行く人達の仲間に加はつた。

北井が彼をふり返つた。

『大谷君、おごることを忘れないやうにし給へ。』

『えい。』

彦一は北井が彼を忘れてゐないのをうれしく思った。そして二三町話しつゞけて行つたが、小川町の角で彼等に別れた。それは彼等が揃つて夕飯でも喰べに行くやうな気がしたからだつた。彼はすぐにそこを左に折れて、なんの氣もなく神田橋の方へ出て行つたが、そこを前に芙美子と誓つた日に歸つて来たことを思ふと、また彼女のことを胸をしめつけて来た。彼はせめてすがりついて、自分の寂しさを慰めてくれる人がそこに欲しかつた。さうして彼の心に松野幸江が想ひ出だされたのであつた。彼はそこで立ち止ると、電車を待つて、それに乗つてしまつた。都會の春の夕暮をはてしなく彷徨さまよふより、せめて彼を信じてくれてゐる小百合子のところに歸りたくなつたからだつた。

九

悶々とした日夜が彦一に過ぎて行つた。彼はなにを待つてもなく、時々想ひ出したやうに机をがらりとあけて、その中のものをちつと見つめてゐることがあつた。戸棚をあけて、その前にゐるで悲しさうに考へてゐることもあつた。それから、ふいと外にとび出して二三分せかくと歩き廻つて歸つてくるさ、床の間の前に坐つて腕を組んでゐた。彼の眼が貪慾さうにひらめくのを、百合子は恐しさうに眺めてゐた。

『あれさへあれば彼女は嫁かなくてすむのだ。』

彼はルビーのことを考へてゐるのだつた。芙美子のことを思ふと、彼はあらゆることがどうでもよい氣がした。卒業證書も、金も、作家といふ名譽も、それらが凡て消えてなくなつても、彼女を許されさへすればいゝと思つてゐた。

ある一日は勝山にあづけてある芙美子の腕輪を取つて来て、夜になるまでそれを眺めてゐた。中央の臺の上のほつんと空なのが、心を蝕むやうに痛くした。そこだけ自分の胸の肉と血を取つて埋めたいやうな狂氣じみた氣さへ起るのであつた。

父の方から、卒業證書が届いたから取りに来るやうにとの簡単な葉書が来た。

『そんなもの、いまとなつては要るものか。』

彼はその葉書を破やぶいてしまった。それから彼は、父が自分を許さうとしてゐるのかも知れない、と思つたが、御免だ、こつちがいやだ、と心に呟いた。

百合子にだけはやさしかつたが、それも彼女の方が、うたがひ深く彼をはなれてゐるやうに思はれて来た。彼女は、いつもおびえてゐるやうに彼を見まもつて、彼が黙つて考へ込んでゐると、大きい瞳を光らせて、ねたましさうにしてゐるのだつた。

『また女のことを考へてゐるのね。』

彦一はその様子から、彼女がさう言つてゐるやうな感じをうけ取つた。彼は小さい百合子にさへ批難されるほどに、自分が無力であることをし、みじみと寂しく思ふと、どうしたらいいのか、と自分にたづねた。しかしそれに對する答へは彼の心に湧いて來なかつた。

ある日彼が、いつもの焦燥した散歩から歸つて來て、しづかに二階に上ると、百合子が慌てたやうに膝の上につゝぶしてしまつたのを見た。

『あ。』

彼は彼女をおしつけると、その手からかくした便箋の一重ねを奪つた。それは美美子がよこした

前の手紙を彼女が見てゐたのだつた。

『な、なぜ、こんなものを見るんだ。』

彼女は泣き出してしまつた。

『僕が、しまつておくのを、やたらに見ちやあいけないぢやないか。それにお前は字なんてわかりやあしないのに。』

彼女は急に泣くのを止めると青白い顔を上げた。狂氣したやうな瞳が大きく濡れてゐた。

『讀めるわよ、私だつて。』

『え。』

『おばあさんが教へてくれたんだわ。私、だからみんな讀んでやつた。それをみんな讀んでやつた。それがわるいの、わるいの。』

彦一がなんとも言ひ出さない中に彼女は立ち上つて叫んだ。

『いゝわ、いゝわ。あんたは私を邪魔にしてゐるんだわ。私は出て行くわ。そして乞食するわ。それで喰べられなければ、死んだつていゝわ。私、ちつともあんたなんかこはかあありやあしない。』

挑戦するやうに彼女はをどり上ると、どしんと聲をふみつけた。そしてすぐに出て行かうとした。

『待て。』

彦一はそれを引き止めた。

『お前は、それちやあ出て行くんだね。』

『え、さうよ。』

『お前は、お前は……』

彼の唇が硬ばつてしまつた間に、百合子はわつと泣き出した。

『出て行くわ。乞喰をするわ。そしてそれでも喰べられなかつたら、上田屋に行つちまうわ。』

『止めてくれ。』

彦一は彼女をおさへてゐる手をはなして、あどすざりをした。彼にはその少女が爆弾のやうに恐しかつた。さうして泌み出るやうな彼女の悲しみが彼を捉へてしまつた。

『なんにも言はない。こゝにゐてくれ。』

百合子はすゝり泣きながら彼を見つめてゐたが、ぐるりとふり向いた。それから二人は、ちつとしまま、いつまでも黙つてゐた。やがて急に百合子はべたりと坐つて悲しげに笑ひ出した。

『私、私、どこにも行きやあしないわ。』

彼女は笑ひながら涙をこぼしてゐた。それは變にヒステリカルな様子に見えたが、彦一は少しづつ心の開けて来る氣がした。彼はしばらくして、笑ひ泣きを止めて、うなだれてゐる彼女にさゝや

いた。

『仲なほりしようね。』

『え。』

彼女の瞳がばあつと明るく輝いた。彦一は自分が子供つほくなつたやうに、明るい無邪氣な心持になると、

『イヌマニエル、これから百合子がこの手紙を見ませんやうに。』

とおどけたやうに言ひながら、手紙を封筒に入れて引出にしまつた。

『イヌマニエル、見なくてよ。』

百合子がいたづらさうに言ひ返した。彦一が彼女にその言葉ををしへたのを、百合子は面白がつて使ふのだつた。彼等はそれを神さまにかけてといふやうな意味に、おどけて使つてゐた。彦一は心の底にまだ曇つてゐるものを感じながら、百合子に對しては明るく見せることを忘れまいと思つた。それはこの少女が、哀れに惜れながら、彼の心持を迎へようとしてゐるのがわかつてゐるからであつた。……泣き笑ひするやうな感情！ 痛ましい自分と少女。この暗合のゝるところは、どこまで行つてからか。——彼はそこに遙かな暗黒を心の隅にみつけた。

一切よ！　そこに人々は苦しみつゝ生きて来た。
なんのために？

それが受難を苦しんで、暗黒の光を最後にみつげるためだ。生きつゞけて行くことによつてのみ、人生は果てしない戦ひをかうして伴つてくる……それらの人々の、誰が烈しい戦ひを戦かつてゐないと言へるであらうか。——そこにその姿を、彦一は少女の心にさへみつけたのであつた。

第四篇・晩春の悩み

失はれた童貞

カーベントーは近代の貞操問題に就いて、それが情熱の高いために失はれたとしても、眞實である限りに於て許されると述べた。——眞のよき結婚にまでそれから導かれるとすれば、それも可能であらう。新しい道徳はそれを認めて、少なくとも人生の高い目的として、異性は貞操によつてのみ相牽くものでないことを考へなければならぬ。

愛のない貞操は、愛のある姦淫と、反對の意味で罪惡である。

魂をとほして、凡ての性の問題は愛のあるところで結合されなければならぬ。愛のあるところ、そこにこそ、成ると成らざるとを問はず、性は聖なる幻を描くであらう。それがどうあらうと、その情熱に純眞であつた時、人生をとほして愛戀の鍵は開かれるのである。さうしてそれが性の暗黒時代をそのまゝに輝かせるのではあるまいか。……この命題をこゝにあたへしめよ！

四月は彦一に取つてあわたゞしく過ぎて行つた。彼はその間に凡ての物を賣り拂つてしまつた。入らなくなつた制服類も彼の戸棚から消えてゐた。かぶり古した帽子を屑屋にやつたら八錢で持つ

ていつた。

『大學が八錢でとんでつた。』

彼はそんなことを呟いた。

彼はそれから暇のありさうな勤め口をみつけるつもりで、二三の先輩を訪問したが、時おくれの就職は、うまく捗らなかつた。地方になら高等學校の教員の口があつたが、それは彼の方から斷つた。

月の終りを彼はどうしていゝかわからなかつた。下の老夫婦も貧乏してゐることがわかつてゐたから、部屋代を待たせることなどはどうしても出来ないと思つた。彼はその時新興社のことを想ひ出して急に元氣になつた。もし七月號に出してくれるのなら、稿料を前借さしてくれるだらう、と思ふと、彼はその金を胸の中で計算した。半分貸してくれても七八十圓になりさうな氣がした。彼は思ひ立つとすぐに、その午後芝のその社をさして出て行つた。

彼は大きなその社の建物の前に立つて威壓されるやうな恐れを感じたが、思ひ切つてドアを推すと、胸をさわがせながら受附口に立つた。

『社長さんにお眼にかゝりたいんですが。』

『社長は留守ですよ。』

彼は受附の青年の言葉に、はつこして身をすくめたが、すぐ編輯記者の名を想ひ出した。それは文學者の藤川が彼に語つた時に洩らしたものだつた。

『太田、太田さんは。』

『ゐます。あなたのお名前は。』

『大谷彦一です。』

彼はやがてうす暗い階下の應接室にみちびかれて行つたが、長い間待たされて、なにとも言へない焦ら立たしさを感じはじめた。そこへドアをあけて三十年輩の鬚の濃い男が這入つて來た。

『大谷さんと言はれますか。』

『ええ。』

『なにか御用でせうか。』

『ええ、實は……』

彦一は期待に反した冷たいものをそこに感じたので切り出し憎かつた。藤川が話をしたやうならば親しみ易く會つてくれると思つてゐたのが、裏ぎられたからだつた。

『實は、その、社長さんの方に、劇の原稿をお送りしてあるものですから。』

『はあ。』

その記者は相變らず冷たかつた。

『それで、それがどうなつてゐますか、知りたいと思ひまして。』

『はあ、喜劇でしたね。』

『ええ。』

『拜見しました。そして社長なども感心してゐられました……實は御承知の通り、非常に原稿が多いもので、まだ載せられるか、どうか、わからないものですから、御返事もしなかつたのです。』

『……………』

彦一はあざむかれたやうな氣がして、うすら寒いものが身内をめぐつて來たやうに手を慄はせた。彼は原稿を他へ廻すのなら一旦お返してもいいといふ記者の言葉をきくと、もすこし預かつてゐて貰つて、機會を待つて發表出來たら、してくれるやうに、慌てゝたのんだ。さうして絶望の悲痛な苦しさに、よろめく足をふみしめて、そこを出て行つた。

彼のふところには歸りの電車賃もなかつた。さうして希望！ 少しの希望さへ、そこに踏みにじられてしまつた。四月のあたゝかい光も彼にはまつぐらなやうに思はれた。

櫻田本郷町の四角に出て、彼はその電柱に凭りかゝつた。あてのないところから、彼はなにかのめあてをつかまねばならなかつた。さうしてまたしても想ひ出される美美子のこと、彼の胸に嚙

みついた。それは希望を失つた時、光のやうにとび出て来て、彼の心持をいや更に深いとん底に追ひ込むのだつた。

『あゝ。』

彼は思ひあぐねて顔を上げた。

その時向側の道から電車の線路を横切つて来た洋装の美しい女があつた。それは瞳を上げて彼を見たと走り寄つた。

『大谷さん。』

『あ。』

彦一は松野幸江ゆきえを認めた。そして青白い顔をさつと赧らめた。自分の恥かしい現在を見すかされたやうな心持だつた。

幸江は、その頬を輝かせて、うれしさうだつた。

『どこへいらつしやるの。』

『さあ。』

彼は苦笑して眼をおとした。

『どこへ行きませうかねえ。』

『ほう、自分の行くところがわからないんですの。』

『えゝ。』

『イヌマニエル、有り難いわ。』

彼女も青木家に出這入りして、いつかその言葉を口にしてゐると見えた。彼女は舞臺でするやうに、かかとを中心にしてぐるりと廻つて、魅するやうに赤い唇で笑ひかけた。

『ぢやあ、私と一しよに行かない。』

『どこへ行くんです。』

『どこへ行きませうかねえ。』

彼女は彼のまねをしてまた笑つた。通りがよりの人達が、彼女をちらちらと眺めて過ぎた。彼女はそれに気が付くと、右肩をそびやかして、その斷髪の頸をふさふさミ揺つた。それから彼女はぐるりと向き變へると歩き出した。

『いらつしやい。いゝとこに案内するわ。』

『えゝ。』

彦一はそのあとにつゞいた。さうして肩を並べて、新橋の方へ舗道を踏んで行つた。

『あなた、ひどいわよ。』

彼女はほゝゑみかけた。

『この間お宅において来た名刺見て。』

『いゝえ。』

『まあ、おかしい、どうしたんでしょ。だつて私、この間あなたのところに伺つたのよ。わからなかつたんですの、ほんとに。そしてやつと發見けたと思つたらお留守なの。私かまはずに上げて頂いて、二時間くらゐ待つてゐましたわ。變な女の子と黙つてにらめっこをしてゐたんですの。あの娘は前に青木さんに連れて来た少女ですわね。』

『えゝさうです。』

『少し變な娘ではないんですの。』

彦一は顔を赧らめた。

『えゝ。』

『私になにを訊いても黙つてゐましたわ。それで私もくさくさして、名刺をおいて歸りましたのよ。どうしてそれ、あなたに見せなかつたでせう。』

『さあ。』

彦一は彼女が急に親しけになつたり、さうかと思ふと丁寧な言葉づかひをしたりするので、彼女の心持をどう受け取つていゝのかそれに迷つてゐた。彼は彼女に答へずに、黙つて微笑を返したまゝ歩きつゞけた。

二

彦一は幸江の中に多くの空想的な心持があることを思つて、ひとりで微笑をつゞけた。新しい女！彼女もその洗禮をうけて、煙草屋の娘として、日本式な踊りの仕込をうけた心に、踊り子としての新しい境遇から、處女としての恥ぢらひと共に、生々としたやうな交際上手な、魅惑的な容姿をこしらへ上げた。彼女もやつぱりそれだけの若さにしては早く世の中に出ただけの才能はあるのだ、と彼は考へてゐた。

さうしてそのくせにして幸江の中には、江戸情調の中にあるやうな純な雰圍氣が匂つてゐることを思ふと、彼には、それがなつかしく感ぜられた。

『幾つだらう。』

彼はその美しい横顔^{横顔}を眺めた。彼より二つ三つ下であつたから、二十を少し越えたくらゐりに相違ないのに、その顔は十七八の少女のやうに輝いてゐるのであつた。

『彼女より上の筈だ。』

彼はそれを芙美子と比較して考へた。まだ二十になつたばかりなのに、老成したやうな芙美子と、それより二つくらゐ上でありながら、若々しい幸江との間には、女性としての時代に十年の距りがあることが思はれた。幸江は今年十八の光子と較べても、生々としたところがあるやうに思はれた。

幸江はガードの下をくゞると、急に右に曲つた。

『ごつちよ。』

『どこへ行くんです。』

彼女はすぐに寂しさうな顔をした。

『いやなの。少し遠くへ行くの。私、あなたにきいて貰ひたいことがあるんですもの。』

『……………』

『ねえ。大谷さん。私、しづかなところへ行きたいんですの。』

『いえ。』

『とにかく、僕は金なんて一文もありませんからね。家へ歸る電車賃ほどさへ。』

『まあ、いやだわ。』

彼女は悲しげにほゝゑんだ。

『お金なら私持つてるのよ。そんなこと、そんなこと、私、そんな女性^{せんな}のやうに見えるの。』

『いや、さうぢやあないんですけど。』

『ねえ、行きませうよ。』

彼女の睫の長い瞳が愛慾に燃えて、ふくれ上つたやうに彦一には思はれた。そして彼自らは魔術にでもかゝつたやうに、それに惹きつけられて、逃げられなくなつてゐた。

『さあ。』

彼女にうながされて彼はそのあとにつゞいた。幸江は小急ぎに新橋驛に這入ると、時間表を見つめて二等の切符賣場に立ち寄つた。

『藤澤一枚。』

彦一は、その聲におびやかされて眼を見はつた。

『どうしてそんな遠くへ。』

彼女は切符をうけ取つて、釣銭を待ちながらさゝやいた。
『いけませんの。』

彼女はすぐ歩き出した。そして彼に媚びるやうにより添つた。

『私、ほんとに、遠くへ行つてしまひたいんですの。あなたと一しよに、どこか人の知らないところ……ねえ、一生にたつた一ぺんの私のわがまよ。許して下さいね、ね、ね。』

彦一は黙つてゐた。それは答へられなかつたのだつた。彼は溢れるやうな感情に、自分が波立つて来たことがわかつた。それはふくれ上るやうな青春の、生めいた、やはらかい、ひびきであつた。彼は無風帯にゐて、あつい夢に酔つてゐるやうな心持になつてゐた。

『行きませうね。』

『ええ。』

彼等は並んで行つた。それは確に若い戀人同志に見えてゐた。

汽車の中に這入つてから、幸江は青木の家に行つて夫人に逢つたことを話した。彼女は夫人が彼のことを心配してゐて、近く彼の所に行くやうに言つてゐたことも語つた。それから彼女の話は美子のこゝみにふれて行つた。

『あの方、あんなにいやがつてゐらつしやつたのに、高見さんて方さ結婚なさるのね。高見さんていやな方よ。一度きりしかお眼にかゝらないのに手紙なんておよこしになるの。近々結婚するの、その前に一度ゆつくりお目にかゝりたいなんてよ。そして私の保護者になりたいたいなんて言つてゐらつしやるの。男つてみんなさうよ。』

『さうですかねえ。』

彼が太い息をついたので、幸江はあわてゝ瞳を輝かせると、頬を赧らめた。

『だつて、あなたは別よ。』

彼女は急になにかを想ひ出したやうだつた。

『あゝ、さうだわ。今日廿九日ですわね。』

『ええ。』

『さうすると、あの方今日結婚なさるんですわ。』

『ええ。』

彦一ははつとして打ち挫がれたやうに青ざめてしまつた。それは果しもない暗黒の中にとび込んで行くやうな氣持だつた。

『そ、そんなに早く。』

『ええ。』

彼女はなんにも気づかないで、つこりと笑つた。

『さうよ。青木の奥さんおつしやつてるたわ。高見さんの方で急いでるんですつて。そしてこんどは内々だけで、秋になつたら盛大な披露式をなさるつて言つてましてよ。そして私のことも、その時には呼ぶとおつしやつてるたわ。あの劇がとり持つたのだから呼ばなくつてはならないんですつて、さうすると、あなたも呼ばれるのね。』

彼女は彦一を見つめて瞳を見はつた。

『あらどうかなすつて。』

『……………』

彦一は答へなかつた。窓外に眼をそらしてゐるが、それには熱い涙がにじんでゐた。さうして彼の胸は煮えるやうに焔につままれて、その底に悲しい冷たいものが流れてゐた。芙美子は僕のために犠牲になるのだ、と思ふと彼は現在の自分が淺ましく思はれた。たゞ彼のさう思ふ裏に、どうせ、かうなる運命だつたのだ、といふ暗い氣持があつて、それが幸江の明るい魅惑によりすがつてゐたかつたのが、彼の心持をそこに落ち着かせた。

三

その夜のことであつた。暗い鵜沼の海邊に一組の男女が坐つて、おほろな星の下に、互に泣き濡れてゐた。やがて彼等は立ち上つた。さうしてうなだれ勝ちにそこを立ち去つて行つた。彼等の影は丘の下の宿屋の中に這入つてから明るい灯に照らされた。

それは彦一と幸江であつた。彼等が泣いてゐたのは、互に自分のこゝみを打ち明け合つたからだつた。

彦一は芙美子のことを語つた。それから幸江は自分がよりすがるところがなく、十八の時からかくれた保護者に虐げられて、いま迄を過して來たことの話をした。彼女はそのおかげで劇團のスターとして世に立つことは出來たが、彼女には小さい時から戀の想出がいつまでも、はなれずに伸びて來てゐた。

『許してね、それがあなたなの。私は忘れはしないわ。私が女學校に行つた時分、あなたと毎日のやうに同じ時分に家を出たのよ。そして電車でもよく一しよになつたわね。それを私はわざとしてゐたんだわ。早く支度をしてあなたを待つてゐるの。さうしてあなたが來るとあとをついて行つたり、一足先になつたりして行つたわ。』

あなたはいつもひとりぼっちで寂しさうにしてゐたのね。……私、それで、はじめは、あなたを氣の毒に思つたの。小學校の時分からなのよ。さうして、それからいつか、あなたのことが忘れら

れなくなつたの。それなのにあなたは私を泣かせたことがあつたわ。

あなたが中學に行つて、運動會に來た日のことよ。あなたが番外のか、け、くらで怪我をしたわね。私、すぐに藥を先生に貰つて持つて上げたの。

——要らないよ。藥なんか。

あなたはさう言つて受け取らうとしなかつたわ。私、そんなことまでおほえてゐるの。あなたはきつと忘れちやつたでせうけどねえ。私は、そんな時分から、あなたのことばかり考へてゐるたんですわ。』

彦一も彼女のことはおほえてゐた。しかしそれは高等學校時代の、彼女が早く女學校を止めて、煙草屋の店先に坐つてゐる頃のことだつた。彼は月に一べんの父へ金を貰ひに行く時、いつもその店をのぞいた。それは戀といふほどのものでない淡いものにして、彼の胸には残つてゐた。

彼等は宿に歸つてから、おそい夕食についたのだつた。幸江が彼にすゝめた一杯のビールが彼を酔はせてしまつた。

『寂しいのだ。僕に飲ませてください。』

彼はたまにしか口にしないビールを立てつゞけに飲みほした。

『私もお對手するわ。』

幸江も彼にすゝめられるのを斷らなかつた。二人はそれで酔つたのだつた。彼等は互につゝしんでゐながら、酔ひのまはるにつれて、亂れて行つた。

『寂しいんだ。泣かしてください。』

彦一は泣きながら呑みつゞけた。さうして幸江もそれを見るに泣きつゞけた。

やがてこの寂しい醉人が、同宿もないさびれた春の宿で寝ようとした時、次の部屋には一つの床しかなかつた。さうして海邊からは波の音がきこえて、當惑して見あつた彼等の耳にひびいてゐた。

『どうしよう。』

彦一に幸江が答へた。

『私達は結婚するんだわ。あなたの戀人だつて、結婚しちやつたぢやないの。』

『僕はいやだ。』

べたりと坐つた彦一が、うづらうづらと襖に凭つたまゝ睡りかけるのを幸江がやさしく抱き起した。波の音、風の聲、海邊の春の夜はさうしてしづかに更けて行つた。

翌朝早く起きてしまつた彦一は、宿醉にいたむ頭をかゝへて、そのまゝ濱邊へと出て行つた。新鮮な空氣にふれて彼の濁つた頭がはつきりして來ると、彼は自分のしたことに氣がついて、なにと

も知れず胸が熱くなつて來るのをおほえた。

『僕は童貞を失つたのだ。』

朝の空に向つて嘆息すると、彼の眼から、ひとりでに涙が流れて來た。彼は自分を罵つた。
『ばか、ばか、ばか。』

しかしまた失つたものは永久にかへつて來ないことを思ふと、彼はかへつて芙美子に復讐をしたやうにさへ思つた。彼女は永遠に失はれた。しかしこゝに次の彼女がある、おゝ、幸江！ それは自分にあたへられた名だ、それは自分にはじめてあたへられた戀の悲しい對手だ。彼の眼からまた涙が流れた。しかしそれは朗かな、明るい心持からにじみ出たものだった。

幸江が彼のあとを追つて來て丘の上に立つてゐた。

『大谷さん。』

朝の風にうたれて斷髪をなびかせてゐる彼女は、海から來た人魚のやうに見えた。彼女は少女のやうに明るく走つて來た。さうして近づくると二人は顔を見あつて頬を赧らめてしまった。

『私、私、すみませんわ。』

彼女がうなだれた。彦一は昂然として心の中で叫んだ。「自分は幸福でなければならぬ筈だ」……彼は胸の中の暗い氣持を底の方におし沈めてしまつた。

『私をいつまでも愛してくださいな。』

彦一は黙つてうなづいた。二人の頬に赤い血が上つた。愛慾の熱情を互に感じたからだつた。

『坐りませうか。』

『あゝ。』

『ほんとにあなた私を許して愛してくださいな、ほん、と。』

『あゝ。』

『ちやあ、指切りして頂戴。』

『ほら。』

彦一はその人指指をさし出した。

『あら。』

『なにさ。』

『小指よ。小指でなくてはいけないわ。』

二人の小指が鍵をつくつて合つた。幸江は彼の小指を口に持つて行つて赤い唇をあてた。

『嚙んでよ。よくつて。』

『あゝ。』

『ほら。』

『いたい。』

彦一はその手を引いた。そして二人は笑ひ出してしまつた。楽しいといふよりか、その中に酔ひ痴れて、外のことはみんな忘れてしまひたいといふやうな氣持を彼は感じてゐた。夕方になつてから彼等は疲れたやうな氣持になつて宿に歸つた。さうして湯に這入つたあとで少しのビールを飲んでからそこを出て行つた。夜になつてゐるから、二人はびたりとより添つてゐた。しづかな波の音が丘の向からきこえた。

『もうすぐ停車場よ。』

幸江が立ち止つた。

『あゝ。』

『あの……』

彼女は呼吸を切つてさゝやいた。……

『うれしいの、うれしいの。忘れないでね。私を忘れないでね。』

『……』

無言で彦一は……苦しいけどやはらかな氣持でちつと彼女を見つめたのだつた。幸江が彼を

仰いで悲しさうに呟いた。

『お別れね。また、きつとね。』

『あゝ、またきつと。』

彼等は悲しいといふよりか、それに浸ることをよろこぶやうに、互にほゝゑみ交した。それは互の心のときめきをきゝ合ふやうに、そつと彼等の二つの胸にだけ忍び込んで行つたのだつた。

明るい電車の中や汽車の中で、彼等はその微笑を幾度となくくり返した。そして新橋に着くと彼等はそこで汽車を棄てた。彦一は彼女をその家まで送つて行つた。さうして夜が更けてから自分の家に歸つて行つたが、その胸の中には幸江の微笑がいつまでも仕舞ひ込まれてゐた。彼はづんづんと頭の痛むのに氣がついたが、疲れた故だと思つて氣にしなかつた。

『あなた貧乏なのね。ほら入れとくわ。』

彼女が彼の臺口を引き出して、十圓札を三枚も入れてくれたことを思ふと、腑甲斐ないやうな自分に恥かしさが感ぜられたけど、その親切は、決して忘れられなかつた。彼は彼女がそんなに使つていゝ金を持つてゐることに、おどろかされてゐはしなかつた。彼女がその上演によつて多くの金を取るやうに考へてゐるからだつた。

家に着いた時は夜が更けてゐた。彼は戸を明けようとして、彼にとびついたものに、おどろかさ

れた。

『あ、お前か。』

彼は百合子が、外にゐたここがわかつたので、たづねた。

『どうしたの、今頃。』

『私、待つてたのよ。』

彼は小さい彼女の切ないやうな聲をきかなかつた。さうして二階に上るこゝ、すぐに土産の指輪と食物を取り出した。百合子はそれをうけ取つても、喜ばうとしないで、青ざめた瞳が彼に強く喰ひ入つてゐた。

彦一は机の上に眼をやると、一つの手紙を見つけて取り上げた。

『あ。』

それは芙美子からだつた。彼は百合子にたづねた。

『いつ來たの。』

『昨夜。』

彦一はそれを開いて何心なく読みはじめた。彼はそれを結婚の日のことの知らせかなかであらうと思つてゐたが、急に彼はわくわくと慄へ出して、冷たい汗が湧いて來るのをおぼえた。彼は青ざめて涙も出なかつた。自分のうづけた心持を鞭うたれるやうな恐れを、彼は烈しい痛みと共に感じてゐた。さうして、それと一しよに頭のうづきが急に烈しくなつて來た。

五

芙美子の送つて來たその手紙は、前のやうにあわたしく書かれたものとは違つて、ゆつくりと自分の決心を告白したものであつた。一句が血を以て書かれ、一句が涙を以て記されてゐるのを、彦一は大きな感動に慄へながら讀みつゞけた。

愛する大谷さま、いま結婚しようとしてゐる私が、この手紙を書きはじめましたのを、あなたはなんと思召すでせうか。虐げられた私は、こゝに私のやうな小なものが、この世に生きてゐる不幸を感じてゐますの。けれど、私は決心いたしました。それは自分を殺さうといふのでもなく、愛を葬らうとする悲しい決心でもなく、よろこんで結婚しながら、愛のために生きようとする、かたい決心でございます。結婚が處女を失ふものとすれば、私はそれをどこまでも死守させよう。愛のない結婚に處女を失ふことが心弱い女の常すれば、私は強くなりませう。私は花嫁として婚の式に列つても、心からも肉體からも彼を拒んで見せませう。それが私のかたい決心であり

30のよ。よろこんで下さいませ。この愛の武装の心持ができてから、私は生々として来ましたわ。さうして結婚の前に心はさわぎながら、決してあわてゝはをりませぬ。

私にこの大きなひらめきををしへてくれましたのは、ヘルムの處女作のやうに言はれてゐる「ユードイト」でした。女主人のユードイトが結婚した夜から夫に病氣になられて、半年の後に處女にして寡婦であるやうな運命をになひますわね。私はそれを生きてゐる夫の前で、新しい決心で實行いたします。私が彼に冷たくするのは、あなたに對する熱い熱い心持からです。お忘れなさらなさいませ。私はそのためなら死ぬかも知れないほど、心を強くして、あなたを待つてゐますのよ。私は一度死んで、あなたの救ひを待つのですわ。そしてあなたの救ひの來る日が、私の甦りでございます。私は信じてゐますの、あなたが私を見棄てゝしまはれる方でないことを。どうぞ、どうぞ、私をこの牢獄の中につながらないで下さいませ。そしてその日を一日も早く、私のために來るやうにして下さいませ。ルビーのことがどうなりますか。私はそのことを心配してゐますの。あの腕輪は、前には私の寶でしたが、今では私の生命をかけたものになりました。あれがなくても、私はあなたのところに、しまひには行くやうになるでせう。けれど私は家に對してだけは、よい娘でありたいのですのよ。母にもですけど、あの理解のある父のことを思ふと、私は弱くならずにはゐられませんの。あゝ、弱い私、私を哀れと思つて下さいませ。私は

やづばり人の子として生まれました。これがきし孤兒でもあつたなら、どんなにうれいこととせう。とはいへ母さへも、この頃は私を見るとおどおどとしてゐますわ。私は母の眼の中に、なにとも言はれないものを感じますのよ。

あゝ、あの小いルビー、あれがこんな役目をしようとは、私は思つてゐませんでしたわ。けれど、今こなれば、私は神に祈るのです。どうぞ、どうぞ、ルビーが発見されて下さいませ。これが悲しい私の、哀れな祈りでございます。

不幸の日、結婚といふ世の中の人の人達に取つては幸福な、私に取つては呪はれた日が近づきました。私達は日比谷で式をあげて、箱根に行くのださうです。それは廿九日でございます。キリストの受難を待つやうな、私の心の慄きをお察し下さいませ。けれど私の決心は變りませぬ。私は清い處女として、心さへも瀆すことをいたしませぬ。神にあたへられた試煉の一つとして、私はまゐります。たゞ、たゞ、あなたの變らぬ心の救ひを待ちながら、私は牢獄にまゐります。それをお察し下さいませ。私の心も、身體も、みんなあなたのものでございます。あゝ、私はあなたのものでございます。

これだけ書いて私は考へましたの。お笑ひ下さいませ。私は神にたづねるやうにたづねたのでしたの。

——あなたが私を待つて下さるか。

私はそれを思ふと恐れてゐます。信じながら、ほんとに恐れてゐますわ。

あゝ、私はあなたの心を知りたいのですよ。

いゝえ、いゝえ、私はうたがひませんわ。私は信じますわ。あなたがどうして私を、この哀れな私を、このまゝになさることをなさいませう。私はそれを信じて私の決心をつらぬいて行きませう。たとへ私は死なうと、これが私の愛のつとめなのですわ。私はさう思つてゐますわ。

あゝ、もし私が死なゝいのなら、私は處女としてあなたを待つてゐるのです。どうぞ、どうぞ、私がこの絶望に見つけた光から見はなされないうやうに祈つて下さいませ。これが私のあなたへのまごころからのお願ひでございます。

四月廿七日深夜……

……芙美子

私の小さい光である 大谷彦一さま

彦一はそれを讀み終ると、またくり返した。青ざめた眼がそこに光つてゐた。彼は立ち上つた。さうして深夜の部屋の中を、まるで大地の上でもあるかのやうに、ぐるぐる歩き廻つた。彼の心が獨樂のやうにめぐつてゐたから、それが現れたかのやうに、彼は忙しく歩きつゞけた。百合子は先に床の中に這入つてゐたが、びつくりして身を起すと彼を見まもつた。彼女はそれか

ら呟いた。

『どうしたんだろ。』

彦一はそれに気がつくつと、べたりと坐つた。彼女がすりよつてのぞき込むと叫んだ。

『あゝ。』

彦一は疲れと痛みに打ち倒れた。

『あゝ、あゝ。』

彦一は夢うつゝに小さい百合子にすがつたのを覚えてゐた。彼はきれきれに呟きながら、頭が割れるやうに痛んだのも覚えてゐた。

『僕は、わ、わるいことをしたんだ。だ、駄目だ、駄目だ。』

彼はそれつきりなにも知らなかつた。さうして彼は夢うつゝの中へ、自分が沈み込んで行くのを止めようとしてもだえたが、それつきり自分を忘れてしまつた。彼女の細い手が彼をかゝへて、その腫がとび出たやうに彼を見つめてゐるのを見たのが彼の終りの意識であつた。

——かくして彼の彷徨するのはいづこであらうか、さうして求めようとしても求められない、暗黒からのうめきはなにゝ喘いで彼を叫ばしめるであらうか。……力があればそこから立ち上り得る。人間はいつも裏にあるところの苦惱をとほして、はじめて人生の深い底をうかゞひ、かくして

自らの強い使命をさとり得る——苦惱はかくて人生を指示する強い力のあらはれであるのだ。

第五篇・夏の高原

ニヒリストの没落